

二〇一九年度学位論文（博士）

# 縄文土器の環境と造形

## —「大川式土器」から縄文を紐解く—

Environment and Form of Jomon Pottery

—Revaluation of styles founded on analysis of The Oko-type earthenware—

京都造形芸術大学  
芸術研究科芸術専攻

神先智子

# 目次

## 序

縄文ブーム	1
-------	---

言説史	1
-----	---

縄文土器の造形に対する今日の見解と課題	3
---------------------	---

第一章 縄文土器の研究史および問題点	5
--------------------	---

第一節 明治維新以前	5
------------	---

第二節 戦前の「皇国史観」による思想操作	6
----------------------	---

第三節 戦後の考古学の展開と縄文土器編年表	6
-----------------------	---

第四節 自然科学の導入	7
-------------	---

第五節 遺跡の全容は明らかになっていない	8
----------------------	---

第六節 残された課題	9
------------	---

小結	10
----	----

第二章 環境と造形	11
-----------	----

第一節 定住と縄文集落	11
-------------	----

第二節 集落の規模と社会の枠組み	13
------------------	----

第三節 大川式土器遺跡群と笹山遺跡	14
-------------------	----

第四節 縄文時代の格差社会―縄文ユートピア伝説―	16
--------------------------	----

第五節 社会の枠組みと造形との関係	17
-------------------	----

小結	18
----	----

第三章 制作技術と造形	19
-------------	----

第一節 土器作りの実態	19
-------------	----

第二節 精製土器と粗製土器	21
---------------	----

第三節 大川式土器	22
-----------	----

造形分析	22
------	----

土器制作	24
------	----

第四節 火焰型土器	26
-----------	----

造形分析	26
------	----

土器制作	28
------	----

第五節 近畿圏の押型文土器変遷	29
-----------------	----

ネガティブ文	29
--------	----

ポジティブ文	31
--------	----

第六節 尖底土器	31
----------	----

小結	32
----	----

結論	33
----	----

注釈	34
----	----

参考文献	44
------	----

図版	48
----	----

## 序

### 縄文ブーム

近年「縄文」がブームになっているようである。それは縄文土器の造形的な魅力もさることながら、縄文時代の人々の精神性への憧れ、その生活様式に自然回帰への憧れがあるのかもしれない。

縄文時代は、日本のみならず世界からも注目されている。小林達雄は『縄文文化が日本人の未来を拓く』で次の様に縄文文化を紹介している。

「日本文化は、今も世界的に注目されています。それは注目する個性を持っているからです。ほかのどの文化にもない特殊で独自のものがあるのです。それはなぜかと言ったら、欧米や大陸の国々の歴史の中にはない歴史を持っているからです。」

それは縄文時代という、1万年以上にわたる自然と共存共生した歴史です。

新石器時代で農耕とともに定住するようになった大陸側の人々は、自然と共生しないで自然を征服しようとしてきました。人工的なムラの外側には人工的な機能を持つ耕作地（ノラ）があり、ムラの周りの自然は、開墾すべき対象だったのです。一方の縄文は、「狩猟、漁労、採集」によって定住を果たしていたため、ムラ（ハラ）を温存してきました。自然の秩序を保ちながら、自然の恵みをそのまま利用するという作戦を実践しつづけてきたわけです。それが1000年、2000年ではなくて1万年以上続くのです。<sup>1</sup>

これは現代に生きる我々が、縄文に魅かれる理由をとて端的に表している。このような縄文時代の紹介の仕方が、縄文時代に神秘性や希望めいた事を求める気持ちが生まれる要因となっているのではないだろうか。

縄文時代研究において中心となっているのは、土器の研究である。その理由は、一つはその造形美の魅力であることも大きいですが、考古学的資料として非常に優れた遺物であるからである。素焼きであるため腐らず残存率が高いため、

他の遺物に比べて圧倒的に出土量が多い。食べ物の煮炊きに使われたという一番身近な実用品でもあり、当時の人々との生活を知る上での情報が多く含まれている。土器に付着している炭化物から、当時の食料事情を推察することが可能であり、その遺物から絶対年代を割り出すことも今日可能になっている。したがって、時代や地域の特長などに非常に有効な遺物なのである。それらの情報は、時代、地域共に細かく、縄文土器編年表としてまとめられ、縄文研究の指針になっている。

縄文土器は造形の卓越さに世界から注目されている。その造形の特徴を最初に指摘したのは、大森貝塚を発見したE・S・モース<sup>2</sup>である。それは、①量が非常に多い、②形・模様が千差万別である、③波状口縁や突起をもつ口縁部が多い④縄文を持つものが多い、⑤台や脚を備えるものが少なく、⑥像（人や動物）を表したものが少ない、という分析であった。

また、土器は農耕民に発達するものだが、狩猟採集民も土器は使用する。農耕民は貯蔵、貯蔵盛り付けなどと土器は多数の種類を要するが、狩猟採集民は煮炊き用の深鉢が主流であり、丸底・尖底が多く、装飾は比較的簡素である。その中で、狩猟採集民の土器としては、縄文土器は他に類をみない変化に富む珍しい存在なのである<sup>3</sup>。

### 言説史

縄文時代は最初から注目されていた訳ではない。モースが貝塚を発見して以来、縄文時代の研究は一気に進んだかに見えたが、それはごく一部の研究者の間での事であった。長年日本の歴史は弥生時代から始まり、それ以前の人々は先住民とされ、大和民族と区別されていた。日本美術史も弥生時代の銅鐸から始まっており、縄文土器は掲載されていなかった。縄文時代が注目されて来たきっかけは、土器の評価による所が大きい。縄文土器が日本の美術として認識されたため、研究者以外の人にも縄文時代が認識され、ブームへと繋がっていったのではないか。

考古学と美術の橋渡しをしたのは、中谷治宇治朗<sup>4</sup>ではないだろうか。彼は

縄文土器の中の注口土器を形態学から分類し、複数の文化圏を割り出した<sup>5</sup>。が、当時の日本の考古学会では受け入れられず、フランスのパリへ留学する。そこで一九三〇年、雑誌『ドキュマン』に「日本の新石器時代の土偶」という論文を発表する。それは縄文の土偶の形態を六種類に分類したものであり、同時に、縄文土器の図版が五枚掲載される。この『ドキュマン』誌は当時、科学者や芸術家など多くのジャンルの専門家が共同して編集に携わっていたものである。当時の西欧アートの閉塞を考古学や民俗学が対象とする「未開社会」と対峙させることによって、新しいものを生み出そうという思想運動の拠点でもあった。それはジョルジョ・バタイユが編集の中心となり、「民族誌的シュルレアリスム<sup>6</sup>」として意図的に展開された運動の中心となった雑誌である。これにより、それまで考古資料としてしか扱われなかった土器や土偶が、ダリ、ミロ、ピカソ、などの作品と並んで掲載されたのである。パリの芸術家たちはそれによって刺激を受けたが、中谷はあくまでこれらを考古資料として扱った<sup>7</sup>。

日本で縄文土器をメディアに紹介し、考古学者以外の一般人に広めたのは、岡本太郎ではないだろうか。中谷の『ドキュマン』発表から二〇年後の一九五二年、パリから帰国した岡本は、雑誌『みずゑ』に『四次元との対話縄文土器論』を掲載した。それには冒頭に火焰型土器の写真を掲載し、火焰型土器について論じている。彼はその論文で、縄文土器に、原始的逞しき、純粹さ、人間の根源的情熱があり、そこに日本文化の原点があると主張した。火焰型土器の文様は、超自然的な世界との交渉した証とし、それは「四次元との対話」であり、その造形は、「超自然的な意志の働きを確信させる」と主張した。さらにその力を「呪術」であると述べている。その反面、日本の伝統文化の基礎ともいべき、「わび」「さび」「渋み」の文化を封建的で、繊弱で平面的だと批判した<sup>8</sup>。

この論文は、これまでの日本文化を批判したという衝撃と、『みずゑ』という媒体を使う事で、美術家、考古学者のみならず、多くの人の眼に触れる事になり影響は大きかったといえる。

岡本はパリ留学でバタイユとも交流があり、この論文はその思想を反映した

ものと思われる。一方で、何とか今までの日本の伝統という概念を打ち破りたいという岡本にとって、うってつけの題材でもあったのではないだろうか。

しかしこの時、岡本は、火焰型土器を観ていない。一九五一年一月七日『みずゑ』の原稿依頼で、上野の国立博物館で「日本古代文化展」を観ている。その時、縄文土器も展示されていたが、火焰型土器は一点も出品されていなかった。ただ、その時の解説本に、火焰型土器が一点掲載されていた。おそらく、編集者との打ち合わせで、火焰型土器の写真を使う方がインパクトがあるとの判断が下されたのではないか。そして冒頭にこの火焰型土器の写真を掲載することになったと思われる<sup>9</sup>。しかし、彼の秘書であり、養女でもあった岡本敏子は太郎は火焰型土器よりも初期のごっこした土器の方を好んだと語っている<sup>10</sup>。結果岡本の思惑通り、縄文はそれまで見向きもされなかったのに、一大ブームを巻き起こす。翌年の一九五三年六月、東京国立博物館編の『日本美術全集』では、「縄文式土器上古時代」として掲載された。その後の美術全集は、縄文時代が巻頭を飾ることとなる。一九六四年には、考古学者の山内清男の編集により『日本原始美術1縄文土器』が講談社から刊行される。その後の美術全集では、第一巻に縄文土器が掲載され、考古学者達が執筆する。これらの内容は、明らかに岡本太郎の影響を受けていると思われるが、彼の事には触れていない。

岡本自身はその後、火焰型土器に触発されたと思われる彫刻をいくつも作っていくのである。彼はそれでよかったのだろうか？彼の好きだったものは、草創期や早期の土器ではなかったのか。それとも火焰型土器のブームに乗っかっている内に、彼自身の価値観も変わってしまったのだろうか？

他の人々はどうであろうか？岡本の言葉がなければ、あれほどまでに縄文に、火焰型土器に魅かれたであろうか？

彼が魅かれたものは何だったのであるか？縄文の精神性なのだろうか？縄文土器のビジュアルなのだろうか？

岡本太郎の内面はどうであれ、彼は、縄文土器を歴史の表舞台に引き出したのである。縄文土器と云うよりは、火焰型土器に焦点を当て、日本美術の原点としたのである。これによって、縄文土器の中で、火焰型土器が突出して注目



されるようになる。次に火焰型土器に焦点を当てたのが、梅原猛である。

梅原猛は哲学者であり、日本の美を追究したことで知られている。縄文研究でも知られており、多くの著書を残している。彼はもっぱら縄文時代の精神性を追究していた。

その中の『縄文の神秘』から、梅原の縄文哲学を見てみる。縄文土器が全面に隙間なく施文してある事について、「空白の恐怖」というべきものが存在し、「空白の所があればそこから悪魔が侵入して来る為、空白は埋めなければならぬ」という縄文人の世界観に基づいていると言う。また文様は、呪術的な意味があつたとし、貝殻文様は貝の魂を、爪型文は人間の魂を、縄文は木の魂を土器に注入して悪霊を防ぐとし、勝坂式土器に多く使われている蛇の文様は、恐ろしい敵を神として崇拝し、蛇の毒から人間を守ろうとしたのだと解釈している。また火焰型土器に対しては、「日本の最もすぐれた土器」と称賛し、その文様は勝坂式土器の変形で、蛇が火となつて昇天する姿だと解釈した<sup>11)</sup>。このような呪術的解釈が、縄文への神秘性を高めたと云える。

また梅原は、岡本太郎にも触れている。岡本太郎が縄文に魅かれたのは、ピカソが黒人芸術に魅かれたのと同じように、リアリズム芸術が行き詰まり、新しい物を求めようとする時、それらの裏側にある精神性を見出したのだとする。しかし、彼らに対して梅原はこう記述している。

「ピカソも岡本太郎も、その世界観の入口まで行つて、その背後のものに芸術家の直観で深い感銘を覚えたけれど、そこから彼らは近代人の世界観に引き返してきたように思われる。もつと奥へ入らねばならない。もつと奥へ入れば別の世界が見えて来る。別の世界がみえてきたところで、芸術理論を根本的に考え直したらどうであろう<sup>12)</sup>」

火焰型土器は縄文土器で唯一国宝に指定されている。これに至るには梅原の影響が大きかったのではないだろうか。

美術雑誌『芸術新潮』一九九〇年新年号にて、次に国宝に指定すべき美術品は何かと編集者に尋ねられ、笹山遺跡から出土した火焰型土器を推薦している。

「かつて岡本太郎がいみじくも指摘したように縄文土器や土偶ほど優れた芸術品は日本の全芸術を見渡してもあまり見当たらないのである。この土器の頂

点が火焰土器であると言えよう。この火焰土器と呼ばれる馬高式土器はまむしの文様を中心とした勝坂式土器の変容であろう。ここでは、勝坂式土器において、あるいはとぐろを巻いて地上を我がもの顔に横行する蛇がついに火焰となつて天に昇る感がある。ここにはすざましいエネルギーがあるが、それでいて、それは静謐な思弁が秘められているのである。」と述べている。

この発言がきっかけとなり、火焰型土器は一気に知名度が上がり、国内外の展覧会でも注目されるようになった。一九九二年、アメリカ・ワシントンのアーサー・M・サックラー美術館での「古代の日本展」、一九九八年、フランス・パリの日本文化館で「縄文展」が開催された。どちらにも笹山遺跡から出土した火焰型土器が出展され、絶賛を博したのである。

そしてついに、一九九九年六月に笹山遺跡出土品九二八点が国宝に指定される。その内一四点が火焰型土器である。縄文土器として初めての国宝指定である<sup>13)</sup>。

今日は縄文がブームになっているのはこういった言説による所も大きいのではないだろうか。また縄文土器と云えば、火焰型土器だと思っている人も多いのではないだろうか。縄文を紹介する文献や冊子は、火焰型土器をデザインしたものが多くみられる。展覧会も火焰型土器が中心となっている物が多いようである。

二〇一七年京都大学総合博物館で開かれた「火焰型土器と西の縄文」展<sup>14)</sup>では、京都で開かれた展覧会であるにも関わらず、展示は火焰型土器が中心であった。会場に入ると火焰型土器と王冠土器がずらりと並び、奥の方に京都大学校内から出土した早期から晩期に至る土器がひっそりと展示されていた。タイトルもカタログも火焰型土器が最初である。

また、二〇一八年、東京国立博物館での「縄文」展<sup>15)</sup>では、火焰型土器が中心に展示され、カタログの表紙も火焰型土器であった。

### 縄文土器の造形に対する今日の見解と課題

確かに「火焰型土器」その文様が炎のように見える事から名付けられた名称

<sup>16</sup>であり、豪雪地帯の新潟を中心に分布している為、雪国故の雪解けの春を待つエネルギーの象徴のように言われることがあるが<sup>17</sup>、学術的根拠はない。しかし、装飾が立体的であり、インパクトもあり、見栄えも良く、手の込んだかに見える造りは特出したもので、興味を惹かれるのは否めない。だが縄文土器の造形的な評価や注目には火燧型土器に集まり、他の土器が見落とされていないだろうか。

火燧型土器は、約一万六千五百年前から約二千三百年前の縄文時代の一萬三千年余りの長い間の中で、五三〇〇年前頃から、四八〇〇年前頃までのわずかに五〇〇年間程度だけで、ある特定の限られた地域にのみ存在していた土器である。縄文土器は、違うスタイルの土器様式の方が多いのである。

縄文土器は、それぞれの時代、それぞれ地域の中で個別に様式を持ち、造形的に確立されたものが見られる。時代や地域を反映し、造形的な価値観も多様であるべきはずであり、他の土器も造形的に評価出来る物は数多くある。そこで本論は、縄文時代早期の近畿圏の土器である「大川式土器」を取り上げ、「火燧型土器」と比較することによって、その造形を環境から分析し、価値観の違いも一つの縄文土器の頂点を明らかにしようとするものである。

縄文土器の研究は、どの時代においても驚くほど細かい分析がなされており、研究者達は、ひとかけらの土器片から、どの時代、どの地域、そしてその土器の前と後の編年まで言い当てるという程の精密さを持っている。それは、それだけ縄文土器の研究が丁寧になされている事でもあり、それだけ縄文土器は、地域、時代のルールにのっとって制作されていたという事にもなる。この世界的に見て「優れた造形」と評価されている「縄文土器」は、縄文人にとってどんな存在であったのだろうか。もちろん実用の道具であったのは間違いないであろうが、「造形」として捉えていたのだろうか。草創期や早期に見られる、土器の内側まで施文してある表裏文土器。土器の内側に施文が必要なのだろうか？そして火燧型土器等に見られるような実用にはかえって不都合だと思われる立体的な文様。それらは彼らが、ただ部族のルールにのっとって作ったに過ぎないのだろうか？

縄文土器は土器全体に文様を施しているものが多い。これは前述した梅原の指摘にもある様に、隙間から悪魔が入って来ないように空間を埋め尽くすという、空白恐怖症<sup>18</sup>に基づいているのではないかとの見方がある。またその文様に精神世界を見出そうとし、その意味を解読しようとする研究者も多い。

火燧型土器と同じ中期の立体的な文様を成す井戸尻式土器について、井戸尻考古博物館では、日本の古事記や中国の仰韶文化<sup>19</sup>に照らし合わせて、文様を読み解く研究が成されている<sup>20</sup>。このように、中部地方の井戸尻式土器、関東の勝坂式土器など、これら中期の土器はいずれも立体的な文様が施されて、神話的な解説がなされている。確かに、これ等の文様は神秘的で思考を誘発する。自然と対峙していた、狩猟採集民という彼らにとつて、自然は恵みをもたらす尊いものであると同時に、未知なるもの、恐怖でもあった。それを敬い、恐怖から逃れ、恵みを願うというストーリーにこれらの土器の文様は、非常によく合致する。火燧型土器は、その文様の施文の仕方、出土の状態から少し違った解釈がされている<sup>21</sup>が、世界観は通じるものがある。そしてまたこれらの土器が出現する社会は、「精神性の高い社会」「高度な社会組織」と評される、環状集落の地域とピタリと重なるのである<sup>22</sup>。

環状集落の在り方にも現在、疑問が投げられているが<sup>23</sup>、「高度な社会が構築出来た為、人口も増大し、精神文化が発達し、土器の造形も素晴らしいものになった。」という構図で見られがちである。しかし、人口が増大し、社会組織が構築され、精神文化が発達したことは「高度な社会」になった証拠なのである。また、立体的な複雑な文様を付ける事は造形的に優れていて、大川式土器のような早期の押型文土器は、単純な造形としてみられる傾向がある。果たして押型文土器は単純な造形なのだろうか。

この「環境」と「造形」の二つの疑問から、その関連性を検討し、それによつて、当時の人々の価値観や、自然に対する接し方を推察し、環境が造形にどう影響するか、又は環境をどう解釈したかを探っていく、大川式土器の造形としての分析、環境に対しての在り方を模索していきたい。

第一章では、現代の縄文研究と問題点を考察していく。第一節では、明治維新以前の研究、あるいは先史時代の研究がどのように行われてきたのかを探る。

第二節では、戦前の「皇国史観」の思想統制のもと、縄文研究の方向性と思想操作に利用された経緯を考察する。第三節では、思想操作から解放された研究の経緯と、縄文土器編年表の成立と問題点を提示する。第四章では考古学に取り入れられた自然科学の技術の価値と問題点を考察する。第五章では、発掘による遺跡の全容解明は困難な事を示唆する。第六章では、縄文研究者ではない目線から、問題点を割り出し、今後の課題を問う。

第二章では、環境と造形の関係を、造形に最も影響を与える環境と思われる人間関係を中心に、考察していく。第一節では、縄文時代特有の幾つかの定住パターンを考察する。第二節では、縄文時代の早期の近畿圏の集落と、東日本の中期の環状集落の在り方の違いを考察。第三節では、早期の近畿圏の大川式土器出土の土器群と新潟の集落を具体的に取り上げる。第四節では、縄文時代の格差社会について、現在どのような解釈が成されているのかを明確にする。第五節では、早期の近畿地方、中期の新潟のそれぞれの集落を生んだ必然性と、そこにある土器の意味を考察する。

第三章では、土器の観察と制作から、土器の造形を考察していく。第一節では、土器づくりが日常でどのように行われていたのかを割り出す。第二節では、精製土器と粗製土器の二種類の意味と問題点を提示する。第三節では、大川式土器について、観察と実際の制作から造形の特性を検証する。第四節では、火焰型土器を観察と、先行研究による火焰型土器の制作の考察から、土器の特性を検証する。第五節では、近畿圏の押型文土器の変遷から、大川式土器の造形的な流れを確認する。第六節では、尖底土器という造形についてあらためて見直す。

これらの事を考察する事によって、造形と環境との関係を検証し、尖底土器である大川式土器の造形の特性から、縄文土器の造形の一つの到達点を見出す。それと同時に、社会の在り方と造形との関係の一つの関係を導き出す。

## 第一章 縄文の研究史および問題点

### 第一節 明治維新以前

一六二三年に津軽藩主二代目の津軽信枚が亀ヶ岡に城を築こうとした際、土偶や土器が出土した。『永禄日記<sup>24</sup>』にこの土器や土偶の記載がある。これが縄文土器に関しては最古の記録となる。この亀ヶ岡の土器や土偶は、当時の人々には奇異に映った<sup>25</sup>。これが現在でも有名な亀ヶ岡遺跡の記述である。

一代将軍家斉の頃（一八二三年頃）小説家の滝沢馬琴など学者や文人が数人集まって、「耽奇会」と言う会を作り、毎月集まって、縄文土器などの各々自慢の発掘品を持ち寄り、会合を開いていた<sup>26</sup>。

菅江真澄<sup>27</sup>は考古学者でもあり、東北地方や北海道など各地を歩いて調査をした。そして亀ヶ岡遺跡を始め、三内丸山の土器など様々な土器を研究し『新古祝甕類之図』という書物にまとめており、その中に根室の土器をアイヌのものであるという記述がある<sup>28</sup>。また彼の書である『すみかの山』には三内丸山にて採集した土器片が詳細なスケッチと共に記述されている<sup>29</sup>。

また藤原貞幹<sup>30</sup>は京都の岡崎で掘り出した土器を『好古小録<sup>31</sup>』にまとめている。近江の木内石亭<sup>32</sup>は、石器の研究を『雲根志<sup>33</sup>』で発表し<sup>34</sup>、会津藩士の田邨三省<sup>35</sup>は、石鏃の出る処には、必ず古川（土器）のかげらがある事に気づき、その関係を『会津石譜<sup>36</sup>』にまとめている<sup>37</sup>。

他に遺跡の記述としては、一八〇四〜三〇年頃に、幕府によって編纂された『新編武蔵風土記<sup>38</sup>』、斎藤長秋<sup>39</sup>の『江戸名所図会<sup>40</sup>』の荏原郡、駒場野の条に記載がある。遺跡としての最も具体的な記述は、一八六九年、杉本林志<sup>41</sup>の『狭山の栞<sup>42</sup>』に東京の国分寺付近の民家の庭からの出土状況を記録しているものがある<sup>43</sup>。

このように江戸時代は他にも縄文時代の出土遺物を記載した書物が幾つか残されている。記録を残した彼らはかなり実測に基づいた、客観的な報告をしていたが、いずれも後継者がいず、残念なことに研究は継承されなかった<sup>44</sup>。

## 第二節 戦前の「皇国史観」による思想操作

開国によって世界に眼を向けた明治政府は、『古事記』『日本書紀』による皇国史観の思想を軸とした、近代的資本主義国家の建設を目指していた。天皇制絶対主義の国家観を強化するため、神話的古代史を日本の歴史とし、それを教育の柱とした。

それは国家が目指した近代性とは逆方向に向かう事であるが、諸外国に対抗するため、「日本」いう国を強固にする手段としたのである。しかし、それによつて考古学の近代化は大幅に遅れる事となる<sup>45</sup>。江戸時代の後半に、木内右亭や田邨三省、杉本林志などといった発掘された遺物に基づいて研究されていた客観的な観察眼が失われていくのである。

一八七七年、アメリカ人モースによつて大森貝塚が発見される。貝塚は鉄道の開発に伴つて地上に露出していたものを、彼が横浜から東京へ向かう車窓から発見した。当時は誰もそれを貝塚とは思わなかった。しかし彼は生物学・解剖学・地質学を学び、アメリカでは貝塚調査も行つていた為、一目見て貝塚だと見抜いたのである。彼は科学的な調査技術に基づき、発見の二年後発掘調査をした。この発掘調査は日本で初めての本格的な科学的な調査となる。多くの貴重な学術的な報告の中に、人骨に、明らかに人が故意につけたであろうと思われる殺傷跡があった為、モースは食人説を唱えた<sup>46</sup>。これが学術調査の内容より大きな問題となる。政府による皇国史観に反するもので、大バッシングを受けた。しかしながら、この発掘調査によつて書かれた報告書である『大森貝塚古物編<sup>47</sup>』は科学的な考古学的調査に基づいて書かれており、その後の考古学研究のバイブルとなる。

しかし現実には、皇国史観に支配されており、さらにモースの食人説は言語道断であった。そこで、縄文時代の人々は日本人ではなく、コロボツクルかアイヌの先住民族であるとされ、モースの調査に対して、科学的な研究がされてこなかった。この先住民族説は政府にとつても都合が良かったのか、大いに盛り上がったようである。アイヌ説を唱えるのは、東京帝国大学医学部の解剖学教授であつた小金井良精<sup>48</sup>は、解剖学の観点から、「石器時代人Ⅱアイヌ」説を

主張し、また坪井正五郎は、アイヌ人は土器・石器を持たないことから、コロボツクル説を支持した<sup>49・50</sup>。

つまり、石器を使うような野蛮な縄文人は誇り高い「大和民族」とは違う事を証明したかったのである。政府は考古学を「大和民族」を証明するための学問として利用したのである。

世の中は日本帝国主義を掲げてアジアに侵攻し、神話に基づいた思想である皇国史観で武装し、世界に打つて出ようとしていた時期である。政府は、『古事記』『日本書紀』を中心とした皇国史観を確立させた。その思想が戦後まで引き継がれていくのである。

## 第三節 戦後の考古学の展開と縄文土器編年表

第二次世界大戦の敗戦により思想統制は解除され、一三〇〇年続いた神話にもとづく日本の歴史は終わりを告げる。さらに、敗戦から四年後、旧石器時代の石槍が岩宿で発見され、旧石器時代から、日本列島に人が住んでいたことが確認された<sup>51</sup>。

皇国史観に基づく思想統制の中でも、大正時代に入ると大正デモクラシーの波に乗つて、実証的考古学が取り入れられていた。それは、京都大学の浜田耕作がドイツから持ちかえつた「型式学」と、松本彦七郎が地質学から取り入れた、「層位学」である。

「型式学」とは一八七〇年代に、スウェーデンの考古学者H・ヒンデブラントとO・モンテリウスによつて基礎がつくられた。これはC・ダーウィンの『種の起源』が基になっている。「人間が物を作るにおいて自然発生的に考えられるのは、進化論の法則に従っている」というものである。人間が「ものを作る」という行為は、自身の帰属する社会からの要求にもとづいてつくられる。そのため、同集団で同時期に作られた物には共通性があり、他の一群から区別できる。このまとまりを一つの「型式」とするといふものである。そしてその変化は、進化論と同様に変化し、形は単純なものから複雑なものになり、又単純な

ものに還るといふ方向性を示し「失能的成体＝痕跡器官」という理論である。

「層位学」とは、地質学における「地層累重の法則」に基づき、より新しい地層はより古い地層の上に重なるという原則のもと、出土した遺物の新旧、相對年代を割り出すという手法である<sup>52</sup>。

この二つの方法を用いて、土器の新旧を割り出し、そして一九二八年、山内清男・甲野勇・八幡一郎等によって「縄文土器編年表」の大綱を示した。その後、中央・地方を問わず、全国の何百何千という研究者が発掘調査をし、分類し、新型式を設定し、各地域ごとに編年表を作り上げていった。

この縄文土器編年表の編纂の中心人物となつたのは、山内清男である。山内は、日本列島の各地から出土した弥生以前の土器は、全て「縄文土器」としたうえで編纂であった。山内は、土器は渡来したものであり、その後日本列島内で独自の発展を遂げ、土器は制作することに変化をするものであるとし、大陸など他からの影響は受けなかったものと考えていた。日本列島に存在する縄文土器は、全て同じ系列を持つものとし、「縄文土器一系統説」を論じたのである<sup>53</sup>。これに対し、佐藤達夫は異論を唱えた。山内の説からいうと、同所に併存する異形等の土器は他地域からの搬入品とみなされるが、佐藤は別々の型式として取り扱うべきだといふものである。つまり、それぞれ由来を異にする土器があるということである。佐藤はそれを一九七四年「異形土器論」として発表する<sup>54</sup>。

大塚達郎は佐藤の「異形土器論」を發展させ、佐藤が指摘した、一個体の土器に異形等の文様が施される場合の土器を「キメラ土器」とし、その研究を進める事で、これまで内在的にしか型式変化を捉えてこなかった縄文土器研究に対して、外在的な要因を取り入れようとしている。これによって由来を異にする土器群が日本列島に複数存在していたことや、それらの土器群の消長が複雑であったことを明らかにすることにつながるとし、日本列島の先史土器の多文化的再編成の可能性を示唆している<sup>55</sup>。また、二〇一七年の「山内清男の縄文文化モデルの難点」<sup>56</sup>では、山内清男の「縄文土器一系統説」は、「更新世と完新世にまたがってどのような気候環境下であっても一万年以上続くという意味でのハイパー縄紋文化が描かれてしまった」と批判している<sup>57</sup>。

山内は、土器の年代が放射性炭素年代測定によって、時代がどんどん遡っていった時、別の時代設定はせず、早期以前の時代を「縄文時代草創期」とし、縄文時代に取り込んでいったのである。それがもたくなって、「縄文時代」は一万三〇〇〇年余りの長い期間の時代設定になり、日本列島全体を同じ文化圏にしてしまった大きな要因ともなった。

また、山内は縄文時代を研究するにあたって、土器の編年表を作る事を重視し、遺跡の環境や、他の遺物との関連などは二の次にした。その為、縄文時代の社会的組織の在り方や生活の実態などの調査は遅れた。しかし一方、山内のこの努力の結果、日本の「縄文土器編年表」は世界でもまれにみる精密な編年表となつたのである。

#### 第四節 自然科学の導入

考古学の調査方法は、発掘による遺物や遺構の観察からおこなわれる。その方法は、層位学、型式学が中心に進められてきたが、近年、そこに自然科学が導入された。画期的だったのが、放射性炭素年代測定<sup>58</sup>である。これは生物内にある放射性炭素一四が五七三〇年で半減する事から、炭化物などの遺物からその放射線の残存率を割り出して年代を測定するというものである。その後、放射性炭素測定にも誤差がある事が分かり、複数の測定法により年代を較正している。較正には、樹木の年輪を比較する年輪年代法<sup>59</sup>が最も有効だとされている。最近の放射性年代測定は、AMS法が主流になっている。それは必要とする炭素試料が、一ミリグラム以下という微量で済むことや、誤差が少ないなどの利点がある為である<sup>60</sup>。

日本で最初に土器の放射性年代測定がされたのは、一九五〇年（昭和二五）芹沢長介らによる神奈川県横須賀市の夏島貝塚での早期と思われる土器の測定である。同じ地層にあった牡蠣の貝殻や木片をアメリカのミシガン大学に送り測定した結果、土器は九〇〇〇年前（九四五〇±四〇〇年BP、九二四〇±五〇〇年BP）のものと判明した（杉原一九六四年）。この時点で、夏島貝塚の土器は世界最古の数値を示した<sup>61</sup>。当時、漠然と縄文土器は四〇〇〇〜五〇

〇〇年前を遡る事はないと思われていた。この時、日本の考古学会は新しい年代観を受け入れる側と、測定方法に問題があり従来の年代観に変更する必要があるという二つに分裂した。この炭素一四年代測定は、世界各地で大きな衝撃もたらし、考古学の歴史を塗り替えることになる。この測定が進むにつれ次第に炭素一四年代を根拠とする年代観は受け入れられていく<sup>62</sup>。

年代を測定するほかに、科学調査として導入されたのは、レントゲンの撮影がある。これは土器や土偶の調査に有効であり、土器の粘土紐の構造や土偶の内部を探る調査<sup>63</sup>が行われた。

また生物学では、DNAの測定も導入されており、以前から問題となっていた縄文時代の植物栽培の有無において、三内丸山遺跡での花粉の分布調査により、栗の木が栽培されていたことが証明された<sup>64</sup>。また、縄文時代中期前葉の遺跡である滋賀県の粟津湖底遺跡第3貝塚では、セタシジミの貝殻成長線分析の結果、貝層は春から夏に堆積したものと判断された<sup>65</sup>。それは秋の収穫物である堅果類と層を別に形成されており、このことから当時の人々の季節性を読み解くことが出来、第3貝塚は通年利用されていたことが明らかにされた<sup>66</sup>。

## 第五節 遺跡の全容は明らかになっていない

発掘においても大きく変化があった。遺跡の発見は、偶然によるものがほとんどである。多くは、土地の開発事業などによって、発見される。戦後、日本は急速に経済が発展し、多くの大規模な都市開発が行われた。一九七二年、時の総理大臣、田中角栄が「日本列島改造論」にもとづく政策により、過密都市から地方への工業分散、地方都市の整備、高速道路や新幹線の建設などの大規模な開発が行われた。それによってそれまでとは比べ物にならない規模で遺跡が発見された。時代層は旧石器時代から縄文、弥生、近世にまで至る遺跡も数多く発見されていく。このような大規模な発掘が全国各地であり、次第に集落の様子が明らかになっていく。しかし、いくら大規模な遺跡が発見されたからとはいえ、集落の全容が明らかになった訳ではない。

大川式土器が発見された大川遺跡は、一九五七年、第一次調査が行われ、その後、一九七九年～一九八三年に二次から五次調査、一九九九年に第六次、二〇〇一年に第七次と、合計七回に渡って発掘調査が行われたが、調査された面積はごくわずかであった。

遺跡の範囲は、第二次から五次の調査で松田真一が遺跡の存在が推定できる範囲を想定したが、実際発掘調査されたのは一割にも満たなかった<sup>67</sup>。

第七次調査の報告書によると、遺跡の立地する南側から西にかけて泉・小川・湿地帯が存在していたと予想され、この場所が飲料水の確保と植物質資料の加工場として利用されたと推測されたが、発掘調査はされなかった。加えて、遺跡は名張川の西側にあり、東側は発掘されていない。おそらくそこにも生活の痕跡があろう。また、大川遺跡周辺の半径二・三km以内に縄文時代早期および後期の集落址が存在し、名張川の本流、支流の河岸段丘上に立地している。第六・七次調査をした石井香代子は、河岸段丘を広い範囲に発掘調査すれば広範囲な遺跡が存在する可能性を示唆している<sup>68</sup>。

近年、大規模な発掘で知られるのは三内丸山遺跡があげられる。この遺跡は江戸時代から存在が知られており、すでに一九七六年に大掛かりな発掘調査が行われ、大型掘立柱建物跡も検出されていた。一九九二年に青森県の県営野球場を建設する際に再び大規模な発掘調査が成され、貴重な遺構が数多く発見され、遺跡も他に類をみないほどの規模であったが、保存されることとなった。縄文時代の集落の全容がわかると話題になったが、同時に多くの問題も含まれている。

遺跡の範囲は三五ヘクタール（東京ドーム七個分）と推定された。縄文時代前期中頃から中期中葉にかけての遺跡であり、大型竪穴住居が一〇棟以上、約七八〇軒の居住跡が発見されるという大掛かりな規模であった。しかし実際に発掘調査されたのは全体の七分の一の五ヘクタールである<sup>69</sup>。

この時、発掘されたのが遺跡の一部に過ぎないということと、もう一つ重要な要素が欠落していた。それは住居の同時存在の確認がされなかったことである。それにより、実際の居住状態が不明確である為、多くの論争を巻き起こすことになった。ムラの構成に関して、調査責任者である岡田康博は、住居は一

〇〇軒程が同時存在し、人口は五〇〇人程度だった可能性も考えられると試算した<sup>70</sup>。しかし、山田昌久は、住居の耐久年数から中期に同時存在していた住居数は、多くても二八軒、人口は八〇人から一二〇人程度だと試算した<sup>71</sup>。しかし出土土器の編年が確定されておらず、集落人口の根拠となる居住面積と同時居住数を確定できていない為、鈴木克彦は三内丸山の報告は、架空数値であると言う<sup>72</sup>。現在ではこの論争は解決していない。

また、消滅してしまった遺跡がある事も認識しておかなければならない。草創期や早期、西日本の後期までの縄文時代全般は、移動生活が頻繁に行われており、季節によつて住居の移動もあった。そのような状態では、住居も簡易的であつたと考えられる為、遺跡としては残りにくい。従つて、発掘された住居址より多くの居住空間があつたと見るべきである。

多くの遺跡は、全体のごく一部しか発掘調査されていない。さらに、ある塊が途切れた所で、遺跡の終わりだとは言えない。少し離れてまた集落があつたりする。全容を知る為には日本全土を発掘しなければわからない。しかしそんなことは不可能である。従つて埋もれている部分が大部分だと考えなければならぬ。それを踏まえて考察していくことが重要である。

## 第六節 残された課題

まず「縄文」と云う言葉の扱い方である。この魅力的な言葉は、多くの問題を飲み込んでしまつてはいないだろうか。

時代設定については、見解の違いによつて諸説ある。その代表的なものは、土器の使用をもつてその始まりとする説と、生活形態によつて区分する説がある。前者は、一九九八年青森県、大台山元Ⅰ遺跡で発見された土器が放射性炭素年代測定法で一六、五〇〇年前を示したことにより、これは当時から今に至るまで、日本列島で最古の数字を示しており、これをもつて、縄文時代の起源とする説である。

後者の場合は、一二、〇〇〇年前頃を基点としている。この時期は、最終氷河期が終わり、本格的に温暖化が始まり、世界的に定住が始まつた時期である。この時期を後氷河期適応に依じて変わつて来た生活スタイルを根拠に、時代区分するというのが従来の考え方であつた。この一六、五〇〇年前頃から、一二、〇〇〇年前頃までは、土器や貯蔵穴の発見はあつたが、定住の度合いは不明確であり、気候も大きく違う事から、生活状況は同じとは考えられない。この時代を同じ時代区分と考えるのには無理がある。この時期を、移動生活から定住への移行期ととらえる研究者もいて、見解が分かれる所である。しかし、この間を山内清男は、草創期と命名し、縄文時代に組み込んだのである。

また終焉に関しても、灌漑水田稲作の始まり弥生時代の始まりとされているが、北部九州に三〇〇〇年前頃に始まり、北海道に伝わるのが二四〇〇年前頃である。その後に関東地方に伝わるのである。この間は五〇〇年もあり、そして多くが、狩猟採集との複合体である。このことから、弥生時代との線引きはとても難しいと云える。その為、北海道などの北の地域を「続縄文時代」とし、縄文時代に取り込んでいる<sup>73・74</sup>。

次に問題と考えるのは、縄文文化圏の範囲である。南北に長い日本列島では、北と南では気候を含め、植生や生態系などの環境が大きく違う。従つて文化や生活実態も大きく違っている。これ等も同じ「縄文時代」とするのは適当であらうか。一国史、一列島史として考古学は縄文文化をまとめてきたが、それを見直す必要があるのではないかという、地理的な問題である。

北では、北海道の道東北部のサハリンや沿海州などの大陸側からは主に縄文土器が出土しないことや、縄文文化にはない石器が出土している事などから、北海道東北部を北限とすることが出来る。福田正宏は、「縄文文化、あるいは縄文的生活構造の北限というものは、サハリン島や中千島以北の地域に認められません。北限は北海道の北東部、道東・道北と呼ばれる地域にあると私は考えています。」と述べている<sup>75</sup>。

また南方では、伊藤慎二が、「南西側の範囲は熊毛諸島まで、北琉球の貝塚文化は縄文時代とは別の分化ととらえるべきではないか。」と述べ、縄文文化は対馬海峡を南限とすることが出来るとしている。沖縄を含めた南西諸島におい



ても九州からの縄文土器に系譜的に連続する土器は、出土数が少なく、島独自の土器変遷をしている。施文は、縄文の代わりに、貝殻を施文具として使用したなど、海産物中心の文化体系を作り、石器の代わりに貝を加工して刃物を作っていたという事実もある。これ等を見ると、沖縄は違う文化圏と考える方が適当ではないかという見方である<sup>76</sup>。

文化の違いは、東日本と西日本でも大きく違う。それが顕著に表れているのが「精神文化」だと云われている。現在の発掘状況から判断すると、東日本は祭事にかかわる道具や施設が発達したが、西日本はあまり発達していないと思われる現状がある。その象徴と云われる土偶は、圧倒的に東日本が多い。環状列石や、環状集落などは、東日本に圧倒的に多いが、西日本には見られない<sup>77</sup>。

このように、縄文時代は、時間的な範囲、地域的な範囲、文化としての特色など、多くの統一されていない問題がある。これ等にさらに多数の考え方が乱立している。大きくは、一万三千年余りにわたる長い時間と、現在認識されている日本列島全土を一つの文化圏とみなし、縄文時代を「一万年余りも続いた特異な時代」であるとする小林達雄や今村啓爾らの見方と、これに大塚達朗などは、時間も地域も多様性に富んでいることから、同一な文化圏とは考えにくく、「違う文化」と考えるべきではないかと云う二通りの考え方が<sup>78</sup>。後者にはほかに、山田康弘、山田昌久などがいる<sup>79</sup>。

「縄文」という言葉の使い方は、土器の名称にも問題を投げかけている。現在の「縄文土器」の名称は、押型文土器も、隆起施文土器など、縄文の文様を使っていない土器も、弥生時代以前の土器のすべてを指す言葉として使われている。これは前述の文化の違いの問題とリンクする課題でもある。しかし土器は年代の推測、生活の実態を知る上では欠かせない資料であり、詳細な観察による土器編年表はやはり研究の大きな指針であろうと思われる。しかし最も重要なのは、粗製土器<sup>80</sup>の研究ではないだろうか。粗製土器は日常使いの土器と思われる、当時の生活を知る上で有力な情報をはらんでいる。これまで土器編年表が重要視され粗製土器の研究が進んでいなかったようであるが、近年は注目されて来ている。しかし破損が激しいなどの為、研究は困難を余儀なくされているが、今後の研究が期待される。

考古学の検証は実に多様で地道な努力の積み重ねである。その進歩と努力に敬意を表したい。発掘現場において、住居址、炉などの遺構の重なり等、発掘においての困難さは察して余りある。しかしさらに求めたいのは、同時期の集落の在り方である。同時性こそが生活実態を知る大きな手掛かりとなるのではないだろうか。

## 小結

研究は日々進歩し、多くの努力が積み重ねられている。しかし、縄文ブームや、火焰型土器ブームを起こしたように、「言説」が研究にも大きく影響している。これは研究が進むにつれ、正否が明らかにされていくのだが、やはり刷り込まれた概念は、覆すのは難しい。

また「縄文」という言葉の概念の解釈は多様である。研究者はそれぞれ根拠を持ち正当性があるが、情報を受け取る方は混乱を招く。やはり見解の統一が必要ではないのだろうか。

縄文、火焰型土器ブームが起る中、火焰型土器の造形は本当に特別優位なものなのだろうか。現在土器の研究は驚くほど細分化されており、草創期や早期の研究や各地域での細かい編年なども詳細になってきている。しかし造形的な評価は偏っていないだろうか。

火焰型土器は、凝った意匠、その造形の特異性、造作の細かさなどがその評価となっている。確かにそれは素晴らしいのだが、造形としての価値はそれだけではないはずである。そこでその対極とも言える、早期の押型文土器である「大川式土器」の造形を検証する事としたい。全体にはつそりとした尖底土器で、全面に押型文がびっしりと付けられているだけで、立体的な装飾などないシンプルな土器である。縄文時代は土器と同じ様に、単純な社会から複雑で高度な社会になったとされている。なかでも中期の東日本は人口も最大になり、縄文時代の文化の頂点とみなされている。土器の造形もそれとリンクして評価されて来た。つまり、「早期の押型文土器は単純な造形」「中期の火焰型土器は



複雑で優れた造形」、というものである。果たしてそうであろうか。

この大川式土器の造形と、火焰型土器のそれを比較し、その背後にある環境を考慮することによって、環境における造形の在り方を検証し、一つの関係性を導き出す。

第二章では環境と造形の間を考察する。環境とは気候、地形、植生、動物の生態系など様々な自然環境があるが、直接大きな影響を与えると考えられる環境は人間関係ではないだろうか。そのため、集落の在り方、生業活動などによる社会組織の在り方などから考察し、造形との関係をあきらかにする。第三章では、土器の観察と、土器づくりの実態から火焰型土器と大川式土器を比較し、大川式土器の造形の本質をあきらかにする。

## 第二章 環境と造形

### 第一節 定住と縄文集落

イギリスの考古学者ゴードン・チャイルドは「新石器革命」と称して、農耕が定住化を可能にしたと言ったが<sup>81</sup>、定住の要因は農耕だけではなく、多様なスタイルがある事が分かってきている。近年では、定住に関しての不合理さや、移動生活の豊かさなどが明らかに成り来っている。

西田正規は、何十万年培ってきた移動生活の方が人類に適した生活スタイルであり、定住はそれが破綻した姿だと言っている<sup>82</sup>。移動生活の利点は、移動することによって多くの不都合を回避できる点にある。食料の枯渇、ゴミの処理、死者が出るなどの不幸が起こる事による不具合などは、移動することによって解決でき、人間関係にストレスが生じれば、分かれて住めば済むことである。しかし定住すればそこに住み続ける為に、これ等全てを解決していかねければならない<sup>83</sup>。また、定住生活をした場合、食糧などの生活資源を居住区間で運搬しなければならず、そこまでを往復する必要があるが、移動生活では、生活物資の所まで移動するだけで済み、かえって労力がかからないと試算している<sup>84</sup>。

縄文時代は長い移動生活から定住生活に変わる過渡期とも言える。移動生活か定住生活かというのは見極め難く、その為いくつかのパターンに分けて研究されている。

アメリカの考古学者ルイス・ビンフォードは狩猟採集民の生活パターンを貯蔵を伴わない完全移動型のフオレジャー型と、貯蔵があり、ベースキャンプを拠点として、季節の変化などによる状況によって移動するコレクター型に分類した<sup>85</sup>。佐々木高明はこれでは、縄文時代にうまく当てはめられないとし、これにベースキャンプを固定化し、季節移動などは行わず年間を通して移動しない定住村落型を加えて縄文時代に適応させた。つまり、縄文時代の初期はフオレジャー型、縄文時代の大部分はコレクター型であるが、後期以降の時期は、

定住村落型である<sup>86</sup>。

では、縄文時代の人口、集団の規模から集落の在り方はどうであったのだろうか。

世界的な気候変動をみると最終寒冷期が終わったのは一五〇〇年前頃である。この頃から温暖化が始まり世界各地で定住が始まった。最も気温が高くなるのは、約七〇〇〇年前頃で、現在より一〜二度高かったとされている<sup>87</sup>。その後の四五〇〇年前頃までは温暖な気候が続き、その期間は縄文時代で最も人口が多いとされている中期に当たる。

一九八四年に小山修三による縄文時代の人口の推定値が出された「図版1」。これは検出された竪穴住居跡の数から各地の人口を割り出したものである。それによると、早期では二万人、中期では二十六万人と推察された<sup>88</sup>。しかし実際の住居跡は重なりが激しく、同時存在の確定が困難である。さらに一世代が住居の建て替えをしないと限らない。また定住がどの程度確立されていたか判明するのが困難であり、季節移動が確認されている今日では、同じ家族が同時期に二軒以上の住居を持っている可能性もあり得る。重ねて、移動性が強い場合は、住居は簡素であり、遺跡として検出されにくいなどの理由のため、この数値は正確とは言えない。したがって、正確に当時の人口を推定する方法はないと言える。しかしながら、この表で注目しておきたいのは、近畿・中国・四国地方の人口および人口密度である。これは、これは本場に人口が少なかったのか、移動性の高い簡易的な住居のため、検出量が少ないだけなのか。これに関する考察から、縄文集落の自然環境との関係性を見る事が出来る。この件に関しては第二節にて考察していく。

縄文時代の人々が特殊なのは、「貯蔵穴」という、「財産を貯蓄でき」、「権力を集中できる状態」であったにも関わらず、小さな集団を維持した点にある。

この問題を紐解くヒントが、文化人類学・経済人類学の観点からのM・サーリンズの考察がある。それは石器時代の社会に二つの形態があるというものである。

第一の社会形態は、「過少生産様式」と呼ぶべきものであり、少なく欲求して満足し、権力の集中を避け、労働・生産より余暇を優先する。したがって集団の求心力を高める必要がなく、儀式や制度は発達しない。世帯の自律性が優先され、不都合が生じる度に集団は分裂し、集落規模は大きくならない。一方、第二の社会形態は、「生産強化様式」であり、豊かさの為に生産を強化する。その労働力を集約して、集団規模の維持拡大をはかり、豊かさの享受を目指す。世帯の自立性はより集団の求心力が優先され、儀式や親族性の導入によって、集団の離脱・分散を防ぐ。組み込まれた世帯は離脱しにくくなるので、集団の規模は自然と大きくなるのである<sup>89・90</sup>。

現在の民族例を挙げると、第一のグループであるオーストラリア大陸に住むアボリジニは、食物関連活動は、一日平均、女性は三時間四十分から五時間九分、男性は三時間五十分から五時間七分。また、南アフリカ、カラハリ砂漠のサン族では男女平均一日の労働時間は、四時間三十九分である。第二のグループの例は北アメリカ北西岸のインディアンが挙げられる。彼らの社会には首長がおり、村の人口は七〇〇人である。「貴族」「平民」という階級があり、再分配経済システムを持ち「奴隷」の存在も認められる<sup>91</sup>。

サーリンズが体系化した二つの狩猟採集民の生活体系の要因をテクスタイルが解き明かした。食料確保が年間を通じて安定的である為貯蔵を必要としない場合は、第一の社会形態が成立する。しかし、自然の食料資源が豊富であっても季節的に偏っている場合は貯蔵が必要になる。したがって、労働力の集約が求められ、集落は大きくなり、定住を余儀なくされる。これが第二の社会形態を生む要因となる。チャイルドの「石器革命」以降、定住、高い人口密度、社会経済の不平等は農業が基盤になると考えられてきたが、狩猟採集民でも同様の事が起こり得る事を明らかにした。その分岐点となるのは、集約的貯蔵をともなった経済の存在あるいはその不在であることを明確に示した<sup>92</sup>。

また農耕民が大規模な集落を作るとは限らない。例えば東南アジアのアカ族は、生活拠点を移動させながらコメ作りを行っている<sup>93</sup>。

このように、狩猟採集民や農耕民族にも多様な生活形態があり、一様には判別しがたい。

## 第二節 集落の規模と社会の枠組み

土器の造形を考察するにあたって、その背景にある環境の影響が大きいと考える。大川式土器と火焰型土器の造形を比較するために、早期と中期、北陸と近畿という対極にあるかと思われる集落の構造を、あえて比較する。

大川式土器の時代の縄文時代早期は集落の規模は全国的にほぼ同じで、一軒二軒の単位で営まれていたと考えられている。大川式土器の発見された遺跡群は、ほぼこれに準じている。現在発掘されている早期の遺跡の中で、例外的に大規模なのは、北海道の中野B遺跡と鹿児島の上野原遺跡である。しかしその同時存在の住居は、中野B遺跡で五六軒<sup>94</sup>、上野原遺跡で最大六軒である<sup>95・96</sup>と推察されている。早期の遺跡でこれ程まとまった規模で発見されるのはまれであり、特に上野原遺跡は火山灰の堆積により早期の遺跡がそのまま残されたことが大きな要因である。

火焰式土器の時代の縄文時代中期は縄文時代で人口が一番多かった時代だとされている。

前期の頃の七〇〇年前に起こった気候変動により、気温は今より一二度高くなる。その頃から関東・甲信越地方・北陸・東北などに環状集落がつけられるようになり、中期には最も多くなる。谷口康弘は人口密度が高い所に環状集落が現れる事を明らかにした<sup>97</sup>。

環状集落とは、広場を中心として規則性をもって集落が形成されており、竪穴式住居、掘立柱建物といった住居の他に、貯蔵施設、埋葬施設、祭祀施設、調理施設、廃棄場、そして埋葬施設などが伴う集落である。環状集落は、長期にわたって継続する事から、集団の「規制」があったとみなされている<sup>98</sup>。

環状集落の成立には、大きく分けて二つの考え方があつた。集落の形成が計画されたものであるという考え方と、長期にわたる累積の結果であり、計画性はなかったとする考え方である。前者の考えは、和島誠一が広場を中心に都市計画があり、長期に渡って定住した大規模な集落であるという見解を示した(和

島一九四八・一九六二)。その後調査が進むにつれ、様々な成り立ち、様式の違いが検証されて来ている。

水野正好は長野県与助尾根遺跡の分析から、一時期の集落は二棟一組三単位二大群で構成されているという双分制の社会構造を見出した(水野一九六九)。また小林達雄は中央広場を持つ集落が中心となり、周囲の小規模集落を統合したという見解を出し(小林一九七三・一九八〇・一九八一・一九八六)、林謙作は、「非・常用施設」の有無から縄文集落を分類し、住居・調理・廃棄・通路などしか機能を持たない集落を「少機能ムラ」とし、それに加えて貯蔵・埋葬・祭祀・社交・食品加工・原料採取にかかわる施設を持つ集落を「多機能ムラ」とし、この二つはひとつの組織として機能していたと考えた。また集団で移動が繰り返されていたとする、末木健(末木一九七五)や石井寛(石井一九七七)などの考えがある<sup>99</sup>。

一九八〇年代に、環状集落論に画期的な論争が加わる。環状集落は計画されたものではなく、移動を繰り返した累積の結果だという考えである。その先頭に立ったのが、土井義夫(土井一九八五・一九八八・一九九二)と、黒尾和久(黒尾一九八八A・B)である。両氏は、同時存在の集落規模は住居一〜二軒、多くても四軒程度で、移動性に富んだものであるとの見解を示した<sup>100</sup>。

それらの多様な研究結果は、いずれも条件が一樣ではなく、検証方法もそれぞれに違つたため、統一した見解は得られていない。西田正規はその検証方法に疑問を投げかけている<sup>101</sup>。これ等は、時代も微妙に違い、集落の自然環境は川沿いであつたり、山沿いであつたりとそれぞれ違つた。これらの考察に対しては、統一した見解を持つことは出来ない。したがって、計画性があつたかどうかは、判別しがたい。しかしながら、遺跡の残存率は、圧倒的に西日本に比べれば高いと言える。それは住居そのものが、西日本に比べて大きく、柱などの址の穴が検出されやすい為である。この事から、東日本は西日本に比べて、一つの住居は定住性の高いものだったことは、言えるのではないだろうか。

西日本の集落の形成は東日本とは違つた展開をする。この西日本の集落の展開を見ていくことで、西日本と東日本の環境を推し量る事が出来、環境が集落の形成にどのような影響を及ぼしているのかを推察できる。その事が、土器の

造形に繋がっていくと考えている。それ故、早期遺構の西日本の集落の在り方を検証してみる。

集落の規模は後期に至るまで小規模集落であったという見解が一般的である。集落の機能は環状集落で示した「少機能ムラ」タイプである。

縄文時代全般に渡って西日本に大規模集落が発達しなかった理由として挙げられるのは、食料資源による二つの見解である。

まず資源の量である。東日本に人工が多いのは、東日本の方が西日本より食料が豊富だったからという理由である。代表的な論説は、一九六四年に山内清男が提唱した「サケ・マス論」である。山内は、東日本はサケ・マス類が豊富で、それを利用できるため東日本は食料が豊かであり、人口も増え、集落も発達したが、西日本の集落が小規模なのは食料資源が貧しかったからだとした。

これに対し、西田正規は西日本の方が豊かであったと指摘した。それは当時のメジャーフードとされていた堅果類の分析である。縄文前期以降の森林の植生の主要になるのはブナ科であり、西日本は圧倒的に種類が多い。東日本は圧倒的に落葉広葉樹が多く、西日本ではそのどちらもある。照葉樹林の生産量は落葉広葉樹の二〜三倍である。動物資源においてもイノシシなどの分布密度から、西日本の方が高い可能性を示した。これを踏まえ西田は西日本の方が食料資源が豊かだった可能性を示した(西田一九八五他)。従って、食糧資源の豊かさは、集落の規模に比例しないと示した<sup>100</sup>。

また泉拓良が示した見解は、食糧資源の収穫期とそれに対しての労働編成の違いである。東日本での主な堅果類は落葉樹のクリ・オニグルミ・トチノキが大半を占める。これ等の収穫期は九月と一〇月の二か月に限られる。しかし西日本はこれに加えて、照葉樹が加わる。照葉樹の収穫期は一月から二月である。合計すると四ヶ月に及ぶこととなる。この収穫期の長さの違いが集落の形成の違いに現れている。その為東日本では集約した労働が必要になったと見ている。この構造が集団の規模を拡大させた要因とした(泉一九八五)<sup>103</sup>。

矢野健一は、西日本に遺跡の発見率が少ないのは、低地の立地であった為、遺跡が消失したこと、地面に掘り込みのない平地式の住居の為だと指摘した

<sup>104</sup>。近畿地方で後期に遺跡数が激減するのは、遺跡の立地が高地から低地に移行したためだと指摘している<sup>105</sup>。そうなれば、西日本の人口は東日本より多かつた可能性も十分出て来る。中期には東日本で人口が爆発的に増え、環状集落が顕著になり、西日本は小規模集落で人口は停滞している、という図式が覆されることになるのである。また矢野は集落規模に対しては、関東地方とは異なり、集落の境界が不明瞭なため、住居数を推定することが困難で、発掘調査の面積も圧倒的に狭く、関西地方の縄文集落が本当に小規模なのか疑う余地があると云う。また矢野は墓や貯蔵穴から、大規模集落の住居数を割り出し、上限が四、五軒である事をつきとめた。これは東日本の平均的な集落規模との大差はない<sup>106</sup>。しかし違うのは集落の形態である、西日本の集落は、貯蔵穴、土器棺墓群、堅穴住居が同じ地区で検出されていても、環状にはならないのである<sup>107</sup>。

矢野の最後の見解は、集落の性格をあらわしている。環状集落の成り立ちや規模に多様な見解はあるが、泉の言うように、東日本では食糧資源の収穫期から考えると、労働力の集約が求められる。そこにはやはり何らかの組織性が存在していたのではないだろうか。一方、西日本では定住にとられない豊かさを感じる。この形態が大川式土器を生んだ近畿の早期の集落形態と近いのではないだろうか。

## 第二節 大川式土器出土遺跡群と笹山遺跡

この節では、早期の近畿の集落と、北陸(新潟)の集落が実際どうなっていたのかを具体的に集落を見ていき、それぞれの土器の分布状態などを含めて考察していく。

大川式土器が出土した近畿圏の縄文時代早期の遺跡は、大和高原の河川に添うようにして潜在している。主要河川の本流はもとより、支流に至るまで、河川の蛇行部に発達した段丘上で遺跡が多く確認される。縄文時代早期において、この地域は人口が集中したと考えられている。

大鼻遺跡「図版2」は、近畿地方独特の押し型支様である、楕円がへこんだネガティブ文の押型文土器の変遷の、一番最初に当たる大鼻式土器が発見された遺跡である。発掘された住居は八基である。室内炉はなく、貯蔵穴などの付属施設もない。重複状態から四期以上に及んでいたと推測される。従って、各期は、一〇二軒であると推測される。竪穴住居の大きさは平均、直径四メートル前後の円形、最深部〇・六五メートル以上と推定。柱は直径〇・二メートル以内と、構造的には弱く、耐久性も低かったと思われる。この遺跡から出土する土器はほとんどが大鼻式土器である<sup>108・109・110</sup>。

大川遺跡「図版3」は、一九五七年の発掘で最初に大川式土器が発見された遺跡である。南に低い山があり、東に向かって開かれた河岸段丘に位置する大和高原は平原地形が隆起して新たに浸食が始まった幼年期段階の山地で、北は標高二〇〇〜三〇〇メートル前後の山地で、三重県から京都府の南部を西流する木津川によってかぎられ、南部は標高五〇〇〜六〇〇メートルの初瀬・宇陀川断層によって宇陀市と分水嶺で分かれている。西側は奈良盆地東縁の春日山断層崖にまで及び、東側は名張川で伊賀市などと接している。

大和高原は典型的な内陸性気候をしていて、平均標高が三〇〇メートル前後の高原地帯であるため、西側の奈良盆地や東側の伊賀盆地などと比較すると、気温は平均で二〜四度程低い。また降水量も盆地部に比べるとやや多く、年間降水量は一六〇〇〜一七〇〇ミリののぼる。特に四月の降水量はかなり多い。

おそらく一〇二軒で生活が営まれたことを想像すると、近畿圏の集落の理想の地形とも言える。縄文時代早期から中世までの複合遺跡であるが、早期の状態が比較的良好であり、早期以後はあまり使われてなかったようである。土器は大鼻式から高山寺式までが出土し、早期のネガティブ押型文の全容をある程度把握できる。この遺跡で大川式土器の編年表が作成された。七回の発掘調査で、三軒の住居跡が発見され、それらは三・五メートル前後のほぼ円形であり深さが〇・四メートル弱と、これも近畿圏で典型的な大きさである。出土土器は大川式が多数を占めるが、大鼻式から高山寺式までの変遷を見ることが出来る<sup>111・112・113</sup>。

鴻ノ木遺跡「図版4」は、縄文時代早期から近世までの複合遺跡である。縄文時代早期の竪穴式住居は一七軒発掘され、近畿では住居数が比較的多い遺跡である。この遺跡では大川式に続く鴻ノ木式土器が発見された。住居の重複は見られず、土器の出土量などから、大川式土器時代、鴻ノ木式土器時代の二期に分かれていると考えられ、各期はそれぞれ七〜九軒程度の住居が存在していたと判断されたが、同時存在の住居数は特定できていない。住居の大きさは、やはり、直径三・五メートル前後の円形であり、深さは〇・二メートル程度である<sup>114</sup>。

これらの近畿圏の早期の集落について山田猛が橿田川領域の押型文土器群の二四の遺跡で、食糧調達における領域を考察している。それによると、二六・五キロメートル以内の二四の遺跡は七つのグループに分けられる。そのグループの単位は一つの集落であり、一〜一・五キロメートル以内で住居を移動していたと推測している。つまりこのエリアに住んでいたのは七集団だったということである<sup>115</sup>。各集団間の距離は、五〜六キロメートル程度離れており、これは赤澤威が指摘している、定住民の生業活動の範囲に叶うものである<sup>116</sup>。各五〜六キロメートル程度離れた集団は、十分行き来できる距離であり、交流又は共同作業をした可能性は十分考えられる。同時存在の住居数の特定は出来ていないが、一〇二軒程度であったと考えられている。

次に中期の新潟の集落はどうであったのか。

笹山遺跡「図版5」は国宝に指定された火焔型土器が出土した遺跡である。報告書から、馬蹄形の環状集落であったことが明らかにされた。合計一〇回の調査が行われ、住居跡は二三基発見された。しかし、発掘された住居跡の時代測定が出来たものは、わずかに四基であった。その四基の住居跡に関しても同時存在かどうかは特定されていない。大きさは径四メートル程度のやや小さいものと、六・五メートル程度の大きなものがある。これは前述したように、大きな住居と小さな住居が二棟一組であったと為と考えられるが、笹山遺跡においてはその記述はない。もう一つの特徴は、室内炉が設営されていたことである。

これは同居する人数が多くなった為と、室内で調理するという生活形態が変わった為と思われる<sup>117・118</sup>。

新潟県は笹山遺跡がある信濃川流域に縄文時代中期の遺跡が集中して存在しており、大きな環状集落がいくつもある。多くは円形の環状集落を成しており、中央広場をはさんで同じ建物型式が向き合う対峙性を形成している<sup>119</sup>。それらの距離は近いが、どのように交流、又は共同作業をしていたかなどは、著者は把握できていない。土器は同じ型式が存在していて、確かに何らかの関連があったことは事実である。

この地域の特質として挙げられるのは、三メートルにもなる冬の雪である。新潟県より寒い北の地域よりその積雪は多い。その特徴としてフラスコ状の大きな貯蔵穴が挙げられる。しかし、それは東日本の他の地域にもあり、新潟だけの特質は見当たらない。

また環状集落では関東地方の方が大きく多い。神奈川県寒川町岡田遺跡は環状集落を成しており、検出された住居跡は五十一軒である。しかし調査出来た範囲は、遺跡の三分の一と考えられており、したがって全体像を考えると、一〇〇軒を超えるものと考えられる<sup>120</sup>。

早期（近畿）の集落と中期の新潟などの環状集落の違いをまとめてみると、まず住居そのものの違いがある。早期では径三・五メートル程度だったものが、中期になると、径六、五メートルもの大きな住居が現れ、小さな住居と組になっているということである。ここに組織が生まれた気配を感じる。

生業活動において、早期は一集団一〜二軒で活動していた様子が伺えるが、中期の環状集落ではどうか。笹山遺跡の報告書にはその記述はないが、環状集落の構造にみられるのは、一つの集落では、大きい住居と小さい住居が対になっており、さらに周辺の集落においても、やや大きい集落、又は広場があったり、周辺より大きな建物がある集落が中心となり、周りに小さい集落があり、それらが一つの集団であると考えられている<sup>121</sup>。

一つの集落の件数は様々な意見があるので想定することは難しいが、このように、住居や集落が組になっている事は想定できる。だとすればそれは組織化

されたものとみてよいのではないだろうか。やはり、ある程度のまとまった集団で生業活動や、日常の生活を送っていたと考えられる。

小林達雄は土器などの日常の道具を「第一の道具」、土偶や石棒などの祭祀に使われたと思われる物を「第二の道具」と呼んだ。この環状集落には「第二の道具」が多く存在する。そして集落の中心と思われる住居にそれらはあった。

環状集落は前期初頭から作られ始め、中期後葉になると、徐々に姿を消していく。その原因と考えられているのは、その時期に寒冷化が起こり、従来のように集約的に生業が行えなくなり、集落が細分化していったと考えられている。本橋恵美子はその過程を住居の形態から分析している。

本橋は中期後葉に、柄鏡型敷石住居が出現することをもって、居住形態が集落単位から住居単位に変化したという見解を示した。この住居は、敷石の有無や敷き方の違いから住居内に「間取り」が見られる。石の入手が困難な地域では、石はないが形態は同じ柄鏡型である。それまでは「第二の道具」は集落単位で見られたが、各住居単位で見られるようになる。また住居空間の奥壁部に配石が見られ、祭祀的な機能が盛り込まれた可能性がある。このように環状集落という規制がなくなり住居単位の集落形成に戻っていく傾向がみられる<sup>122</sup>。

#### 第四節 縄文時代の格差社会―縄文ユートピア伝説―

縄文時代の興味を引くテーマの一つに「格差社会」の問題がある。縄文時代が注目を集めたのは、土器の造形の他に、食べ物を平等に分けあう格差のない社会であると、長年信じられてきたことが事による所も大きい<sup>123</sup>。いわゆる「縄文ユートピア伝説」である。

縄文時代の遺跡からは、収穫物を平等にわけあったという物的証拠は見つかっていない。民俗学的研究からは、前述のように、貯蔵を行う狩猟採集民の間では、分配が不平等であることが明らかとなってきた（テクスタイル一九九五）<sup>124</sup>。大規模な発掘が相次ぐ中、三内丸山遺跡や、中野B遺跡など、大規模な集落の発掘や、鳥浜貝塚やカリンバ遺跡から朱製品の出土、阿久遺跡の環状列石やキウス周堤墓等の大規模な遺跡群が発見され、もはや「格差」がなかったとは言えなくなっている。

こうした中、縄文時代の社会でもタテ社会の議論がされるようになって来た。佐々木藤雄は、『原始共同体論序説』を著し、「不平等」をキーワードにした社会的な差異の存在に言及した(佐々木一九七三)。その他にも多くの研究者が論文を発表した<sup>126)</sup>。

その中で最も影響のあったものは、渡辺仁の『縄文式階層化社会』(一九九〇)であろう。渡辺は、「縄文社会の構造基盤は、富者層と貧者層の分離による階層制であった」、「縄文社会は階層社会といえるが、権力社会ではない」、「縄文時代の階層社会は男性の生業分化(クマ・カジキ猟)によって進展した。」と述べた。

一方、縄文時代に小林達雄や佐原真は縄文時代に奴隷が存在するとしたが(小林一九八八a、佐原他二〇〇二)、その理論は発展しなかった。また、小山修三らは、三内丸山遺跡の調査から、縄文時代に貴族層、庶民層、奴隷に区別される「階級社会」が存在し、すでに都市があり、商人がいたと発言した<sup>126)</sup>。

このような研究発表が相次ぎ、縄文時代は貧富の差があった事は明らかになった。しかし、身分制度が明確な「階級」はなかったが、「階層」はあったのではないかと云うのが、今の縄文時代の理解となっている<sup>127)</sup>。

## 第五節 社会の枠組みと造形との関係

縄文時代の精神文化を象徴するかのように言われるのが、「第二の道具」である石棒や土偶である。これは小林達雄が土器や石器などの生活用具を「第一の道具」、生活に無関係で、祭事に関係があるとみなされる道具を「第二の道具」と呼んだことに由来する。これは精神文化の発達の証として捉えられており、ある程度大きな集落に見られる事が特徴であることから、「高度な社会性を持った集落」とされている。果たしてそうであろうか? 精神文化の発達と見られている、「第二の道具」は、精神文化の発達の証ではなく、「大きな集団を統率するための道具」ではないのだろうか。

定住はしていたとはいえ、一〇二戸程度の小さい集団であるなら、移動も簡単である。食料不足や、人間関係のトラブルなどが起これば、移動すれば解決

できる。しかし、集団が大きくなれば移動は難しくなるので定住の度合いが増してくるのである。

西田正規は、縄文時代の精神文化の発達の過程をこう分析している。

定住によって得られた利点は、運搬からの解放である。それによって大きく重い道具の使用を可能にした。神話的世界においても、イメージを物に固定したり、儀礼や呪術を効果的にする道具類の大きさや数を解放した。それによって神話的世界を装飾する演出的な幅が広がる。反面、定住することによって、移動によって解決できていたストレスをそのまま抱え込むことになる。ストレスとは、自然現象の驚異、食糧不足、病人や死者、人間同士の不和や争いなどである。その事は儀礼や呪術、神話的世界の拡大にとって重要な要素となる。神話的世界は、定住化社会が直面するさまざまなストレスの蓄積を解消し、移動への衝動を緩和するという重大な役目を負う事になる。定住的な集落には、墓、住居跡、ゴミ捨て場である貝塚など、個人を超えた時間が刻まれる。土地利用をめぐる社会関係も生まれて来る。西田は、貯蔵が時間を変質させるとし、ある程度の独立性と排他性が生まれる、としている<sup>128)</sup>。

また西田は、縄文時代は生活に直接結びつく「第一の道具」はあまり発展しなかったが、「第二の道具」を始め生産や消費に直接関係しない遺物や行為が増加して祭事に対して、「縄文時代の社会が神話的世界の拡大に大きなエネルギーを注ぎ、それを充てることに成功してきた歴史があった」と述べている。つまり、定住から来る不都合を、「神話的世界は、世界の秩序を示すとともに、人間の世界に生じる様々な不幸や災難の原因を明らかにする」。これによって、ムラの秩序が守られ、定住と備蓄を持ちながら、階級のない社会をつくったと言われている<sup>129)</sup>。

多くの古代文明が自然の営みのサイクルを神への感謝として図式化したように、縄文の第二の道具はその役割を担っている。そして土器もそうであると考えられる。縄文土器の中期の勝坂式土器、亀ヶ岡式土器などに見られる、半具象的な文様はストーリー性を感じさせ、その意図があると解釈されている。妊婦や胎児、あるいは蛇などの意匠めいた文様は、多くの研究者が述べている様に、縄文時代の人々の精神世界、自然への信仰心を表現しているのではないだ



ろうか。「第二の道具」である土偶や石棒と違い、「第一の道具」である土器は、祭祀用に使われたのか、日常使いなのかは、議論が分かれるところである。井戸尻式土器の研究ではその可能性を研究しており、火焰型土器の研究ではそれに対して躊躇している。いずれも出土状況や、文様構成の在り方などの違いにより判断が分かれるようであるが、火焰型土器も土器の文様の違いで出土量が異なる事から、祭祀に使ったかどうかを言及するのではなくとも、何らかの使い分けがあったとみるべきである。

ここで一つ問題を呈示する。それは西日本の集落の在り方と祭事の関係である。西日本は第二の道具が発達せず、集落も大きくならない為、「文化の遅れた地域」として劣勢に見られがちである。第二章、第二節で述べたように、人口は現在の想定より多かったとしても、集団が大きく、定住性が高く、第二の道具が大量に出土することにはならない。やはり集落の規模は小さかったのではないか。その小さい集落に、祭祀は発達したのかということである。発達したかどうかは判断できないが、祭祀は確かにあったと言える。

その証拠となるのが、三重県の草創期の遺跡である粥見井尻遺跡で発掘された土偶である。この土偶は草創期のものである<sup>130</sup>。土偶は早期の大鼻遺跡でも二体発掘され<sup>131</sup>、中期終末から晩期後半にかけての奈良県の橿原遺跡では土偶は多数見つかった<sup>132</sup>。しかし、それらは何れもとても小さい。この事から推察すれば、西日本の方が、祭祀は早くから発達していたことになる。

ここで祭祀というものについて考えてみる。祭祀を行うにあたって、必ずしも何かの形が残るものだけが祭祀ではないはずである。どんな小さい集団でも必ずと言っていい程祈りの行為はあるのではないだろうか。たとえば、アイヌのイヨマンテでは、ヒグマを神の化身とみなし、ヒグマを神としてもてなしたのち屠殺し、得られた肉や毛皮は神からの贈り物としていただく。このように、祭祀に使ったものは形には残らない祭祀は世界中に多数ある。しかし集団が大きくなるにつれ、象徴となるべきものがムラの中に作られ、それは祭事が終わっても残される「形」となる。それは、「何かの象徴が必要」ということであり、祭りの形を「残さなければならぬ事情」があったのであり、祭祀を「認識させなければならぬ事情」があったということではないか。即ち、集団が大き

ければそれらが必要だということである。従って、西日本は「祭祀が発達しなかった」のではなく、「祭祀の道具は造形的に凝ったものは作る必要がなかった」とすべきである。従って、土器も凝った装飾は必要なく、実用に沿った造りで十分であったと考えられ、仮に祭祀に使われたとしても、凝った文様を必要としない、つまり、権力を意識させる必要があったとしても緩やかなものだったと考えられる。そして、東日本と西日本の祭祀の在り方が違っていたことは十分に考えられるのである。

この「第二の道具」が発達した地域と、立体的な半具象的な文様の土器を生み出した地域は、人口が集中する中期の環状集落の地域である<sup>133</sup>。この土器群には煮炊きしたあとの「おこげ」がある事から、祭祀に使われたか、日常に使われたかに議論が分かれているようだが、やはり祭祀に使われた可能性が高いのではないだろうか。したがって、自然環境の関係から、食糧確保のために、労働の集約性が必要となった。ムラ、あるいは生業活動のための集団は大きくならざるを得ず、それを統率するために象徴的な祭祀を行った。それに石棒や土偶が印象に残るような造形として考案され、土器もその一端を担ったのではないだろうか。

## 小結

縄文時代の早期に定住が本格化したと考えられている。以前、定住は文明が進んだ証とされていたが、現在では定住に関しての不合理さや、移動生活の豊かさが注目されている。移動生活では、食糧の枯渇や、ゴミ処理、人間関係の不都合など移動することにより解決できるが、定住すればそれらすべての事をその場で解決しなければならなくなる。サーリンズは狩猟採集民の生活スタイルを、少なく欲求して余暇を優先する〈過少生産様式〉と、豊かさのために生産を強化する〈生産強化様式〉の二つに分類した。縄文人の生活スタイルは、この〈過少生産様式〉にあたる。

大川式土器の早期の時代は全国的に、集団が小さく、一〜二件程度の家族単位で移動性が高い。山田猛の考察によると、大川式土器のエリアでは、各住居



は1〜1.5キロメートルの範囲で移動し、各住居間の距離は、5〜6キロメートルであるという検証結果が出ている。

火焔型土器の出土した新潟では、環状集落が形成され、計画性のある大規模集落が築かれたと考えられていたが、近年その同時性は、1〜2軒、多くても四軒程度であるという見解が出されている。

また、東日本は西日本より食料が豊富だとされてきたが、西日本の方が食料は種類が多く、季節ごとに収穫できるものがある、しかし東日本は食料の収穫時期が限られている。総合的に西日本の方が食料事情は豊かだったのではないかと考えがあらわれて来た。また集落の形成に至っても、西日本の発掘状況からみると、発見されにくい住居が多数ある事が確認された。この事により、「豊かな東日本」「貧しい西日本」の図式が覆されるか可能性が出て来た。

縄文時代は、土偶や石棒など「第二の道具」と呼ばれるもので、人間関係のストレスを回避し、長い期間階級のない社会を作ったといわれている。しかし、カリンバ遺跡からの朱製品の出土などから、「格差」がなかったとは言えなくなってきた。現在では、「階級」はなかったが、「階層」はあったのではないかと考えられている。

これらの事から、集落の大きさが必ずしも豊かさの象徴でないことがわかる。小規模集落は、残存している遺跡からは判別できないが、豊かさを裏付ける背景がある可能性が十分考慮出来る。

簡素であるとされて来た尖底押型文である大川式土器も、その造形の豊かさ、繊細さがある。次章では、大川式土器と火焔型土器を、具体的に土器を観察する事と制作工程から比較することにより、大川式の技術と造形を解き明かしていく。加えて、土器の成立した環境との関係性を考察していく。

## 第二章 制作技術と造形

### 第一節 土器作りの実態

土器の造形を語るにあたっては、制作工程から考察することが重要だと考える。どのようにして日常の中に土器作りを持ち込んだのか。その具体的な労力から試算していきたい。縄文土器は多様で、用途、器形、文様のつけ方などさまざまなであるが、ここでは大川式土器と火焔型土器について考察を試みる。

そこで、大川式土器については、著者自身で大川式土器を自作し、火焔型土器については、曾利式土器や井戸尻式土器の模写を中心に縄文土器制作をし、煮沸実験を繰り返している井出政男の製作工程と実験結果「図版6」を踏まえ考察していきたい。大川式土器と火焔型土器に関しての制作の詳細は次節に述べ、本節は労働力を主に試算する。

井出氏によると、煮炊き可能な土器で一二八〇回実験を行った結果、使用の限界の平均は二九、三回という実験結果を得ている。井出氏の実験の実験データと著者が実際大川式を作った経験から、土器づくりの労働力を割り出す事とする。

実際、縄文人はどれだけの土器を使用したのだろうか。太平洋諸島の民族では煮炊きは午後の一〇〜一回という記録があり、朝食は残り物を食べるという<sup>134</sup>。実際火を起こしてから調理は時間がかかる。一日に何度も調理するのは労力がかかりすぎる、従って煮炊きは一日一回と仮定する。土器は一軒一個であろうか。いくつあったのではないだろうか。土器作りはその都度作られるのではなく、まとめて作られたと考えられる。小林達雄が提唱した縄文カレンダーによると<sup>135</sup>、夏に集中的に作られたと想定されている。そうすれば複数の土器が日常にあったと考えられ、一日一回煮炊きし、一回の煮炊きに一個の土器を使用すると仮定して試算すると一軒、一二個必要である。予備として少し余分に作り、一五個とする。

まず、大川式土器作りから、実労働を割り出して見る事にする。

口径二九センチメートル、器高三一センチメートルの大きさで、使用した粘土はちょうど五キログラムであつた。それから試算すると、大川式土器を作る場合の年間の粘土の必要量は、五×一五〇七五キログラムである。縄文時代の土器作りは、粘土の採掘は男性が、形成は女性がしているだろうと考えられている<sup>136</sup>。これを採掘して来るとなると、粘土場までの往復、掘削も含めて一日程度で十分であろう。この時粘土に混入する骨材が必要になる。著者は、山砂を二割混ぜた。これは粘土を運ぶのと並行して運ぶ事が可能である。次に粘土の中に混ざっている植物の根っこや、大きな石などの不純物を取り除く必要がある。これが案外労力がかかる。著者は、乾燥させた粘土を金槌で細かく砕き、根っこや石を取り出した。五キログラムの粘土を掃除するのに、二時間程度もかかった。慣れると効率も良くなるかと思うが、七五キログラムの粘土を掃除するのに、一五時間と見積もっておく。次に粘土に骨材と水を入れて混ぜる。これ等は作業の行程の間に入れられ、慣れなどもあるので、時間に換算しにくい。仕事量に見積もって、各一日とみなし二日とする。

次は施文具である。木の枝を刻んでいくのであるが、これに日を費やすと結構時間がかかってしまう。自然物の道具であるので、一五個の土器に対応させるとなると、五〜六個程度必要と思われる。さらに複数の文様を使うとなるとさらに作業は増える。しかし、小さい道具であるので、生活の合間に制作することが出来る。従って、施文具作りは、時間に換算しないこととする。

成形であるが、尖底土器の作り方は幾つか考えられている。その詳細は後述するが、正位置から作る事を想定すると土台が必要である。著者は籠を編んだが、地面を掘る方法もある。土台は繰り返し使えるのと、乾燥の為のローテーションを考え、五個程度必要であらうか。土台作りは二日と見積もっておく。

いよいよ形を作っていく。著者は制作に三日かかったが、土器制作に携わって来た縄文人なら、もっと手早いであらうし、この大きさであれば、施文の事も考慮すると、一日で仕上げるのが適当と考えられる。一五個を作るとすると、一五日／人である。

いよいよ野焼きの準備である。まず薪である。薪の量は陶芸家の脇田宗孝に

よると、大川式土器で五〜六個焼く場合、約一トン必要だとしている<sup>137</sup>。一五個焼くとなると、五トン必要である。縄文時代は森に多くの枯れた木の枝などが落ちていて筈であるから、男手ならば、一日あれば十分であらう。野焼きに入る。まず薪を中央に置き、周りに土器を並べて設置する。これだけ量を考えると半日は欲しい。焼きに入るが、まず地面を一時間程燃やし湿気を取る。その時に土器をあぶって湿気を取るのであるが、時々向きを変える。地面を十分焼いたら、薪をくべるのを止め、火を沈下させる。炎が収まったら、土器を灰の中に入れ、再び薪をくべて焼いていく。この間二〜三時間である<sup>138</sup>。この野焼きの時間は、量が多少多くても少なくとも同じである。その後一〜二時間あれば取り出せる。朝から設置すれば、夕方には出来上がるというものである。従って野焼きに要する時間は、二日／人ということになる。

総合計すると、土器作りに費やした時間は、二二日／人である。

次は火焰型土器の場合である。こちらは、実際火焰型土器制作した井出氏のデータ<sup>139</sup>を基に考察する。口径三八センチメートル、器高三三センチメートルで、使用した粘土の量は、八キログラムである。火焰型土器の地域では、火焰型土器と王冠型土器が土器全体の割合を占め、その他は簡素な装飾の土器である。そちらの土器を制作するには大川式土器とほぼ同等の大きさであるから、五キログラムとする。合計、八キログラム×二個十五キログラム×一三個＝八一キログラムである。粘土を採取する時間を二日、ゴミを取り除き、練る時間を四日とする。成形時間は火焰型土器で四日、簡素な土器は一日と見積もると、合計の形成時間は二二日／人である。

火焰土器の場合は施文具を作る必要がない。したがってこの時間は必要ない。野焼きは、粘土の総重量が一〇キログラム程度の差であるから、労働力は大きな差がないと思えるので、二日とする。

総合計の労働力は、二五日／人である。

実際の作業バランスを考えてみる。粘土の採集や薪集めは作業を行ったであらうと考えられる。採集量は必要量だけでなく、また状況は様ではないと考えられる。流動的で、実労働時間は想定できにくい。成形には女性が従事

したと考えられ、集中した作業が想定される。そうすると集中した時間は、家族数から考え、大川式土器集落では女性の作業員が一家族一〜二人とすると、作業日数は、八〜一五日程度、火焰型土器集落では、二〜三人とすると、七〜一二、五日となる。

著者が割り出した労働力は、現代の我々の体力の基準に沿っての考察である。縄文時代の人々は、もつと手際よく作業をしていたと考えられる。

こう試算してみると、火焰土器は作るのは時間がかかるが、集落全体で見た場合では、土器づくりの期間は、ほぼ同じような割合になるのだろうか。また、火焰型土器集落では、土器作り専属の集団がいたのではないとも言われている。粘土という素材の性格の為、時間を分散して作業するのは不合理であり、一度に作れば野焼きも一回で済む。この集中した時間を確保することは、生業活動においては、痛手であり、男女の分業が不可欠と考えられる。また土器作りは、近隣の女性が集まり作業を行ったとも考えられている<sup>139)</sup>。土器を作る為には、成形にかける時間以外に、粘土の採掘、粘土の掃除、野焼きなどの作業が不可欠であり、かなりの割合を占める。そして、それらは共同作業をするのが合理的である。早期では平素一〜二軒で生業活動を営んでいたとしても、その集落間の距離は、おそらく五〜六キロメートルであろう。その距離であれば集まる事は容易である。土器作りの作業においては、共同で行ったと考えれば、集団の意識が生まれ、情報は共有され、同じ文様の土器が近隣に普及していったと考えるのは自然である。

また縄文土器は六〇〇℃程度の熱で焼かれたと考えられており、粘土の質によつては、煮炊きの際に漏水などが考えられる。それを防ぐ為に内面を磨く「つぶし」が必要だといわれているが、その行為を行っていない先史例、民族例は多数ある。漏水防止の方法として、今日ではデンプン質の穀物やイモ類を煮炊きしてコーティングする方法はよく知られているが、民俗例から何日も水をそそぎ、水中に含まれる成分によつて多孔性を減じてから使う方法、又樹脂や油などで処理して使う事も多い。これ等の処理結果は何千年、何万年の土中の時間の中で、証拠は失われてしまっている<sup>140)</sup>。

実は、縄文土器は実用以上の量が作られていた可能性がある。それは最初にモースが指摘した。縄文土器の量の多さである。

その答えの一つは、「土器遺構」の存在である。これは壊れた土器のみならず、まだ壊れていない土器も含めて、まるで死者を弔うようにまとめて捨てられているとされる遺構である。ここでよく言われるのが、「何故、壊れていない土器が捨てられているのか」と言う問いである。これに対して「土器を弔う」と言う考え方があったのではないかと言われている。

もう一つは、小林達雄が提示した、「吹上パターン」という考え方である。これは移住する時に完全ないしそれに近い状態の土器が住居と共に大量にかつ集中的に捨てられるというものである<sup>141)</sup>。また小林は縄文土器の「衣替え」という着想から、壊れなくても寿命が来ると捨てられると考えた。小林のいう寿命とは、土器の機能とは別の意味である。各地の民族例を見ると、機能を失って捨てられるほかに、慣習による土器の機能の意味の喪失、また祭儀に使用した土器を一回限りで破棄する民族も多い<sup>142)</sup>。

これらを加味すると、土器は実用量より多く作られていた可能性がある。

## 第二節 精製土器と粗製土器

縄文土器を語る上で、重要な要素の一つに「精製土器」と「粗製土器」がある。この用語は、二つの意味を持っている。一つ目は、山内清男が縄文時代後期、安行式の土器分析をした結果、同時代に二つのタイプの土器群で構成されている事に気が付いた。様々な器種で文様も精緻に施されているのに対し、簡単な文様のみが施されている深鉢群があった。この土器構成に対して同時代、同遺跡群で二つの土器変遷がある事を見極め、前者を「精製土器」後者を「粗製土器」と名付けたものである。【図版7】<sup>143)</sup>。もう一つは、表意漢字のとり「作りの丁寧な土器」と「粗雑で飾られない土器」という意味である。

型式学研究の主力が注がれてきたのは、精製土器の深鉢であり、土器編年表に記載されている土器群である。精製土器は「ハレ」の時に使われ、粗製土器は日常の「ケ」の時に使われる、というのが一般的な解釈だが、それは証明されてはいない。「ハレ」はどのような実態なのかも解明されてはいないのである。

後者の意味の粗製土器は学術的な関心が薄かったのと、破損が激しいものが多く、研究はあまり進んでいない。しかし最近では日常使いのため、生活の実態が強く反映されていると思われることや、地域色が強く出ることなどから重要視され注目されてきている。本論では、粗製土器は後者の意味として用いる。

粗製土器は、縄文時代前期から現れる。これは環状集落が現れ始めた時期であり、人口が増え始めたときされる時期でもある。中期の深鉢は過度に装飾されたものが多くなり、その装飾の差は際立ってくるが、必ずしも粗製土器が多数を占めるわけではなく、両者の中間に位置する土器も多数あり、分類の手法は、各遺跡によつてさまざまである。さらに、精製土器がハレに使われたという根拠も見いだせない。火焰型土器圏内では一つの土坑から火焰型土器やその他の装飾の土器が混在して現れ、火焰型土器の用途としての特殊性は見出せていない<sup>144)</sup>。

火焰型土器の出土する地域では、王冠土器も一緒に出土しており、その二種類の土器は、全出土量の〇・五〜一割程度という曖昧な記述が多い。その中で、馬高縄文館では、馬高遺跡の住居跡、ⅧE区第1号住居において、出土土器破片四三〇点すべてを分類した。土器片を文様帯によつて四つに分類し、その割合を出したものである。土器片は細かく土器の復元が不可能なため、土器片の個数によつて割合を出している。遺跡全体の土器の比率と相關するかは不明だが、まとまった出土による分類であるため、それを知る手掛かりとして貴重な資料といえるのではないだろうか。内容は、A群として火焰型土器・王冠型土器、矢羽状の沈線文が特徴的なタイプをB群、東北地方南部の太木式土器様式の影響を受けたタイプをC群、表面に縄文のみを施した簡素な土器をD群として、その割合をA群は、七％、B・C群を三〇％、D群を六三％とデーターを出している「図版8」<sup>145)</sup>。ここでは、精製土器、粗製土器という言葉は使っていないが、A群が精製土器に当たり、D群が粗製土器に当たると考えてよいのではないか。B・C群に至つてはその位置づけは難しいが、このように明らかに違いがあるのは、使い分けがされていたと考えられる。

このように、出土する土器片は小さく、ほとんどが個体を復元できない。し

かし、重さによる分類などが行われている遺跡もある。神奈川県の川尻遺跡では、縄文、撚糸文など文様ごとに土器片を分類し、無文の割合を二七パーセントと割り出している<sup>146)</sup>。

草創期や早期には粗製土器という存在はなかったのであろうか。早期には無文土器が存在する。その無文土器が粗製土器である可能性を感じるが、全体像が解明できない為、その答えは得られない。大川遺跡においても早期の地層から無文土器は多数出土している。しかし残念ながらそれを復元するレベルの破片は出ていず、唯一結合出来た破片は、土器No.1188「図版15」である。尖底であることは確認できたが、全体像の把握までには至らない。外面は平たんに仕上げてあるが、内面は粗い。他の大川式土器より、やや厚い。これは粗製土器なのだろうか？

また西田泰民による胎土からの粗製土器の研究がある。試料は、千葉県市原祇園原貝塚出土の縄文時代後期加曽利B2式を中心とする土器である。それによると、砂の含有量の占める割合は、精製土器と粗製土器はどちらも二二％で大差はないが、砂の含有％と粗粒砂の含有％との相關は、粗製土器では、〇・二二八七とひくいが、精製土器では〇・五七〇三であった。全体的に精製土器の方が煮炊きに適しているという結果が得られている。この結果を踏まえて、精製土器と粗製土器の用途の違いは特定できず、考えられる原因として、①二つの社会集団があつた②二つの製作地があつた③二種の制作技術があつた、という三つの原因をあげている<sup>147)</sup>。

このように、粗製土器の研究は進んでいないが、精製土器と粗製土器の在り方は生活の実態を裏付けるものであり、解明することは重要だと考えられる。

## 第三節 大川式土器

### 造形分析

一九五六年、奈良県山辺郡山添村中峰山宇大川にある大川遺跡から近畿地方では初めて押型文であるネガティブ楕円文の土器片が発見された。縄文時代早期初頭の約九、五〇〇年前頃の土器である。この土器の器形は深鉢の尖底型で、文様はネガティブ型の楕円文が特徴の押型文土器である。大鼻式を起源とし、名張川を中心とした奈良県と三重県にまたがる大和高原に始まる。

早期のこの時期は、九州地方などの一部を除き、ほぼ全国的に尖底土器が使われていた。施文の方法は地域によって異なる。木の枝を加工して施文したであろうと想定されているのが押型文である。文様の形態は、山形文、楕円文、格子目文、平行線文、複合鋸歯文など視覚的な分類があるが、もう一つ凹凸によって分類されている。施文原体凹面に彫刻され、土器の器面に凸文が表出される場合がポジティブ文。反対に、施文原体が凸面に彫刻され、土器の器面が凹文として表出されるネガティブ文である。格子目文はポジティブ文であり、市松文はネガティブ文となる。山形文はネガとポジの表出が交互に現れるが、分類上はポジティブ押型文としている<sup>148</sup>。押型文は、東北地方では日計式、北陸、中部地方ではポジティブ文があり、近畿地方ではネガティブ文が現れる。その後ポジティブ文に変遷し、東は琵琶湖の東岸、西は中国、四国地方まで広がる。

大川遺跡から発掘され復元された大川式土器は、三個体である「図版9」。

一つは、山添村歴史民俗資料館、二つは奈良県立橿原考古学研究所附属博物館に所蔵されている。遺跡からは大量の大川式土器が出土しているが、破損が激しく、復元には至っていない。復元された個体はいずれも、器高三〇センチメートル程度で、大きく張り出した口径も約三〇センチメートルである。大川式土器はどの個体もほぼ同じ大きさだと考えられている。頸部で一旦二二〜三センチメートル程度に引き締まり、細身でゆつくりとカーブを描いて尖底に行きつく。そして尖底は、はつきりとした砲弾型、あるいは乳房型である。文様は楕円型のネガティブ文が基本にあり、山形文、格子目文、市松文等が組み合わせられていく。復元され、山添村歴史民俗資料館にあるNo.221<sup>149</sup>は、口唇部に縄文を施し、文様は細めのネガティブ文N5aで、口縁部は縦に転がし、胴部は横に転がしている場合が多いようである。施文は緻密に隙間なく埋められ、

尖底の底まで、丁寧に施文されている。橿原考古学研究所附属博物館にあるNo.97<sup>150</sup>は、口唇部はやはり縄文を施しているようで、口縁部に、頸部に山形文、胴部はネガティブ文に山形文を加えている。同博物館にあるもう一つの個体は、第一次調査で復元された個体である<sup>151</sup>。やはり口唇部は縄文が施されており、口縁部と胴部は、前述の二個の個体より大きめの楕円文が施され、頸部は四角い刺突文である。これ等を見ると、細部に細かい工夫が成されていることが分かる。そして三個体とも表面はきれいに磨いて整えられている。これ等の作業が土器全体の緊張感を生み、全体に緊張感のある造形を生み出していると言える。

大川遺跡で発掘された土器を松田真一が詳細に分類し、それが大川式土器の基準となっている「図版10」。大川式は器形と文様の分類からI類のみとした<sup>152・153</sup>。その後大鼻遺跡の発掘により、大鼻式土器が認定されたため、I類の中に大鼻式も含まれる結果となった。大川式はネガティブ文が大半を占め、それに山形文・格子目文・刺突文・平行線文が組み合わせられる。文様構成は、口縁部を横位に、胴部を縦位に施文するパターン<sup>154</sup>のA1・A2・A3・A4・A5・Bである<sup>154</sup>。器形は1a・1b・1c<sup>155</sup>で、器厚の平均は四〜五ミリメートルである<sup>156</sup>。

大川式土器の造形で不可解なものが二つある。それは尖底の乳房型と、口縁部の広がりである。特に口縁部が広がった尖底土器は少なく、それが造形美を生んでいると思うのだが、機能性については疑問が残る。

まず尖底の乳房型だが、初期は砲弾型であまり突き出てはいないが、次第に乳房型がはつきり出るようになる。それからまた突起はおさまり、砲弾型になっていく。観察すると、自然に突き出している物もあるが外から引っ張っているようなものもある。そしてほとんどがその先端まで緻密に施文されている。

「図版11」しかし何故このように突き出した乳房型が必用なのか解明できない。機能的には砲弾型で十分である。突き出したならそれだけ割れる可能性が高まるはずである。わざわざ、引っ張って突き出す必然性が見つかからない。もう一つは、口縁部の張りである。尖底からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部になって

急に広がる。これは他の尖底土器が尖底から口唇部まで緩やかに広がっているのと違う。縁を持つためという考えもあるが、中に食材を入れ、あの薄い縁を持てば、たちまち壊れてしまう。これも機能性には適さないと考えられる。だとしたら、これはいったい何を意味するのだろうか。機能性のためでないとしたら、造形的要素であろうか。それに対する答えは出せなかった。

橿原考古学研究所にて大川遺跡出土の大川式土器の土器片を閲覧したが、どれも緻密に施文されていて、精度の良さが伺えた。しかし、大川遺跡から出土した縄文土器片は、早期から晩期まであり、総数は約一〇、〇〇〇点。その内時代の特定できたものは、七、〇〇〇点であり、報告書に記載され、研究所に整理されて保管されている物は一五一九点である<sup>157</sup>。つまり著者が閲覧したのは、状態がいい土器片である。閲覧できなかった土器片の中には、無文や晩雑なものがあるかもしれない。それが解明されなければ、遺跡全体の土器の在り方はわからないが、復元された三個体の大川式土器をみる限り、繊細な神経で作られた土器である。

## 土器制作

土器の制作は、平底であれば底から作るのが当然であり、後は粘土紐の太さや、板作りの幅などが考察される。しかし尖底土器の場合、作り方ははっきりとはわかっていない。平底のように底が安定してはず、さらに尖底の形が大川式土器のような丸みを持つているものもあるが、鋭角に尖っているものなど様々である。そのため作り方は諸説あり、一様ではない。また発掘例からは確認されていない。

尖底土器の作り方は大きく分けて三つあると考えられる。一つは口唇部から逆に造っていくという逆さ造りの方法、二つ目は正位置、つまり尖底の底部から作っていくという方法、三つ目は、上下を分割して半分ずつ作っていくという方法である。

その方法を見極めるのには、土器作りは粘土紐の向きから考察する研究方法がある。粘土紐が内側に傾斜していると、底部から積み上げたものであり、外

側に傾斜していると口縁部から底部に向かって逆さに作られたものと判断するというものである。しかしこれは粘土紐を積み上げていく際に、内側につけるか、外側につけるかで向きが逆になってしまう。また覆うようにして継ぎ足した場合、内側と外側の両方に傾斜がかかってしまう「図版12」。従って粘土紐の向きでは、検証するにはふさわしくない方法ではないだろうか。また著者が制作した土器で、野焼き後割れてしまったものがある。その断面を見ると粘土紐の向きなど確認できず、詰まった状態であった「図版13」。このように実際の土器からの検証は困難である。

橿原考古学研究所にて土器を閲覧した際、土器の断片から粘土の向きを確認できる個体もあったが、粘土紐の形状までは痕跡を残してはいなかった「図版14」。その中で粘土紐の痕跡をはっきり残す個体は、無文の土器No.1182であった「図版15」。粘土紐は外側から内側に傾斜している。表面は木べらなどで整えた跡がある。裏面から見ると、はつきりと形成時の指の跡が見て取れる。上から下へなでたあとがあり、下から上へ積み上げていったことがはつきりとわかる。尖底部は内側から何かで押さえて、その後、指でなでた跡が分かる。残された土器片には、割れ方に共通点が二つある。一つ目は下から三分の一の所で割れている事である。逆に尖底の先端は意外に残っている。これは煮炊きした時の炎によって影響を受けたとも考えられるが、そこで作り方が変わった、あるいは作業を休止して、ある程度粘土が乾いてから継ぎ足したと考える事もできる。もう一つは、頸部の括れた所で割れていることである。大川式土器の様に口縁部が張り出している土器は、その箇所割れている事が多く、やはりそこで作業の休止が考えられる。松田真一によると、大川遺跡の発掘時に、頸部に胴部と口縁部の粘土が施文されて重なっているのが確認されたという。これから考察して、頸部から下を先に作り施文した後、口縁部を立ち上げ、あるいは別に作って接合したと考えられる<sup>158</sup>。

前半期の押型文土器の制作技法について、山田猛の考察がある。それによると、粘土紐の巻き上げから、正位状態で成形されたと判断。粘土紐巻き上げに際して、小休止し積み上げていった。しかし、施文が深く入っている事から、

自重に耐えるまで乾燥させた後、再度湿らせて施文した可能性を示唆している。その後の土器変遷で、器厚が厚くなり、施文が浅くなることから、湿らす工程を省略したものと見ている。そこには、工程や時間を減らす努力が感じられ、後に続く高山寺式土器では、上下に分けた一回の小休止で完成に至っており、成形も厚く、施文も浅い。この流れを山田は、「手抜き方向性」に向かったとしている<sup>159</sup>。しかし、成形後再度湿らすというのは、粘土の強度を不安定にする為、適当ではないのではないだろうか。

福井県の破入遺跡で仁科章が高山寺式土器の制作過程を考察している。仁科の検証によれば、土器のある一定の部分で、文様の乱れた部分があるのは、上下別々に施文した後、接合し、その後に接合部を施文した跡であると判断し、上下分割して作られたのではないかと推察している。高山寺式土器には上下がネガティブ文とポジティブ文に分かれた個体があるのも、この手法だと納得できる<sup>160</sup>。

次に再現からの考察を紹介する。徳永哲夫が細久保式土器の再現を試みている。徳永は地面に穴をあけて成形したと想定し、粘土でそのモデルを作った。さらに底部についた「押圧擦痕」の状態から穴に藁を敷き、型として使用した。文様のつけ方は、ほぼ粘土紐一本分の施文具を横に転がしている事から、施文は粘土紐一段分ずつ付けたと判断した。土器は別に手練りで作っていく。まず底部を作り、しばらく乾燥させた後穴に据え付ける。その状態から一・五センチメートルの粘土ひもを積んで成形し乾燥させる。しばらくした後取り出し最初の部分に山形文の施文をし、逆位において乾燥させる。再び穴に据え付け、土器を穴の中で回転させる。それから上部の粘土紐を立ち上げる。そして、最初に立ちあげた粘土紐に施文していく。つまり、粘土紐を一段一段積んでいき、適度に乾いた状態になってから一段一段施文していくというものである<sup>161</sup>。

穴を利用し、それに据え置いて乾燥させるというのは尖底土器の乾燥の方法としては合理的であるが、大川式の施文方法は、胴部は縦に転がしているのので、一段ずつ施文はしないため、この方法ではないと考えられる。

またエジプト・ファイユームのナズラ村では現在行われている方法で、地面

に穴を掘り、それを型に丸底の土器を作っている例がある<sup>162</sup>。

大川式土器は陶芸家で陶芸研究家の脇田宗孝氏が再現している。底部から積み上げて形成する方法である。脇田氏は三つの工法から検討し、籠を土台にする方法を選択した。まず逆さ作りだと、口唇部の反りの部分を厚く作っておいて後で削り出す工程になる。しかし、削り出した後はない。加えてひっくり返した時に尖底を支えなくてはならない、それを支えるのは不安定な形の為適切ではない。さらにこの方法だと、尖底の乳頭状の意味がなくなる。もう一つの方法は、底の部分を平底で分厚く作っておいて、後で削り出す方法である。しかしこれだとやはり、尖底の乳房状の必然性がない。籠を土台に制作すれば安定した状態で施文が出来、乳房型が自然に出来る。これには必然性がある。というものである「図版16」<sup>163</sup>。

これらの工法を吟味した結果、正位置で、型を土台に作るやり方が適当だと思えた。地面に穴を掘るやり方は、雨などが降れば作業は中断され、土台も台無しになるので、移動が可能な脇田宗孝氏の籠を土台にする制作方法が有効だと思えた。脇田氏の考察を基に、著者自身も制作を試みた「図版17」。

まず、粘土の採取である。大川遺跡のある山添村の村内は砂地が多い。しかし、大川遺跡から約八キロメートル南西の神野山に赤い粘土層がある。この層が村内の所々にあり、その粘土層が大川式土器の粘土ではないかと考えている。そこで村内を探し粘土を採取した。砂は土砂崩れした山砂を採取しふるいにかけた。粘土は乾燥させてからゴミを取り除き、山砂を二割混ぜて、練り合わせた。土台の籠は藤ヅルを編み用意した。施文具は自然の枝ではなかなかうまくいかず、塗り箸で代用した。長さ、二・五センチメートル、太さ、〇・六センチメートル、五単位である。

成形は籠に粘土を張り付けて土台を作る事から始める。これが石膏型のような役割を果たす土台となる。その内側に成形した時にはがれやすいように、細かい砂を付けてから成形に取り掛かる。籠の内側に粘土を張り付けて内側から形を成形していく。籠から上は粘土紐で立ち上げていくのである。つまり、籠の中とその上では手法が違う事になる。これは先に考察した底部から三分の一



の所で割れがあり、そこで成形の手法が違っていたのではないか、小休止などの作りの上での変化があるのではないか、という考察に合致する。

乳頭型をきれいに出すのには、理には適っているが、実際は困難を要した。籠に粘土をかなり薄くつけないと、乳房型は出てこなく、丸くなってしまう。乳房型が出来たとしても型から取り外すと、形がシャープにならない。格闘の末、手で内側から押して乳房型を出し、その後粘土を付けたし、形を整えた。器厚であるが、胴の部分は薄く立ち上げなければならない。完成品は五ミリメートル程度であるから、六く七ミリメートル程度で仕上げなければならない。器高は三〇センチメートルぐらいまで立ち上げる必要がある。しかし、上部に行くほどだんだん開いてくるので、途中で何度も締め直した。口縁部の張り出しは、負荷がかかるので、立ち上げ部分のある程度の乾燥を待つて、半日置いてから付け足した。土台から外して、施文するのであるが、あまり早いと、外す時に割れてしまうし、時間が経ちすぎると、表面が固くなってしまい、施文がつかない。型から外すのにさらに半日置いた。上部は固くなりつつも施文出来る状態であったが、先に作った下部は、硬くてなかなか施文が出来なかった。小さい施文具は、土器の表面の指跡のわずかな凹凸にもうまくつかず、文様が飛んでしまう。もっと柔らかい時期に施文しなければならぬ。施文が出来ても、どうしても施文具と施文具の継ぎ目が目立ってしまう。本物の大川式土器は、一見しても継ぎ目が分からない程精巧である。

実際制作した結果、形は中々うまくはいかなかったが、これは慣れの問題がある。一番の問題は施文のタイミングではないだろうか？確かに形を立ち上げるのには小休止も必要かもしれない。しかし、それは一〜二時間程度で目をまただぐほどではないと思う。何故ならそれでは施文のタイミングを逃してしまふからである。山田猛が考察したような、再加湿する方法はやはりふさわしいとは思えない。一気に作って、一気に施文する方かふさわしい工程だと推察する。

それには、粘土の粘性も関係していると思われる。著者は三個体制作し、一個は野焼きの際割れた。残った二個で、約一リットルの水を入れ、漏水テストを行った結果、一六時間三〇分で水がなくなつた。だとすれば、煮炊きに耐えられない土器ということである。従って、もっと粘性の強い粘土を使う必要が

ある。粘性と可塑性をよくすれば、成形にかかる時間はもっと短くて済み、施文のタイミングもうまく調整できると考える。口縁部は下部が出来上がってから再び土台に入れ、成形し、施文するという工程を踏むには、やはりそんなに時間を空けては、粘土を付けるのにふさわしくない。従って成形にかかる時間は、延べ一日と考えるのが妥当ではないか。

こう考察して来ると、尖底土器の作り方は結構手間がかかる。しかし、これらの工法以外にもっと合理的な方法は見出せていない。

## 第五節 火焰型土器

### 造形分析

火焰型土器の文様は、よく新潟の豪雪と関連付けて語られる。

縄文時代の早期から温暖化がはじまり、八〇〇年前にはさらに気温が高くなり、大陸から離れて日本列島が出来上った。暖かい対馬暖流が東シナ海から流れて来て温かい海が出来上がった。その事により、冬に乾いた季節風が大陸から吹いてきた時、温かい日本海から大量の水蒸気が蒸発し、厚い雪雲を作る。世界でも有数の豪雪地帯の新潟はこうして出来上がり、現在まで同じような氣候が続いている。そして五〇〇〇年前に生まれたのが、火焰型土器である<sup>164)</sup>。火焰型土器が生まれた背景にはこの「雪」が深く関係しているのではないかと言われている。

火焰型土器は、一九三六年馬高遺跡で近藤篤三郎が発見した。彼は土器の文様が炎に見えることから「火焰土器」と名付けた<sup>165)</sup>。学術的な名前は「馬高式土器」である。しかし今は「火焰型土器」で通っている。火焰型土器の炎の文様は、雪解けを待つ人々の熱い思いであると新潟県の郷土史家の佐野良吉は述べている<sup>166)</sup>。このように、火焰型土器の文様を炎に見立てる人は多い。火焰型土器と豪雪を結び付けているのはイメージであり、造形に結びつく根拠は発見されていない。土器の文様が炎に見えるのは、現代の我々の価値観であり、縄文人の真意はわからない。他に、流水文説、太陽のコロナ説などがある。雪との関連を学術的に裏図ける証拠はないが、ここでは、雪と火焰型土器の



関係を気候と集落規模の問題として考え直すこととする。

火焰型土器は、東日本の二〇〇を超える遺跡で見つかっている。そのほとんどが新潟県内に分布している。遺跡の多くは、信濃川の河岸段丘に沿って二・三キロおきに点在している。上・中流域の津南町・十日町市から長岡市に至る。遺跡の周辺には、湧き水や小川などの水場があり、日当たりがよく湿気が少ないという立地である。背後には食料資源となる後背地を備えている。国宝となった火焰型土器が出土した笹山遺跡は、十日町市内の信濃川右岸段丘上の標高一七〇～一八〇メートルの緩やかな傾斜面に立地している<sup>167</sup>。

火焰型土器にはいくつかの神秘性が語られている。火焰型土器が豪雪地帯の新潟に集中的に分布している事が、序で述べたように、雪と炎の関連付けが取りざたされるが、それはイメージであり学術的根拠はない。「日常の土器に何故あそこまで装飾をするのか。」という驚きも、第三章、第二節で述べたように、日常使いの土器は別に存在する可能性があるということが分かる。

同じ時期、中部地方では井戸尻式土器が、関東地方では勝坂式土器が最盛期を迎える。それぞれの土器には人物の妊婦や胎児、蛇やカエルが象徴的に立体的な文様で描かれていて、それぞれに文様や形態が違う。その具体的な文様に神話の意味を読み取る研究が多く成されている。井戸尻考古館では、井戸尻式土器や曾利式土器から神話要素を読み取り、中国の仰韶文化に照らし合わせるという研究も進められている<sup>168</sup>。それに対して、火焰型土器は文様は特定されたパターンで規則性が細部にまである。それには神話性が読み取れないとされてきたようだが、佐藤雅一が火焰型土器の文様に精霊を読み取る試みを始めている<sup>169・170</sup>。

また、土器の出土状態を見ると、人面深鉢土器や人面香炉形土器などが住居の中心から、人面の部分だけ分離して出土する事から、古事記や日本書紀に登場する火の神カグツチの現像を投影している<sup>171</sup>。一方、火焰型土器の出土状況は、住居跡から他の土器と一緒に出土することが多く、そこには何らかの差異が見られないことから、祭祀との関連を明確ではない。しかし、本論の第三章、第二節にある様に、火焰型土器とそれと同等のレベルの装飾を伴う王冠土器が、出土土器の一割弱程度であるなら、やはりそこには使い分けがあったと

みるのが妥当ではないか。

二〇一七年秋、京都大学総合博物館で「火焰型土器と西の縄文」という展覧会<sup>172</sup>があった。会場は火焰型土器が三〇個ほど並んでいた。西日本の縄文土器は会場の最後のエリアにあった。火焰型土器ばかり、それだけの数を一同に見るのは初めてである。大きさはほぼ大川式土器と同じ、口径約三〇センチメートル、器高三〇センチメートル程度の個体であった。土器をよく観察してみると、それらの火焰型土器はほとんど中心が微妙に歪んでおり、安定感を欠いていた。さらにじっくり観察していると、胴部の左右のふくらみが微妙に違っている。

それが不安定さを増幅させているのである。もう一つの原因は、上部が大きく下部がすぼんでいる事である。これは火焰型土器の特徴であり、美的要素としての利点とも言われている。しかし器形の歪みと合わせると、その不安定さが強化されるように思えた。また、成形の仕方も粗い。その地域で使われていた粘土の質も関係すると思われるが、表面はざらざらしていた個体が多かったように思う。他の縄文土器のいくつかに見られるような磨きはなく、それがいつそう土器を粗くみせていた。個体数も多く、器形の仕上げには丁寧なものもあるが、このような仕上げが粗いものが多かった「図版18」。

会場の最後のエリアに、西日本の土器が並んでいた。火焰型土器と対照的な簡素な造りである。しかし、それは決して簡単な造りではなく、丁寧な、神経の行き届いた造形であった。

火焰型土器の特徴を石原正敏は次のように述べている。①口縁部につく鶏頭冠突起、②鋸歯状突起、③原則として縄文を使用せず、隆帯や隆線文によって施された浮彫的な文様にある。頸部と胴部を横の隆帯によって区画し、頸部と胴部上半部にはS字状渦巻文を、胴部下半部にはU字状文を描いている。その他四つある鶏頭冠突起の下にはトンボ眼鏡状突起をつけている。一見すると手が込んでいる様に見えるが、じつは個体差の小さい縄文土器で、単純な文様構成で出来ている。鶏頭冠突起を基点に縦に四つに文様が区画出来る<sup>173</sup>。

火焰型土器は、多くの個体が復元されている。国宝に指定されている個体だ

けでも一四点あり、ほかにも各博物館で多数の復元が実現している。多数復元された要因は、人気があると言う事もあるが、復元可能な個体が多数あったという事実も重要である。それは遺跡の重なりが少なく、遺跡の保存状態が良かったことや、残された土器片が、ある程度の大きさがあった為、復元可能な個体が多かった為と思われる。

国宝No.1は、表面が丁寧に磨かれており、均整の取れた個体である【図版19①】。しかし必ずしもそうでない個体が多数ある。口縁部が左右違った高さであったり、胴部が左右均等でなかったりして、中心が微妙に歪んでおり、安定感を欠いた個体。表面の磨きがなくざらざらとした仕上げの個体などである。それは集落間の違いや時代の違いではない別の要素ではないかと思えた。その事について分析してみたいと思う。

土器の歪みは、火焰型土器だけではなく、井戸尻式土器や、曾利式土器、勝坂式土器等にも見られた【図版20】。これ等は皆、環状集落で使われた「具象文様」を持った土器である。「環状集落」「具象文様」「土器の歪み」この三つがリングする。共通の何かがあるに違いない。

それを検証するのに、富士見市立水子貝塚資料館の資料に適切な資料がある。ここには大越遺跡の早期と前期の土器がまとまって復元され、展示されている。早期が七五〇〇年前で、前期が七〇〇〇年から五五〇〇年前と時代の幅があり、胎土に変化はあるだろうが、同じ遺跡の出土である。早期の打越式土器は文様は刺突文で簡素に装飾されているだけだが、土器はしっかりした造りであり、表面は丁寧に磨いて整えられている。しかし、前期に入ると急に造りが粗くなり、器の歪みも見られる。【図版21】。この前期から土器の作りが粗くなるのが問題である。前期は環状集落ができた時期である。要するに集落の人口、規模が大きくなり、組織が作られ始めた時期である。それと同時に土器の「歪み」が始まるのではないだろうか。

ここに、土器の完成度と集落の規模の関連性が見える。

## 土器制作

多くの土器がそうであるように、火焰型土器も壊れた断片から制作過程の分析の研究がなされて来た。また、新潟県の三条市吉野屋遺跡にて文様部分が下の粘土部分からはつきり剥離した土器が発見された【図版22】<sup>174</sup>。小島俊彰は粘土紐を束にして、突起を組み立てている事を指摘し、火焰型土器の模倣制作を実践してきた<sup>175</sup>。

最近では宮尾亨らによりX線撮影を用いたcomputed tomographyで、二次元画像が得られることで制作過程の研究が進んでいる。いくつかの火焰型土器をX線撮影し、より制作過程が鮮明になった【図版23】<sup>176・177</sup>。それにより、宮尾はこう結論づけている。

- ①土器は二重構造である。容器を成形後に、器面の立体造形を作る。
- ②容器の成形は、円形の粘土の板を底にし、粘土紐を積み上げる。
- ③粘土紐を容器の表面に張り付け施文する。胴部を塗りこめた手法である可能性は低い。

④器面の立体的な造形は、C字状の粘土紐が基本単位にしている可能性が高いが、一部S字状の粘土紐が用いられている。

⑤粘土紐の太さや長さは特定できないが、不均一である可能性が高い<sup>178</sup>。  
この制作方法によると、複雑なようであるが、制作は順序よく行われ、文様はブロックごとに決められた文様体であるので、時間はかかり、複雑ではあるが、見た目より難しくないのではないかと思われる、それは一センチメートルを超える太さの粘土紐であり、扱いやすい大きさである。

また寺崎裕助によると、「まずは器形の成形、その後に横位・縦位の区画を隆帯で行った後、区画内に渦巻文等の施文や突起の貼付を行います。施文は粘土紐を貼付・整形する隆帯と、器面に半截竹管で下書きした後にヘラ状工具で削り出す隆帯で行われたと想定されます。<sup>179</sup>」とある。

この削り出すという工法をとったのなら、成形は各段に難しくなる。

最近ではこのレントゲンによって解明された制作手法ばかりが取り上げられ

る為、全ての火焰型土器がこの手法で作られているかのように思われている。しかしこれらの考察から見て、作り方は一様ではなかったのかもしれない。それであれば、前述のように個体に造形のバラツキがあっても不思議ではない。

二〇一九年春、兵庫県立考古博物館で開かれていた「縄文土器とその世界―兵庫の一万年―」という展覧会<sup>180</sup>を観た際に、新潟県の津南町からの火焰型土器が一個展示されていた。それと合わせて火焰型土器の破片に触れられる、というイベントがあった。土器片は三個体分、各一〇片程度ずつ用意されていた。私は手にとり、つぶさに観察してみた。断片に、胴部を作った粘土紐の跡、胴部の土台と隆起施文の二重になった粘土の断層などを探したが、いずれも見当たらなかった〔図版24〕。その中の胴部の五センチメートル四方にも満たないであろう破片では、一センチメートル程度の分厚い層の表側をヘラなどで削り、縦の隆起施文の紐状の形態を作り、その紐の表面を丁寧に削って平らに整えている。その凸面の高さは左右そろえられている。そして、取り付けられた突起の部分も、紐を取り付けただけでは断面が丸くなるが、胴面と同じ様に平らに削って整えられている。他の破片もすべてつぶさに調べたが皆同じで、容器を作った粘土紐の跡も、容器と隆起施文の粘土紐の断層の痕も見られない。仮に強く圧着してその後がなくなつたとしても、何処かにその痕跡が残るはずである。しかし、どの破片にも残らないと云う事は、やはりX線で解明された制作方法とは違い、分厚い容器を削り出して作ったのであろうか。答えは出せなかった。

## 第五節 近畿圏の押型文土器変遷

### ネガティブ文

押型文土器の器形は、ほぼ尖底土器で早期の初期に現れる。ポジティブ文は、本州島東部に、ネガティブ文は本州島西部に分布する。東部は、山形文などの併用と、文様が大きくなっていくなどの変化はあるが、ポジティブ文のままである。一方、ネガティブ文は、同じく他の押型文の併用などがあるが、文様の

大きさはあまり変化せず、早期後半になると、ポジティブ文が現れ、ネガティブ文は姿を消す。ポジティブ文の圏内の中部地方に立野式というネガティブ文の土器がある。器形も口縁部が張り出しており、大川式と酷似する。この型式がどのように近畿圏の押型文と関係しているかは、明らかにってはいない<sup>181</sup>。

現在発掘されている段階では、西部ネガティブ文は大鼻式を起源と想定されている。それは未加工の木の枝を回転させた文様が見られるからである。

まず器形から考察していく。山田猛が器形を図式化した大鼻式から神宮寺式の「押型文土器の編年試案」〔図版25〕と「口縁部変遷模式図」〔図版26〕<sup>182</sup>のつとつて分析していくこととする。このふたつの図から考察すると、Ⅱ期である大川a式がこの変遷の造形の頂点ではないだろうか。Ⅱ期とⅢ期が大川式であり、〔図版10-④〕の松田真一の分類とも一致する。

変遷の順に追って行くと、まず口縁部であるが、大鼻式は急カーブであり、胴部分から急に口縁部のカーブに入り、口縁部だけが取り付けたように飛び出す形になっている。大川式土器になると、カーブは緩やかになり、膨らみがゆつたりと大きくなっている。さらに胴からゆつたりとカーブが続いており、全体に胴から口縁部へのカーブに緩やかに移行していき、一体感のある形態となっている。Ⅳ期の神宮寺「第二形式」になると、口縁部のカーブは直線に近づき、胴部のカーブのゆつたりとした膨らみが無くなってくる。さらにⅤ期の神宮寺「第一形式」になると、口縁部のカーブはすっかりなくなり、胴部がそのまま上へ立ち上がっている。そのカーブも途中の緩やかな膨らみはなく、全体に直線に近くなっている。この一連の変化は、大鼻式でこのスタイルの原型ができ、大川式でそのプロポーションが完成され、神宮寺式になって形が鈍化していったと見る事が出来る。

また口径と高さのバランスをみると、大鼻式では、胴部が長く、口縁部の張りが、器形のバランスからいうと生かされていない。しかし、大川式になると、胴部の長さ、口径の長さが、ほぼ同じになる。胴部から口縁部に続くカーブの角度ともあいまって、口縁部の張り出した形が造形的に生かされ形が安定している。神宮寺「第二形式」、「第一形式」になると、胴部がさらに短く

なる。高さと同径のバランスは、大川式と同じくほぼ同等となるが、胴部から口縁部に至るカーブが直線に近くなっていく為、緩やかな曲線はなくなり、寸胴になっていく。

尖底の形であるが、大鼻式は丸い砲弾型である。大川式になると先端は乳房型になる。そのほとんどが先端まで、しっかりと施文されている。出土状況はいずれも先端部分5cm程度で割れているものが多く、胴部まで続く個体はない。神宮寺式になると、「第二形式」「第一形式」と時代が進むと共になくなっていく。これも形が鈍化していく過程の現れだと云えよう。

次に施文である。ここで特出すべき問題は、文様がネガティブ文[図版27]から始まると云う事である。その後、早期中葉には、ポジティブ文の黄島式に移行していくのであるが、これは東日本の、卯ノ木式などのポジティブ文のみで変遷していく文様の在り方と全く違う造形の展開を見せる。

ネガティブ文は、施文具を凸型に削り、土器に凹形の文様を施文するというものである。ポジティブ文は、施文具を凹型に削り、土器に凸形の文様を刻むと云うものである。施文具である木の枝を凸型に削るか、凹型に削るか、どちらが難しいかといえは、当然前者である。近畿の一連の押型文土器は、「難しい」方から始まるのである。そして大川式に見られるネガティブ文は直線ではなく、楕円文であるため、さらに制作が難しいと考える。

このネガティブ文の発祥は、大鼻式土器に始まる。ここでのネガティブ文は、木の枝をそのまま押し付けて回転させた文様であった。その後、枝を加工し、市松文、格子目文などに発展させていった。加工が困難と思えたネガティブ楕円文は、矢野健一の推察によると、直線の格子目文から楕円を加工したとする工法である<sup>183</sup>。施文具が凸型であることは、加工が難しいと判断したが、この流れから考えると自然の造形感覚だといえる。

著者は施文具の楕円文を制作するにあつて、格子を刻み、それを楕円に加工したが<sup>184</sup>、矢野が考案した方法であれば、合理性が感じられる。しかし、木の枝は縦に剥離しやすいので、難しい。矢野の検証では、簡単な原体でも加工するのに一五分はかかるという。縄文や擦糸文の原体は、複雑なものでも五分で出来るという。このことから、押型文は文様原体の中でも制作に手間がかか

る事が分かる<sup>185</sup>。

次に文様構成である。大鼻式は、ほぼ縄文と回転押型文の併用のみで、口縁部側面では、例外なく回転縄文を持ち、胴部は枝回転文である<sup>186</sup>。

しかし大川式では、ネガティブ楕円文、縄文・市松文・格子目文・平行線文・刺突文など多くの種類の文様があり、ネガティブ文を基本にほかの文様が組み合わされている。松田真一はそれらをさらに細分化し、縄文、刺突文、擦糸文を加え四三種に分類した<sup>187</sup>。文様構成は一種類のみは全体の三七パーセント、二種類の組み合わせが五六パーセント、三種類が七パーセントである。

また頸部に太い刺突文が施されるのが特徴である。神宮寺式になると、口縁部が横位施文、胴部が縦位施文、または全部が縦位施文の二種類に限られる<sup>188</sup>。

施文具の大きさについて、大鼻式の施文原体は、長さ二・二〜二・七センチメートル、径〇・六〜一・二センチメートル<sup>189</sup>、大川式は、大川a式のI類2・I類5・I類6をそれぞれ、長さ十六〜三十一ミリメートル・一八〜二五ミリメートル・二二〜三三ミリメートル、楕円文の大きさは直径五ミリメートルほどである。それに続く大川b式では、三六〜四八ミリメートルと長くなっている。径は約一センチメートル弱である<sup>190</sup>。さらに神宮寺式土器においては、神並遺跡出土土器から、長さ二・六センチメートル、径〇・五七センチメートルから長さ四・二センチメートルに至る施文具がある事が確認された<sup>191</sup>。施文具の長さが器形に影響を与えている。つまり、施文具が長くなることによって、一度に施文する範囲が多くなる。そして、口縁部のカーブが施文具によって施文しやすい様に緩くなっていくというものである。松田真一は、この文様原体が長くなることと、文様の種類が減る事が、「手ぬきの方向性」を示唆していると指摘している<sup>192・193</sup>。

また著者の観察した結果では、大鼻式は枝である施文具を押し付けたあとの粘土のはみだしは、磨いたり、整えたりはしていないが、大川式では丁寧に磨いてはみだしなどはない。

以上の考察から、この「形態」「文様」の変化の中で、次第に形が鈍化して来ると、「型式学」の「失能的成体」痕跡器官の流れがはっきりと出ている。

従って、大川a式が、近畿圏の押型文土器の造形の完成された形と云えるのではないだろうか。

## ポジティブ文

ネガティブ文に続いてポジティブ文「図版28」が現れる。ポジティブ文の土器の印象は柔らかくぼつてりとした感じである。これは、文様が飛び出している事や器形が大きく開いている事、ポジティブ文である為、磨きがされていないことなどが挙げられる。

兵庫県神崎郡神河町の福本式土器「図版28-①」は、瀬戸内海に浮かぶ、岡山県牛窓海岸の黄島で発見された黄島式土器とほぼ同じ時期にほぼ同じ文様帯で現れた。当時はまだ冷涼な気候であり、海面は現在よりマイナス二五メートルであり、本州と四国は陸続きであった。黄島は当時は島ではなく内陸地であった。分布範囲も拡大し、西へと広がり、九州にまで及ぶ<sup>195</sup>。

黄島式はポジティブ文で、楕円や山形文の大きさは大川式土器と変わらないが、器形は胴部が大きく開き、口縁部の反りはなくなる。尖底の乳房型もなくなる。大きさは、大川式と変わらない大きさもあるが、直径四〇センチメートルを超える様なものも現れる<sup>195</sup>。

福本式、黄島式の後に続く高山寺式では、一つの文様が、三センチメートル角ほどにもなる。奈良県の布留遺跡、豊井（打破り）地区から出土した高山寺式土器は、口径五〇センチメートル、器高四〇センチメートルにもなる土器がある。器厚は一・五センチメートルから二センチメートルもある<sup>196</sup>。この土器から想像して、持ち運んで使われたのではなく、戸外に据え置いた状態から使っていたのではないかと推測される。

このように、近畿圏の押型文土器はネガティブ文からポジティブ文に変遷していく。大川土器は、その造形の頂点に位置するのではないだろうか。器形のバランスは曲線を生かした形であり、口縁部が大きく緩やかに広がり、尖底ははっきりとした乳房型を示す。その前後の形は直線的で単調である。文様に関

しては種類も多く、組み合わせが見られるが、他は組み合わせや文様の数が少ない。また頸部に刺突文があるのも大川式だけであり、この文様が全体の形を引き締めている。施文の仕方は、大鼻はざっくりと云った感じであるが、大川では丁寧な磨きかけられているが、ポジティブ文に変遷すると、またざっくりで粗い施文になって来る。これらの経過をみると、大川式を過ぎると、形はだんだんと鈍化し、施文や造形に「手抜き」の経過が現れ、器形や施文などの作りがだんだん簡略化されてくるのが分かる。従って、大川土器は、近畿圏の押型文土器の造形の一つの到達点と見る事が出来る。

## 第六節 尖底土器

新潟県の卯ノ木遺跡では、大川式土器と同じ時代の早期にポジティブ文土器が作られていた「図版29-①」。

尖底土器の器形は一樣ではない。新潟県の室谷洞窟から出土した貝殻文沈線土器は、ひどく先端が細くとがっている「図版29-②」。これでは有効利用出来る部分が小さいのではないか。また、北海道の中野B遺跡に見る様な手のひらにのるほどの小さいものもある「図版29-③」。

縄文時代の土器は、深鉢が中心である。それは煮炊きの為に使われ、最も多く使用された。草創期、早期はほぼ土器は深鉢のみである。

深鉢は草創期に平底と丸底から始まる。地域差はあるが、ほぼ早期に入って尖底となり、前期には平底になっていくのである。丸底は、不安定な地面にも置きやすいという利点があるが、尖底は、地面に置くのは困難である。しかし煮炊きによる利便性から尖底が選ばれたのであろうか。しかし、尖底土器が使用された跡が遺跡として残っていない。何故、尖底土器がこの時期に普及したのか、また、どのように使われていたのかは明確化されていない。

「尖底」「丸底」「平底」の順で熱効率が良いとされているが<sup>197</sup>、流動的な薪の火では、尖底でも丸底出も平底でも火加減次第なのではないだろうか？東北の円筒土器は、平底でも長く不安定な為、尖底土器と同じように下を石で支える必要がある為、使い方は尖底土器と変わらないのである。

阿部芳郎は千葉県船橋市の飛ノ台貝塚出土の尖底土器の使用痕から、使われ

方を検証している。尖底土器にはある一定の位置から色調が分かれており、上半部は黒色から暗褐色であるのに対し、下半分味赤色、または黒味帯びている。

これは、上半分が煤の付着によるもので、下半分は赤味は比熱による変色であり、黒味は胎土中の鉄分の還元による変化である。このことから、尖底土器は地面に突き刺して使用したと結論づけている。また飛ノ台遺跡では、多くの尖底土器が出土したが、土器を支える小穴の痕跡は検出されていない<sup>198</sup>。

今の我々から考えると、扱いにくい土器である。平地がない当時の状況では平底より便利だという考え方もあるが、やはり、傾斜した地面や、ガタガタの地面でも扱うのは困難である。

尖底から平底に移行したのは、水を貯蔵する必要から移行したともいわれるが、主に使われるのは煮炊きである。前期になって、野外炉から室内炉に変わったことも原因ではないだろうか。

「尖底」という形は、縄文土器の分類において正式の呼称としては使われていない。正しくは「深鉢」である。いわば「尖底」は俗名なのである。この形は、縄文時代早期に、全国的に広まった形であるが、他の時代にも存在する。例えば、兵庫県淡路島の佃遺跡では、後期に底の尖った土器が多数見つかった。底の形が「尖底」なのか「丸底」なのが、わかりかねる土器が多数ある。同じく佃遺跡で発掘された後期の土器で、ほぼ尖底に近いが、底がほんのわずかな平たくなっている土器もある〔図版29-④⑤〕。こちらも、「尖底」か「平底」なのかは決めかねる形である。このような底の状態は、様々な時代の様々な地域の土器に、結構見られるようである。

この佃遺跡は、後期の遺跡であり、精製土器と粗製土器が区別して調査される時代区分ではあるが、精製土器も粗製土器もすべて整理され、粗製の先の尖った深鉢土器も復元されて丁寧な調査が見られる。佃遺跡の分類では、深鉢、鉢、注口土器に無文土器が見られ、その割合は全体の七割である<sup>199</sup>。打ち捨てられた粗製土器の中には、多くの「尖底」型の土器があったのではないかと考えられる。

## 小結

火焰型土器は見た目も印象深く、一瞬で引き付けられる。作りも手が込んだように見られる。一方大川式土器は簡素で地味な印象がある。しかしよく観察するとそうではない。立体的に作られ、複雑そうに見える文様は、後から足していくので、案外、どんどんつけていけるのである。そして、装飾に意識が向くのか、器形のバランスが歪んでいる土器が見られる。一方大川式土器は、尖底という難しさがまずあり、器形が全体のバランスに意識が向いているのだから、火焰型土器のような歪みが無いように思える。押型文は、同じ文様が繰り返して押されて施文されている。単純で簡単な造りだと思われるが、施文具を作るといふ労力が加味されている。そしてそれはとても細かい仕事である。そしてその少ない工具で様々な組み合わせをすることによって、多彩な装飾を生み出しているのである。口唇部の縄文、頸部の刺突文など、細部に変化がある。七〜八センチメートル程度の粘土紐をつけて行く行為と、直径七ミリメートル程度の木の枝を加工し、五ミリメートル程度の楕円文を作る行為は、どちらが細かく、繊細なのだろうか。大川式土器の繊細さは見えにくい所にあるのである。

また、火焰型土器の背景には、集落にとつての土器の役割が大川式土器とは違うものがあつたように思える。それは日々の煮炊きとは違う「何か」ではないだろうか。それが深鉢の機能性より、装飾のパターンをもれなくつける事に重点を置いた結果、土器の歪みが生じたのではないだろうか。

## 結論

序では、今日の縄文ブームを引き起こした要因として、その契機となった言説を紹介し、今日の縄文土器に対する評価がどのようになっていたのかを示した。

第一章の縄文土器の研究史および研究方法の進化では、個人的な趣味的観察眼から、客観的な視野も生まれていたが、明治維新によって途絶えてしまう。新しい政府は皇国史観によって思想統制をはかり、考古学は国家の戦略の一環とされる。敗戦によりその支配は解除された。新しい科学的な分析が進んでいく中で、縄文研究の指針となる縄文土器編年表が組み立てられた。しかし、それは優れた研究である一方、広範囲な時代、地域を縄文時代と解釈するものであり、多くの問題も含むこととなる。そのため研究者の間で見解が分かれ、混乱を招く要因ともなった。それらのことを、残された課題として、その問題となっている時代設定、何処までが縄文の範囲であるかを問題ごとに割り出し、その根拠を割り出した。

第二章の環境と造形では、定住による集落の在り方の違いを、先行研究によって割り出し、縄文時代の集落の形成にどう当てはまるかを検証した。縄文時代の集落研究からは、中期の環状集落は小規模であった可能性をとりあげた。また西日本の小規模集落の成り立ちについては、豊かさゆえの小規模である可能性を検証した。西田正規は堅果類の種類の多さ、イノシシなどの分布などから、西日本の方が食料資源が豊富だった可能性を示唆し、泉拓良は西日本では食料の収穫期が長いことが、労働力の集約に繋がらず、大規模集落を生む要因がないことを示した。この事を踏まえて考えると、簡素な土器を生む背景には、小規模集落が存在し、その背景は豊かな自然環境がある事が伺える。

第三章の制作技術と造形では、土器作りを含め、実際の観察から、火焰型土器と大川式土器の造形を実際に比較することで、大川式土器の造形の仕組みを明らかにした。まず尖底という形の作りにくさである。次に施文具の細かさとして口縁部、胴部と使い分ける事で違う文様パターンを生み出し、口唇部に刺突文を入れるなど、細部にわたる工夫が見受けられる。仕上げは全体にきれ

いに磨きがかけており、安定した造りになっていることを明らかにした。大川式土器は、派手な文様は無いが、成形には細かい神経が必要であり、それだけのゆとりが、十分な時間と精神的な余裕があったと云う事にもなる。何かの負荷を土器の文様に転化する必要はなく、自律的で穏やかな生活であったことが伺える。

造形としての土器の評価は、火焰型土器のような隆起施文土器の評価は高く、大川式土器のような尖底土器は、簡素な造りだと評される。しかし、一見簡素な造りに見える尖底土器には細かな工夫が成されていて、繊細な造りであることが今回の考察から明らかになった。集落の在り方においても、小規模集落の優れた工夫と利点が見直されてきている。土器の造形も同じことが言えるのではないだろうか。

## 注釈

- 1 小林達雄『縄文人が日本の未来を拓く』徳間書店、二〇一八年、三頁。
  - 2 アメリカ人の考古学者・動物学者。一八七七年日本に來日し、大森貝塚を発見。その後、発掘、研究を行う。
  - 3 佐原真「世界の中の縄文土器」芹沢長介・坪井清足『縄土器大成5・続縄文』講談社、一九八二年、一五七―一五八頁。
  - 4 一九〇二年生まれ、一九三六年没。東京帝国大学理学部人類学選科卒業後、パリに三年間留学。コレージュ・ド・フランスで社会学・民俗学を講じていたマルセル・モースの授業を聴講。その影響を受け、社会学、民俗学、民族学の統合を考えた。
  - 5 東京帝国大学理学部人類学選科の修士論文で、「注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布」(一九二七年)を発表。考古学に形態学の発想を科学的に導入し、東日本にみられる注口土器の諸形態・文様の分布を調べて、その出現頻度によって複数の文化圏を設定し、その伝播経路を想定して文化の中心を割り出す、というものであった。
  - 6 西欧の近代アートのイマジネーションの閉塞に対して、考古学や民俗学が対象とする「未開」社会の想像力を対峙させようとした芸術運動。『ドキュマン』はその運動の媒体となる雑誌である。副題は「考古学、美術、民族学、雑録」であり、様々なジャンルの学者、芸術家が、関わった。中谷の師であるマルセル・モースもその一人である。
  - 7 今福龍太「四次元的『日本』」『呪術』から「日常性の内部」へ」岡部美紀編集『CHIRAKU／四次元との対話 岡本太郎からはじまる日本の現代美術』川崎市岡本太郎美術館・独立行政法人国際交流基金、二〇〇六年、一〇二―一〇三頁。
  - 8 岡本太郎「縄文土器論―四次元との対話」『みづゑ』第五五八号、講談社、一九五二年、二月。
  - 9 石井匠「火焰土器の迷宮 断ち切られたもう一つの『岡本太郎』」『ユリイカ』4月臨時増刊号、第49巻、第6号(通巻699号)
- (総特集)◎縄文(Jomon) 青土社、二〇一七年、三月、一二一―一二三頁。

石井匠前掲書 一二三―一二四頁。

岡本敏子ほか「対談岡本太郎巫女×学生代表 芸術とは生きること」『芸學総合 OPS』vol.01。

「あの縄文土器をやったのも縄文に触発されたってこともあるけれど、あれをあの時の日本の本場にデレーツとした平面的なちまちまして細かくって、ああいう社会にぶつけることがとても有効な手段だと思ったから、あえてぶつけたの。しかもね、中期の火焰土器が特別すきなわけじゃないのによ。あの人はね、本当は一番好きだったのはもっと早期の、ごっこつした、そっけない、あまりこう飾りのついていないようなものの方が好きなんです。でも、あの時代にもし、そんなのがいいと言っても誰も縄文に引っかけからなかつたと思うのね。中期の火焰土器だったから、みんな彫刻だとももつてね、これはすごい芸術があつたんだって、みんなびびくりしたわけよ。だから、あれは戦術的な効果もあつたのね。」

梅原猛「縄文土器礼賛 アニミズムと性の表現」梅原猛・渡辺誠監修『縄文の神秘』(人間の美術1) 学習研究社、一九八九年、八四―一二三頁。

梅原猛「プロローグ 縄文芸術の見直し」梅原猛・渡辺誠監修前掲書 一七頁。

石原正敏『国宝「火焰型土器」の世界 笹山遺跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」124) 新泉社、二〇一八年、一九―二三頁。

「火焰型土器と西の縄文」(京都大学総合博物館 平成29年度特別展 京都大学総合博物館にて開催、二〇一七年九月九日〔土〕―一〇月二二日〔日〕)。

「特別展 縄文―1万年の美の鼓動」東京国立博物館、平成館にて開催、二〇一八年七月三日―九月二日。

石原正敏前掲書 二八―二九頁。

「火焰土器」は新潟県長岡市の馬高遺跡で近藤篤三郎が一九三六年に発見した最初の土器一点のみの名称である。その後近隣で「火



焰土器」と同じ器形や文様―口縁部の装飾がニワトリのとさかのようなもの(鶏頭冠突起)やノコギリの葉のようなもの(鋸歯状突起)―の土器が数多く出土し、それらを「火焰土器」と区別して「火焰型土器」と呼ぶようになった。また、「馬高式土器」「火焰土器」「火炎系土器」「火焰土器様式」などの呼び名があるが、研究者によって使い方がまちまちで統一されていない。本論では、総称として「火焰型土器」という名称を用いる。

石原正敏前掲書 六一頁。

その例として、新潟県の郷土史家笹野良吉氏は『妻有郷の歴史散歩』の中で火焰土器について次のように述べている。

「火焰型土器を生んだ中心地域が、日本でも有数の豪雪地帯と重なり合っているということは単なる偶然とは思えない。火焰型土器の燃えさかる炎のような造形を眺めていると、雪消えと共に一斉に萌え出すゼンマイやワラビ、コゴミなどの山菜の若芽の姿に一脉通ずるものがあるような気がしてならない。長い冬を雪に埋もれてうつ屈していたエネルギーが爆発的に燃えだした結晶が火焰土器の母体であるならば、火焰型土器もまた雪の中から生まれた文化の一つであるといわなければならない。」

予定が何もはいつておらずスケジュールが空白な状態を恐れる心理を、病気の病状に例えた言葉。

中国の黄河中流全域に存在した新石器時代の文明。時代は、紀元前五〇〇年前頃から三〇〇年前頃までとされる。

富士見町井戸尻考古館編集『井戸尻』第9集 富士見町井戸尻考古館、二〇一九年、三二―五九頁。

第三章 制作技術と造形、第四節 火焰型土器」で詳細を述べる。松本武彦『列島創世記』(日本の歴史・第一巻) 小学館、二〇〇七年、九九頁。

環状集落に関しては、「第二章 環境と造形 第二節集落の規模と社会の枠組み」で詳しく述べる。

一五六五年、正月から九月にかけて、上野国新田荘世良田長樂寺の住職、

賢甫義哲によって書かれた日記『群馬県史』に収められている。

甲野勇『縄文土器のはなし』学生社、二〇〇四年、五〇―五一頁。  
甲野勇前掲書 五一頁―五二頁。

持ち寄ったものの図は、『探奇漫録』と言う書物にまとめたが、学問的な記述はない。

一七五四年生まれ、一八二九年没。三河国(愛知県東部)に生まれる。三〇歳の頃から、東北、北海道を旅行し旅日記や、随筆を書いた。その著作は、二〇〇冊以上に及ぶ。

甲野勇前掲書 五五頁。

菅江真澄『新古祝甕類之図』の記述。

「出羽の国秋田郡北比内の庄、橋桁村の家の後なる地より掘り得るといふ。陸奥の津軽の甕ヶ岡より掘りうるがことに、をりとしていくらかも出る事あるてふ。そのさま蝦夷の国の禰母呂より掘り得て人のもて来りしに形おなし。これもいにしへ蝦夷の作りし陶に矢あらむかし」

岡田康博「三内丸山遺跡からの報告」NHK三内丸山プロジェクト・岡田康博編『縄文時代を掘る―三内丸山遺跡からの展開―』NHK出版、二〇〇五年、一〇頁。

菅江真澄は、一七九六年に三内村を訪れ土器片を採取し、一七九九年に『すみかの山』を書いた。その中に、三内丸山で採取した土器片に縄形の文様がある事を記述している。

一七三三年生まれ、一七九七年没。水戸藩彰考館に招かれ『大日本史』の編纂にたずさわる。自身が発掘した出土品から、記紀の間違いを指摘し、神武天皇の在位を六〇〇年繰り下げ、神代文字の存在を否定し、本居宣長などと、「日の神論争」を巻き起こした。考古家として名高い。

藤原貞幹が編纂した考古物の記載された書。京都の岡崎で手に入れた土器片を掲載している。それは縄文時代後期の堀之内式土器の把手であった。

一九二五年生まれ、一八〇八年没。出身地の近江南部は明晰や奇石の産地であり、自然と「奇岩」に興味を持つ。二〇〇〇種を超える石を採

集し分類した。また、石鏃の人口説も唱えており、考古学の先駆者とも評されている。

木内石亭が奇岩に関する博物誌。奇岩の他に、鉱物、岩石、化石のほか、性状、産地などが記載されている。三編一六巻から成り、一七七三年、一七七九年、一八〇一年の三回に分けて、大阪より出版された。

甲野勇前掲書 五七一五九頁。

一七三四年生まれ、一八〇六年没。会津藩の武士。『新編会津風土記』を編纂。著書の『孫謀録』は、奥州三天飢饉（一七八三）を克明に書いた名書。

田村三省が、領内の土木・建築事業などを指揮するかたわら、各地の石を見聞・収集し、晩年まとめたもの。一八〇二年に完成。会津の山奥から産出する「貝化石」から、「大昔は、このあたりも青々とした海で、後に山地となつて石に化したものにちがいない」と、現在の地質学にも合致するほど正確に記述している。

甲野勇前掲書 五九一六〇頁。

一八一〇年に起稿し、一八一〇年完成。全二六六巻

京都の『都名所図会』に刺激を受け、江戸の編纂を試みるが、完成を待たずに一八一八年死去。

長秋の死後、その息子莞斎、孫の月岑に引き継がれ、一八三六年、全七巻二〇冊の完成を見る。

八一三年生まれ、一八八八年没。郷土史家。三五歳で長男に家督を譲り、関東各地の史跡を調べた。

杉本林志が狭山周辺の歴史を調べて著した書。

甲野勇前掲書 六一頁。

「明治二年己三月、里長内野李左衛門分家清右衛門宅地の良方に李左衛門所有地あり。自庭の普譜のために、彼地の土を取りしに深さ八尺計の下に灰あり、長さ九尺計り、土中に筋あり、是を取り試みるに栗殻か笹の灰の如く節有、又丸石一籠計り出、其外挽磨砕、播鉢の欠けたる出たり。昔何に用いし穴の跡なるや知る人なし」この挽磨のかけらは石皿、播鉢の欠けは土器、その場所はおそらく火災で焼けた竪穴住居の跡だったと考えられる。

甲野勇前掲書 六〇―六一頁。

戸沢充則『縄文時代研究史序説』名著出版、一九九〇年、ii頁。

山田康弘『つくられた縄文時代―日本文化の原像を探る―』新潮社、二二―二五頁。

モースが一八七七年から数回の発掘調査の結果を一八七九年に

『Shells Mounds of Omori』として刊行され、同年二月に和文として東京大学理学部会報第一冊として刊行された。（矢田部良吉後述、寺内章明筆記）二〇〇六年、図版原図は東京大学総合博物館にて、デジタル化が行われた。

小金井は解剖学の形質人類学の観点から、「石器時代人IIアイヌ」説を主張し、一九〇四年に『日本石器時代の住民』を著した。

「コロボツクル北海道に住みなるべし」（一八八六・一八八七・一八八八）という論文を著し、アイヌは土器・石器を使用せず、竪穴に住んでいないため、「コロボツクル説」を主張した。

山田康弘前掲書 三三―四一頁。

小菅将夫『旧石器時代』の発見 岩宿遺跡（シリーズ「遺跡を学ぶ」100）新泉社、二〇一四年、四一―一七頁。

一九四九年、民間人の考古学者である相沢忠洋が群馬県みどり市笠町阿左美地内で、槌状剥離がある尖頭器である、石器の石槍を発見し、旧石器時代に日本列島に人類が生活していたことを裏付けた。

東北大学の松本彦七老は、宮城県宝ヶ峰・里浜貝塚などの発掘で、精密な分層的发掘を行い、土器の新旧を層位学原理により形態と文様を体系化した。

大塚達朗『縄紋土器研究の新展開』同成社、二〇〇〇年、八二頁。

大塚達朗前掲書 八三頁。

大塚達朗前掲書 八二―八六頁。

大塚達朗「山内清男の縄紋文化モデルの難点」『南山アーカイブスアルケイアー―記録・情報・歴史―』第11号、南山大学、二〇一七年、八三―一六頁。

一九九九年に、青森県の大平山本一遺跡から出土した無文土器が、放射性年代測定により一六〇〇年前を示したことにより、縄文時代を更

新世から完新世にまたがる時代設定をしたことを大塚が、「ハイパー縄紋文化」と呼んだ。

春成秀爾は更新世と完新世にまたがって一万年以上もどのような気候変化であっても縄文時代とした（春成二〇〇二）。また、今村啓爾は「年代的に一万年を超えて継続し、世界の時代区分でいう旧石器・中石器・新石器の各時代にまたがってひとつの縄文文化が続いたのである」と説明し、かつ、「縄文文化の驚くべき長さ」と持続性（今村二〇一四：六六二）が強調された。また佐藤宏之は、更新世では、朝鮮海峡と津軽海峡が陸続きであったにも関わらず、現在の日本列島の日本領域で更新世から完新世を縄文時代とした（佐藤二〇一二）。

一九四七年シカゴ大学のウィラード・ビーリーが発見。

動植物の内部における存在比率は死ぬまで変わらないが、死後酸素の供給が止まる事によって比率が下がり始める。その中の放射性同位体（炭素14）の半減期が五七三〇年であることから年代測定が可能になる。しかし後に誤差がある事が分かる。それは最大で四〇〇年程度である。

BP：考古学・地質学では、一九五〇年を起点とする。

これは、この年、放射性炭素年代測定が確立されたとしてもあり、一九五〇年に始まった水爆実験により、それ以降の放射性年代の測定が不可能になったことに由来する。生物学や言語学では、BPを「現在から何年前と使う事が多い。基点は、分野により異なる。

木の年輪の変動幅で年代を割り出す方法。年輪の幅は、気温降水量によつてことなり、ほぼ同じ地域で共通している。その変動パターンを統計化して年代を割り出す方法。一年刻みで特定でき、標準偏差を伴わない。

#### 加速器質量分析法

加速器で炭素原子をイオン化して同位体原子数を直接数える。これは放射性炭素年代測定法より高精度で、必要とされる炭素試料は一ミリグラム以下でよく、誤差は、〇・三〜〇・五パーセントと精

度は高く、測定時間は三〇分から一時間で済む。測定年代限界は六万年前まで可能。

原田昌幸「燃糸文土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、二〇〇八年、一二〇頁。

放射性炭素年代測定は、千葉県姥山貝塚出土の炭化材、検見川の泥炭層出土の大賀ハスの実が続く、わが国で三例目である。（吉田二〇〇五）。

西田泰民「年代の決め方」泉拓良・西田泰民責任編集『Jinidasu

Special Issue 縄文世界の「一万年」集英社、一九九九年、一九頁。

宮尾享「火焰土器の作り方」小林達雄編『縄文土器を読む』アム・プロモーション、二〇一二年、一二五―一四五頁。

レントゲン撮影により、火焰型土器の制作工程が解明された。

佐藤洋一郎「DNA分析で読むクワ栽培の可能性」岡田康博（NHK三内丸山プロジェクト）編『縄文時代を掘る 三内丸山遺跡からの展開』NHK出版、二〇〇五年、一九一―二三〇頁。

瀬口眞司『琵琶湖に眠る縄文文化 栗津湖底遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」107）新泉社、二〇一六年、六八―七四頁。

セタシジミの貝殻は一日一本の成長線を刻む。冬季になると成長が鈍るので成長線はせまくなる。それを利用して採集季節を割り出すというもの。集計の結果、七月から九月が全体の約六二パーセント、その前後一ヶ月半を含めると、全体の八三・三パーセントであった。

瀬口眞司『縄文集落の考古学―西日本における定住集落の成立と展開―』昭和堂、二〇〇九年、四一頁。

松田真一ほか『大川遺跡 縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所編集・山添村教育委員会、一九八三年、一六頁。

石井香代ほか『大川遺跡 第6・7次調査―山添村カントリーパーク事業に伴う発掘調査報告書―』奈良県立橿原考古学研究所編集、二〇〇四年、二頁。／四四―四六頁。

岡田康博前掲書 一五頁。

岡田康博前掲書 四〇頁。

71

山田昌久「縄紋集落の大きさとしくみ―縄紋都市説批判と東アジア社会の一部分としての三内丸山遺跡―岡田康博（NHK三内丸山プロジェクト）編『縄文時代を掘る 三内丸山遺跡からの展開』NHK出版、二〇〇五年、七九―八二頁。

住居数を二〇〇〇とすると、集落が継続した期間は一五〇〇年。

その内の六〇〇軒が中期の一〇〇〇年間に作られたと仮定。縄文時代の平均寿命が三〇年。住居の耐久年数が三〇年が想定され、一世代ごとに建て替えられたと仮定。それによって計算。

$600 \times 30 \div 1000 = 18$ （棟）まだ発見されていない住居址を考慮して、三割増しとしても二五棟。一軒あたりの居住人数を五人とたたら人口は八〇人から二二〇人であると推定した。

鈴木克彦「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」鈴木克彦・鈴木保彦編『集落の変遷と地域性』―シリーズ 縄文集落の多様性―雄山閣、二〇〇九年、五一頁―七八頁。

大塚達郎「消費される縄紋文化」『物質文化：考古学民俗研究＝Material culture: Journal of arc haeologic-folkloric studies』九六号、

物質文化研究会編、二〇一六年、二七三―二七七頁。

山田康弘前掲書 一〇九―一二五頁。

福田正宏「縄文文化における北の範囲」山田康弘・国立歴史民俗博物館〔編〕『『歴博フォーラム』『縄文時代 その枠組み・文化・社会をどう捉えるか？』吉川弘文館、二〇一七年、二四頁―四六頁。

伊藤慎二「縄文文化における南の範囲」山田康弘・国立歴史民俗博物館〔編〕前掲書、四七―六八頁。

谷口康浩「環状集落にみる社会複雑化」山田康弘・国立歴史民俗博物館〔編〕前掲書、一三八―一六一頁。

吉田泰幸「ハイパー縄紋文化の難点」をふりかえる『物質文化：考古学民俗研究＝Material culture Journal of arc haeologic-folkloric studies』九六号、物質文化研究会編、二〇一六年、二〇五―二二二頁。

山田康弘「縄文時代はどのように語られてきたのか」山田康弘・国立歴史民俗博物館〔編〕前掲書、一九頁。

80

ここである粗製土器とは、日常使いの粗製土器についてである。尚、粗製土器についての詳細は、「第三章 第二節 精製土器と粗製土器」の項で詳細を述べる。

81

瀬口眞司前掲書（80）一七頁。

ゴードン・チャイルドが一九五一年に唱えた新石器革命のこと。

最終氷河期が終わり、大きな気候変動に伴って温帯地域の乾燥・砂漠化が進んだことを想定し、それによってチグリス・ユーフラテス、ナイル川などの大河川に人口が集中し、穀物の農耕が可能になった。その過程で定住が可能になったことを指す。

82

西田正規『人類史のなかの定住革命』講談社、二〇一四年、一七頁。

83

西田正規前掲書 二四―三四頁。

84

西田正規『縄文の生態史観』UP考古学選書13、東京大学出版会、一九九五年、三〇頁。

85

山田康弘前掲書（86）一四三頁。

アメリカの考古学者ルイス・ビンフォードが一九八〇年、狩猟採集民の生活形態を分類したもの。これはアフリカのサン族（ブッシュユマン）とアラスカのイヌイト（エスキモー）の事例から、生業形態と居住形態を組み合わせた生活パターンの類型化である。

86

山田康弘前掲書（86）一四四―一四五頁。

これはコレクター型の度合いがさらに高まり、定住村落が成立し、狩猟採集の比重が減り、ムラの周辺では栽培などが行われるようになる。儀礼や交易活動も発達し、高密度社会へ適応していく。この定住村落型は、アメリカ北西海岸の先住民が該当する。

87

松木武彦前掲書 六七―七八頁。

88

小山修三『縄文時代 コンピューター考古学による復元』中央新書

89

一九八四年、六頁。／三二頁。

90

マーシャル・サリンス『石器時代の経済学』叢書・ウニベルシタス山内昶訳 財団法人法政大学出版局、一九八四年、五六頁―一七四頁。瀬口眞司「関西縄文社会の地域的特色とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告書』第二〇八集、二〇一八年三月、一九八頁。

- 9 1 泉拓良「第一章 縄文土器の成り立ち」泉拓良編『歴史発掘② 縄文土器出現』講談社、一九九六年、五一頁―五二頁。
- 9 2 アレン・テクスタイル「狩猟 採集民における食料貯蔵の意義―居住形態、人口密度、ならびに社会的平等―」新澤憲訳『現代思想』一九九〇年十二月、青土社、一一〇―一二七頁。
- 9 3 山田康弘前掲書(56) 一四二頁―一四三頁。
- 9 4 和泉田毅「中野B遺跡の驚異」泉拓良編『歴史発掘② 縄文土器出現』講談社、一九九六年、七一頁。
- 9 5 弥栄久志ほか『上野原遺跡―国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報―』(鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23) 鹿児島県埋蔵文化財センター、一九九七年。
- 9 6 森田郁郎ほか『上野原遺跡―国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報―』(鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41) 鹿児島県埋蔵文化財センター、二〇〇二年。
- 9 7 松木武彦前掲書 七六頁。
- 9 8 瀬口眞司前掲書(66) 六頁。
- 9 9 瀬口眞司前掲書(66) 四―一一頁。
- 1 0 0 瀬口眞司前掲書(8) 一一―一二頁。
- 1 0 1 瀬口眞司前掲書(8) 一二頁。
- 1 0 2 瀬口眞司前掲書(8) 一九四―一九六頁。
- 1 0 3 瀬口眞司前掲書(8) 一九六―一九八頁。
- 1 0 4 矢野健一『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社、二〇一六年、三三九―三六〇頁。
- 1 0 5 矢野健一前掲書 三六三頁。
- 1 0 6 矢野健一前掲書 四一四頁。
- 1 0 7 矢野健一前掲書 三四三頁。
- 1 0 8 山田猛ほか『大鼻遺跡―本文編―』(三重県埋蔵文化財調査報告100 5) 三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。
- 1 0 9 山田猛ほか『大鼻遺跡―図録編―』(三重県埋蔵文化財調査報告100 5) 三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。

- 1 1 0 山田猛ほか『大鼻遺跡―付図―』(三重県埋蔵文化財調査報告100 5) 三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。
- 1 1 1 酒詰仲男・岡田茂弘「大川遺跡」『奈良県文化財調査報告』第二集、奈良県教育委員会、一九五八年。
- 1 1 2 松田真一ほか前掲書。
- 1 1 3 石井香代ほか前掲書。
- 1 1 4 田村陽一ほか『鴻ノ木遺跡(下層編)―一般国道42号松坂・多気バイパス建設地内埋没文化財発掘調査報告IV―三重県埋蔵文化財調査報告123―4下三重県埋蔵文化財センター、一九九八年。
- 1 1 5 山田猛ほか前掲書(88) 二二三頁。
- 1 1 6 赤澤威「狩猟採集民の考古学 その生態学的アプローチ」海鳴社、一九八三年、一二頁。
- 1 1 7 菅沼亘ほか『笹山遺跡発掘調査報告書』(十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集) 十日町市教育委員会(文化財課、一九九八年。
- 1 1 8 阿部敬ほか『笹山遺跡発掘調査報告書―第8―10次調査―』(十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集) 十日町市教育委員会(文化財課、二〇一六年。
- 1 1 9 榎原功一「北陸・中部地方の縄文集落と世界観」鈴木克彦・鈴木保彦編『シリーズ 縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』雄山閣、二〇〇九年、一五八頁―一六〇頁。
- 1 2 0 鈴木保彦「関東・東海地方の縄文集落と縄文社会」鈴木克彦・鈴木保彦編『シリーズ 縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』雄山閣、二〇〇九年、一〇六頁。
- 1 2 1 瀬口眞司前掲書(66) 一一―二八頁。
- 1 2 2 本橋恵美子「柄鏡形敷石住居の出現と環状集落の終焉―縄文時代中期集落形態の変化を追う―」川崎保編『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣、二〇〇六年。
- 1 2 3 山田康弘前掲書(56) 六三頁―一〇八頁。

「縄文時代は格差のない社会であると思われる。それは高校の日本史の教科書による所が大きい。縄文時代の説明は、一九八五

年の教科書には、

「人々は集団で力を合わせてはたらき、収穫物はみんなで公平にわけあった。このような生活の中では、個人的な富や権力の発生を促すような余剰生産物の蓄積は不可能であり、集団の統率者はいても、貧富の差や階級の区別はなかったと思われる。」（井上他一九八四『解説日本史（新版）』山川出版）とある。それが、二〇一三年では次のようになっていた。

「人々は集団で力をあわせて働き、彼らの生活を守った。男性は狩猟や石器作り、女性は木の実とりや土器作りにはげみ、集団には統率者はいても、身分の上下関係や貧富の差はなかったと考えられている（笹山他二〇一三『詳説日本史B』山川出版社）。

この二つの違いは「統率者」の存在である。

山田康弘前掲書（66）七三頁。

山田康弘前掲書（66）

・塚原正則（『配石遺構』一九八七・一九八九年）七七頁。

葬法や副葬品における格差から、ある程度「階層化した社会」であり、高度な社会組織があった事を示唆した

・中村大（『墓制から読む縄文社会の階層化』一九九九）八〇頁。

「特定の地位や集団に属する人々が、他人とは異なる装身具や副葬品を保有するならば、その社会は不平等社会である」「縄文社会は不平等社会としたうえで、その社会的不平等が固定化され、個人の地位が世襲的な制度となった段階を階層社会と定義した。

・佐々木藤雄（『環状列石と縄文式階層社会』二〇〇二）八一―八二頁。

「集落中央広場や環状列石に葬られた人と葬られなかった人、その中心部に葬られた人と外側に葬られた人、さらには明瞭な埋葬施設さえ持つことのなかった人それぞれの意味に対する根本的な検討が必要であろう」と指摘。

・谷口康弘（『環状集落と縄文社会構造』二〇〇五）八二頁。

考古学的な証拠の見方だけでなく、階層かを必然的に発生させ、助長させていく要因、特に経済的な要因に関する考察が必要である。

・高橋龍三郎（「総論・村落と社会の考古学」『縄文後・晩期社会の複

合化と階層化過程をどう捉えるか―居住構造と墓制より見た千葉県遺跡例の分析』二〇〇一、「縄文後期社会の特質」二〇〇三、「縄文社会の階層化過程」二〇〇四）八三頁。

「階層社会への傾斜」を強く主張する一方、階層社会へ向かう過程である」と述べている。

山田康弘前掲書（66）七四―八三頁。

山田康弘前掲書（66）八三頁。

西田正規前掲書（84）九二頁

西田正規前掲書（84）七五頁―一〇〇頁

松田真一『奈良大和高原の縄文文化・大川遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」92）新生社、二〇一四年、五九頁。

山田猛ほか前掲書（108）二二三頁。

松田真一『奈良県の縄文遺跡』青垣出版、二〇一七年、一〇九頁。

松木武彦前掲書 九九頁。

西田泰民「神に捧げたもの」吉田邦夫編『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』東京大学総合研究博物館、二〇一二年、二二三頁。

小林達雄が縄文時代の生活実態の季節変化を著したもので、食糧調達要素の少ない夏に土器作りを集中的に行ったのではないかというもの。

水沢教子「土器をつくる女、土器をはこぶ男―胎土からみた土器のふるさと―」川崎保編『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣、二〇〇六年、一一五頁。

「縄文土器について爪の跡や、弥生土器について手の痕跡の繊細さからも女性が制作した可能性が指摘されている。『正倉院文書』「浄書所解」（天平勝宝二年）には女性が土師器の制作に従事し、男性が原料の土を採掘し、はこんでこね、薪を採り、……。……また、G・P・マードックの世界二四の民族が様々な労働を、主に男女どちらかが行ったかについて調査した結果によると、土器づくりは女性のみが携わるか、女性が主体的に携わっている民族

が全体の約80%を占める事が判明した。」

脇田宗孝「縄文土器における制作技法の一考察〈大川式土器〉」泉森校編集『研究紀要』第7集、財団法人 由良大和古代文化研究会、二〇一二年、八頁―一〇頁。

脇田宗孝のやり方は、土器を後から焙る等、細部は少し違うが、各地のワークショップや井出政男の考察などから、この方法を選択した。

水沢教子前掲書 一一七頁。

佐原真「世界の中の縄文土器」芹沢長介・坪井清足『縄土器大成5・続縄文』講談社、一九八二年、一六〇頁。

瀬口真司前掲書(8) 八頁。

吹上パターンは、埼玉県和光市吹上貝塚(中期)の資料から、住居の床面を直接覆う堆積土から、しばしば完全ないしそれに近い状態の土器が大量かつ集中的に出土する。小林はこれを①住居の廃絶②土器の破棄③貝殻の破棄という過程で捉え、モデル化した。佐原真前掲書 一六〇頁。

「慣習による土器の機能の意味の喪失」とは、スリランカにおいて正月に用いる小皿は年に一回しか使われず、その後は破棄される。また西アジアにおいては、塩分におかされたり、貯水土器が藻やバクテリアの繁殖により破棄されている。そのような慣習を指す。

山内清男が堀之内式・加曽利B式・安行式を分析したもの。『日本先史土器図鑑』一九三九年―一九四一年、に記録されている。

西田泰民「神に捧げたもの」吉田邦夫編『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』東京大学総合研究博物館、二〇一二年、二一〇頁。

縄文時代前期の諸磯式・北白川下層。式期の浅鉢には、精製土器と粗製土器の区別が明白な浅鉢がある。

長岡市教育委員会『火焰土器と馬高・三十稲場遺跡』(馬高縄文館解説シリーズNo.1) 長岡市教育委員会、二〇一〇年、六頁。

井関文明ほか『川尻遺跡Ⅲ―相模原市大島・城山町谷ヶ原地内送

水管布設工事に伴う発掘調査―(かながわ考古学財団調査報告書

262) 財団法人 かながわ考古学財団、二〇一〇年、第19表、

二二六頁―二二七頁。

西田泰民「精製土器と粗製土器―胎土からの検討―」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3、東京大学文学部考古学研究室、一九八四、一一―二五頁。

岡本東三『縄文時代早期 押型紋土器の広域編年研究』雄山閣、二〇一七年、三頁。

松田真一ほか前掲書 九七頁

松田真一ほか前掲書 五二頁。

酒詰仲男・岡田茂弘前掲書 図版第三(下) 大川遺跡出土第一群B類土器。

図版6―③大川遺跡出土押型文土器の分類と文様の関係

図版6―④大川遺跡出土押型文土器編年表

図版6―②大川遺跡出土押型文土器 文様構成模式図

図版6―①大川遺跡出土押型文土器 器形分類概念図

松田真一ほか前掲書 二六七頁。／二七〇頁。

松田真一ほか前掲書 七一頁。

二〇一九年六月一日、松田真一への聞き取り調査にて確認。報告書の記載はないが、発掘の際そのような個体が確認されたとのことである。

山田猛「押型文土器群の型式学的再検討―三重県下の前半期を中心として―」『三重県史研究』第四号、一九八八年、五九頁。

仁科章『破入遺跡発掘調査報告書』―福井県勝山市滝波 破入遺跡発掘調査報告―勝山市文化財調査報告 第Ⅱ集 勝山市教育委員会、

一九七七年、三〇頁。

徳永哲英「尖底土器を作る」『紀要』8号、長野県埋蔵文化財センター、二〇〇八年八月、六二―六九頁。

斎藤正憲「エジプト、ファイユーム・ナズラの叩き成形」佐々木幹雄・斎藤正憲編『世界の土器づくり』同成社、二〇〇五年、一一〇―一二五頁。

- 脇田宗孝前掲書 一一〇頁。  
 石原正敏前掲書 六一頁。  
 長岡市教育委員会前掲書 二九頁。  
 石原正敏前掲書 六一頁。  
 石原正敏前掲書 五一六頁。  
 富士見町井戸尻考古館編集『井戸尻』第9集、富士見町井戸尻考古館、二〇一九年、三一―五八頁。  
 新潟県・津南町教育委員会編集『技と造形の縄文世界―形と文様にみる美の心―』津南学叢書、第36輯、二〇一九年九月、五六―五八頁。  
 佐藤雅一「縄文文様の世界―信濃川流域の中期縄文土器―」佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉編集『越後・津南の土偶―河童形土偶とその地域性―』津南学叢書、第37集、予稿集、二〇一九年九月、一三三―一四六頁。  
 富士見町井戸尻考古館編集前掲書 五八頁。  
 京都大学総合博物館の平成29年度の特別展として開催された。会期は、二〇一七年九月9日から一〇月二二日まで。  
 石原正敏前掲書 三三頁。  
 西田泰民・宮尾亨「透視術」吉田邦夫編『アルケメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』東京大学総合研究博物館、二〇一二年、一二四頁。  
 宮尾亨「火焰土器の作り方」小林達雄編『縄文土器を読む』アム・プロモーション、二〇一二年、一三二頁。  
 西田泰民・宮尾亨前掲書 一一九―一二六頁。  
 吉田邦夫・小島俊彰・宮尾亨・西田泰民「マイクロフォーカスX線CT装置を利用した火焰型土器の隆起文様施文手法の検討」新潟県立歴史博物館『火焰土器の研究』、同成社、二〇〇四年、一二六―一三五頁。  
 宮尾亨前掲 一三一―一三二頁。  
 寺崎裕助「火焰土器研究の現状」京都大学文化財総合研究センター・信濃川火焰街道連携協議会・新潟県立歴史博物館編集『京都大学博物館平成29年度 特別展 火焰型土器と西の縄文』濃川火焰街道連携協議

- 会、二〇一七年、一一四頁。  
 二〇一九年四月二〇日から六月二三日まで、兵庫県立考古博物館にて開催された「特別展 縄文土器とその世界―兵庫の1万年―」この展覧会では、兵庫県の縄文時代の草創期から晩期までの土器や石器の展示に加え、新潟県の津南町から火焰型土器も出品された、併せて、火焰型土器の土器片も公開された。  
 岡本東三前掲書 一一四頁。  
 山田猛前掲書 五七頁。  
 矢野健一「押型文手法」小杉康・谷口康浩・西田泰民・水之江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学7土器を読み取る 縄文土器の情報』同成社、二〇〇八年、八六―九一頁。  
 この方法は片岡肇が考案した施文具の加工方法である（片岡一九七二・七八・七九）。しかし、その後の研究で、矢野健一が考案した加工の方が妥当性があるとされた。  
 矢野健一前掲書（83）八八頁。  
 岡本東三前掲書 一〇三頁。  
 松田真一ほか前掲書 二六四頁、表87、図版57・58。  
 松田真一ほか前掲書 二六六頁。／二七二頁。  
 山田猛前掲書 四九頁。  
 松田真一ほか前掲書 七五―七六頁。／二七〇頁。  
 下村晴文「神並遺跡出土の押型文土器」『財団法人 東大阪市文化財協会』財団法人東大阪文化財協会、一九八七年、四一―一〇頁。  
 松田真一ほか前掲書 二七二頁。  
 松田真一「奈良県の押型文土器研究の動向」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号、一九九三年、三九―四〇頁。  
 岡本東三前掲書 一九九―二〇〇頁。  
 深井昭比古ほか『縄文土器とその世界―兵庫の1万年―』（兵庫県立考古博物館図録No.24）兵庫県立考古博物館、二〇一九年、二四頁。  
 大田三喜ほか『奈良県天理市布留遺跡豊井（打破り）地区発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告29 埋蔵文化財天理教調査団、二〇一三年、挿図128 L、N、224出土縄紋土器（2）Ea 一三四頁。



197	甲野勇前掲書 八六―八七頁。
198	阿部芳郎「縄文時代早期後半土器の底部形態と使用痕の研究―船橋市飛ノ台貝塚出土土器群の観察―」『飛ノ台史跡公園博物館 紀要』第7号、飛ノ台史跡公園博物館、二〇一七年、三月、一一―一四頁。
199	深井明比古ほか前掲書 四一頁。

## 参考文献

## 書籍

- 赤澤威『狩猟採集民の考古学 その生態学的アプローチ』海鳴社、一九八三年。
- 阿部敬ほか『笹山遺跡発掘調査報告書―第8～10次調査―』（十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集）十日町市教育委員会（文化財課）、二〇一六年。
- 石井香代・橋本裕行・奥田尚『大川遺跡 第6・7次調査―山添村カントリーパーク事業に伴う発掘調査報告書―』奈良県立橿原考古学研究所編集・山添村教育委員会、二〇〇四年。
- 石原正敏『国宝「火焰型土器」の世界 笹山遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」124）新泉社、二〇一八年。
- 泉拓良編『歴史発掘② 縄文土器出現』講談社、一九九六年。
- 泉拓良・西田泰民『縄文世界の一万年』集英社、一九九九年。
- 井関文明ほか『川尻遺跡Ⅲ―相模原市大島・城山町谷ヶ原地内送水管布設工事に伴う発掘調査―』（かながわ考古学財団調査報告書262）財団法人かながわ考古学財団、二〇一〇年。
- 梅原猛・渡辺誠『縄文の神秘』（人間の美術1）学習研究社、一九八九年。
- 太田三喜ほか『奈良県天理市布留遺跡豊井（打破り）地区発掘調査報告書』（考古学調査研究中間報告29）埋蔵文化財天理教調査団、二〇一二年。
- 大塚達朗『縄紋土器研究の新展開』同成社、二〇〇〇年。
- 岡本東三『縄紋時代早期 押型文土器の広域編年研究』雄山閣、二〇一七年。
- 交野市教育委員会『神宮寺遺跡範囲確認調査概要―交野市倉治所在―』（交野市文化財調査概要1973-1）交野市教育委員会、一九七三年。
- 京都大学総合博物館「火焰型土器と西の縄文 Jomonesque Japan 2017」展 実行委員会監修『京都大学総合博物館 平成29年度特別展 火焰型土器と西の縄文 Flame-pots-Jomonesque Japan 2017』

信濃川火焰街道連携協議会、二〇一七年。

- 甲野勇『縄文土器のはなし』学生社、二〇〇四年。
- 小菅将夫『「旧石器時代」の発見・岩宿遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」100）新泉社、二〇一四年。
- 小林達雄『縄文土器Ⅰ』（日本の原始美術1）講談社、一九七九年。
- 小林達雄『縄文土器を読む』株式会社アム・プロモーション、二〇一二年。
- 小林達雄編集『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館、一九九六年。
- 小林達雄編集『縄文土器大観2 中期Ⅰ』小学館、一九九六年。
- 小林達雄編集『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館、一九九六年。
- 小林達雄編集『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館、一九九六年。
- 小山修三『縄文時代―コンピュータ考古学による復元―』中央新書、一九八四年。
- 酒詰仲男・岡田茂弘『大川遺跡』（奈良県文化財調査報告 第二集）奈良県教育委員会、一九五八年。
- 下村晴文ほか『神並遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会・財団法人 東大阪文化財協会、一九八七年。
- 菅沼亘・阿部恭平・石原正敏『笹山遺跡発掘調査報告書』（十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集）十日町市教育委員会（文化財課）、一九九八年。
- 瀬口眞司『縄文集落の考古学―西日本における定住集落の成立と展開―』昭和堂、二〇〇九年。
- 瀬口眞司『琵琶湖に眠る縄文文化 粟津湖底遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」107）新泉社、二〇一六年。
- 田村陽一ほか『鴻ノ木遺跡（下層編）―一般国道42号松坂・多気バイパス建設地内埋没文化財発掘調査報告Ⅳ―』（三重県埋蔵文化財調査報告123-4下）三重県埋蔵文化財センター、一九九八年。
- 十日町市博物館『国宝 笹山遺跡出土品のすべて』十日町市博物館、二〇一一年。
- 十日町市博物館『土器造りの考古学』十日町市博物館、二〇一六年。
- 戸沢光則『縄文時代史研究 序説』名著出版、一九九〇年。

長岡市教育委員会『火焰土器と馬高・三十稻場遺跡』（馬高縄文館 解説

シリーズNo.1）長岡市教育委員会、二〇一〇年。

西田正規『人類史の中の定住革命』講談社学術文庫、二〇一四年。

西田正規『縄文の生態史観』（UP考古学選書13）東京大学出版会、

一九九五年。

深井昭比古ほか『縄文土器とその世界―兵庫の1万年―』（兵庫県立考古博物館

図録No.24）兵庫県立考古博物館、二〇一九年。

マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』（叢書・ユニベルシタス）

山内昶訳、財団法人 法政大学出版局、一九八四年。

松木武彦『列島創世記』（日本の歴史・第一巻）小学館、二〇〇七年、

一一一八八頁。

松田真一『奈良大和高原の縄文文化・大川遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」92）

新生社、二〇一四年。

松田真一『奈良県の縄文遺跡』青垣出版、二〇一七年。

松田真一ほか『大川遺跡 縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書』奈良県立橿原

考古学研究所編集・山添村教育委員会、一九八三年。

森田郁郎ほか『上野原遺跡―国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書―』第1分冊・第3分冊（鹿児島県埋蔵

文化財センター発掘調査報告書41）鹿児島県埋蔵文化財センター、

二〇〇二年。

弥栄久志ほか『上野原遺跡―国分上野原テクノパーク第4工区造成工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報―』（鹿児島県埋蔵文化財センター発掘

調査報告書23）鹿児島県埋蔵文化財センター、一九九七年。

矢野健一『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社、二〇一六年。

山田猛ほか『大鼻遺跡―図録編―』（三重県埋蔵文化財調査報告100―5）

三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。

山田猛ほか『大鼻遺跡―本文編―』（三重県埋蔵文化財調査報告100―5）

三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。

山田猛ほか『大鼻遺跡―付図―』（三重県埋蔵文化財調査報告100―5）

三重県埋蔵文化財センター、一九九四年。

## 論文

山田康弘『つくられた縄文時代―日本文化の現像を探る』新潮社、二〇一五年。

吉田昇ほか『旧遺跡―本州四国連絡道路建設に伴う埋没文化財発掘調査報告

Ⅲ―』第2分冊、自然科学・総括篇（兵庫県文化財報告第176冊）

兵庫県教育委員会埋没文化財調査事務所、一九九八年。

阿部芳郎『縄文時代早期後半土器の底部形態と使用痕の研究―船橋市飛ノ台

貝塚出土土器群の観察―』『飛ノ台史跡公園博物館 紀要』第7号、

船橋市飛ノ台史跡公園博物館、二〇一七年、三月、一一一四頁。

アレン・テクスタール『狩猟採集民における食料貯蔵の意義―居住形態、

人口密度、ならびに社会的不平等―』新澤憲訳『現代思想』

一九九〇年一二月、青土社、一一〇―一二七頁。

石井匠『火焰土器の迷宮 断ち切られたもう一つの「岡本太郎」』『ユリイカ』

4月臨時増刊号 第49巻第6号（通巻699号）（総特集◎縄文

・yoman）青土社、二〇一七年、三月、一一九―一二九頁。

泉拓良『縄文時代集落研究の課題』京都大学学術情報リポジトリ紅』京都大学、

二〇〇六年。

和泉田毅『中野B遺跡の驚異』泉拓良編『歴史発掘②縄文土器出現』講談社

一九九六年、六九―七一頁。

伊藤慎二『縄文文化における南の範囲』山田康弘・国立歴史民俗博物館（編）

『歴博フォーラム』『縄文時代その枠組み・文化・社会をどう捉える

か？』吉川弘文館、二〇一七年、四七―六八頁。

稲田孝司『縄文式土器文様発達史・素描（上）』『考古学研究』18巻4号、

考古学研究会、一九七二年三月、九―二五頁。

今福龍太『四次元的「日本」『呪術』から「日常性の内部」へ』

『CHIKAKU／四次元との対話 岡本太郎からはじまる日本の

現代美術』（ヨーロッパ巡回帰国展）川崎市岡本太郎美術館、

二〇〇六年、一〇二—一〇一頁。

大塚達郎「山内清男の縄文文化モデルの難点」『アルケイアー—記録・情報・歴史—』第11号、南山アーカイブス、二〇一七年、三月、八三—一六頁。

大塚達郎「縄文土器研究解題—山内清男—」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、二〇〇八年、八七—一八七頁。

岡田康博「三内丸山遺跡からの報告」NHK三内丸山プロジェクト・岡田康博編『縄文時代を掘る—三内丸山遺跡からの展開—』NHK出版、二〇〇五年、九—四三頁。

岡本太郎「縄文土器論—四次元との対話—」『みずろ』講談社、一九五二年、二月。榎原功一「北陸・中部地方の縄文集落と世界観」鈴木克彦・鈴木保彦編集

『集落の変遷と地域性』（シリーズ 縄文集落の多様性Ⅰ）雄山閣、二〇〇九年、一四五—一八四頁。

小谷涉「精製土器と粗製土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、二〇〇八年、一〇三七—一〇四二頁。

小山修三・杉藤重信「縄文人口シミュレーション」『国立民族学博物館研究報告』九卷一号、国立民族学博物館、一九八四年、一—三九頁。

佐藤雅一「縄文文化の世界—信濃川流域の中期縄文土器—」佐藤雅一・佐藤信之・今井哲哉編集『越後・津南の土偶—河童形土偶とその地域性—』津南学叢書、第37集、予稿集、二〇一九年、一三三—一四六頁。

佐藤雅一「縄文土器の文様世界」新潟県・津南町教育委員会編集『技と造形の縄文世界—形と文様にみる美の心—』津南学叢書、第36輯、二〇一九年、五一—六五頁。

佐藤洋一郎「DNA分析で読むクリ栽培の可能性」・NHK三内丸山プロジェクト・岡田康博編『縄文時代を掘る—三内丸山遺跡からの展開—』NHK出版、二〇〇五年、一一九—一三〇頁。

佐原真「世界の中の縄文土器」芹沢長介・坪井清足『縄文土器大成5・続縄文』講談社、一九八二年、一五四—一六一頁。

下村晴文「神並遺跡出土の押型文土器」『財団法人 東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』財団法人東大阪文化財協会、一九八七年、一一—二二頁。

鈴木克彦「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」鈴木克彦・鈴木保彦編集

『集落の変遷と地域性』（シリーズ 縄文集落の多様性Ⅰ）雄山閣、二〇〇九年、五一—九四頁。

鈴木保彦「関東・東海地方の縄文集落と縄文社会」鈴木克彦・鈴木保彦編集『集落の変遷と地域性』（シリーズ 縄文集落の多様性Ⅰ）雄山閣、二〇〇九年、九五—一四四頁。

鈴木保彦「縄文土器の研究史—戦後から現在—」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、二〇〇八年、八五—一八七頁。

瀬口眞司「関西縄文社会の地域的特色とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二〇八集、二〇一八年三月、一九—二二三頁。

寺崎裕助「火焰土器研究の現状」京都大学文化財総合研究センター・信濃川火焰街道連携協議会・新潟県立歴史博物館編集『京都大学博物館 平成29年度 特別展 火焰型土器と西の縄文』濃川火焰街道連携協議会、二〇一七年、一一四—一一五頁。

西田泰民「神に捧げたもの」吉田邦夫編『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』東京大学総合研究博物館、二〇一二年、二〇九頁—二一七頁。

日本第四紀学会、二〇一五年。  
原田昌幸「撚糸文土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、二〇〇八年、一一二—一二二頁。

福田正宏「縄文文化における北の範囲」山田康弘・国立歴史民俗博物館（編）『歴博フォーラム』『縄文時代 その枠組み・文化・社会をどう捉えるか？』吉川弘文館、二〇一七年、一四頁—四六頁。

水沢教子「土器をつくる女、土器をはこぶ男—胎土からみた土器のふるさと—」川崎保編『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣、二〇〇六年、九三—一二九頁。

宮尾享「火焰土器の作り方」小林達雄編『縄文土器を読む』アム・プロモーション、二〇一二年、一二五—一四五頁。

本橋恵美子「柄鏡形敷石住居の出現と環状集落の終焉—縄文時代中期集落形態の変化を追う—」川崎保編『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣、

二〇〇六年、一三三―一六六頁。

矢野健一「押型文手法」小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一『土器を読み取る縄文土器の情報』（縄文時代の考古学7）同成社、二〇〇八年、八五―九八頁。

山田猛「押型文土器群の型式学的再検討―三重県下の前半期を中心として―」三重県総務部学事文書課『三重県史研究』第四号、一九八八年、三月、四五―七四頁。

山田昌久「縄紋集落の大きさとしくみ―縄紋都市説批判と東アジア社会の一部分としての三内丸山遺跡―」NHK三内丸山プロジェクト・

岡田康博編『縄文文化を掘る―三内丸山からの展開―』日本放送出版協会、二〇〇五年、七九―一〇二頁。

山内清男「縄紋式土器・総論」『日本の原始美術』第1巻、講談社、一九六四年、一四八―一五八頁。

脇田宗孝「縄文土器における制作技法の一考察（大川式土器）」泉森校編集『研究紀要』第7集、財団法人 由良大和古代文化研究会、

二〇一二年、一―一〇頁。

# 図版

## 目次

図版 1	縄文時代の人口の推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5 2
	（小山修三・杉藤重信「縄文人口シミュレーション」『国立民族学博物館研究報告』9巻1号、一九八四年、三月、六頁、より転載。）	
図版 2	大鼻遺跡 早期遺跡の遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・	5 3
	①調査区全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5 3
	（山田猛ほか『大鼻遺跡（付図）』（三重県埋蔵文化財調査報告1000—5）三重県埋蔵文化財センター、一九九四年、付図1より転載。）	
	②Ⅰ区全体図（早期の遺構）（同右・付図2より転載。）・・・・・・・・	5 3
	③Ⅱ区全体図（早期の遺構）（同右・付図3より転載。）・・・・・・・・	5 3
図版 3	大川遺跡 早期遺跡分布範囲想定図・・・・・・・・・・	5 4
	（石井香代子ほか『大川遺跡 6・7次調査—山添村カントリーパーク事業に伴う発掘調査報告書—』第34図 山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇四年、四五頁、より転載。）	
図版 4	鴻ノ木遺跡 遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5 5
	（田村陽一ほか『鴻ノ木遺跡（下層編）—一般国道42号松坂・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—』第六図（三重県埋蔵文化財調査報告1234下）（三重県埋蔵文化財センター、一九九八年、二二—二三頁より転載。）	
図版 5	笹山遺跡 中期の遺跡遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・	5 6
	①第1～7次発掘調査…中期の遺構分布図・・・・・・・・・・	5 6
	（菅沼亘・阿部恭平・石原正敏『笹山遺跡発掘調査報告書』（十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集 十日町市教育委員会（文化財課）、一九九八年、図版1より転載。）	
	②第8～10次発掘調査…中期の遺構分布図・・・・・・・・・・	5 6
	（S・T・U区遺構分布）	
	（阿部敬ほか『笹山遺跡発掘調査報告書—第8～10次調査—』（十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集、十日町市教育委員会（文化財課）、二〇一六年、図版1より転載。）	
図版 6	井出政男 土器づくり・煮沸実験データ・・・・・・・・	5 7

①井出政男制作「千石原遺跡 火焰土器」の模写	57
《土器づくりの考古学》十日町市博物館編集・発行、二〇一六年、七頁より転載。	
②井出政男個展 ギャラリー風画 二〇一九年七月二十四水～八月二一日(日)	
（井出政男の模写した縄文土器の展示と、土器の煮沸実験結果を展示	

著者撮影、二〇一九年八月二〇日

③煮沸実験の様子(同右)	57
④水漏れ実験の様子(同右)	57
⑤土器の使用耐久実験結果による割れた土器(同右)	57
⑥煮沸実験による漏水時間のグラフ	58
(同右) (一九九五年～二〇一九年のデータによる)	

⑦粘土別による漏水時間の比較データ(同右)	58
⑧繰り返し煮炊きによる土器の耐久性とその使用限界のデータ	58
(同右)(同右)	

## 図版 7

山内清男が分析した、安行式土器(後期)の精製土器と粗製土器の例	59
(埼玉県立歴史と民俗の博物館展示、著者撮影、二〇一九年八月九日)	
①加曾利BⅡ式	59
左: 精製土器 本庄市東谷遺跡 埼玉県立史跡博物館所蔵	
右: 粗製土器 さいたま市寿能泥炭層遺跡 埼玉県教育委員会所蔵	

②安行Ⅰ式	59
左: 精製土器 さいたま市寿能泥炭層遺跡 埼玉県教育委員会所蔵	
右: 粗製土器 さいたま市寿能泥炭層遺跡 埼玉県教育委員会所蔵	
③安行Ⅲb式	59
左: 精製土器 さいたま市寿能泥炭層遺跡 埼玉県教育委員会所蔵	
右: 粗製土器 さいたま市寿能泥炭層遺跡 埼玉県教育委員会所蔵	

## 図版 8

馬高遺跡 住居跡 VIII E区第1号住居の土器分析	60
新潟県長岡市教育委員会所蔵	
馬高縄文館展示(著者撮影、二〇一八年一〇月一九日)	

①A群: 火焰型土器	60
②A群: 王冠型土器	60
③B群: 在地で発達した波状形の沈線文が特徴	60
④C群: 大木式土器様式の影響を受けた土器	60
⑤D群: わずかな縄文のみの施文	60

## 図版 9

大川式土器	61
①大川式土器: 第3次発掘調査出土土器 No. 221	61
奈良県立橿原考古学研究所所蔵 山添村歴史民俗資料館展示	
(著者撮影、二〇一九年九月二七日)	

②大川式土器: 第2、5次発掘調査出土 No. 97	62
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵(同: 画像提供)	

## 図版 10

③大川式土器: 第2次発掘調査出土土器 同右(同右)	63
大川遺跡出土押型文土器 器形・文様構成概念・復元図	64
(松田真一ほか『奈良県山辺郡山添村 大川遺跡 縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書』山添村教育委員会 一九八三年、より転載。)	

## 図版 11

①大川遺跡出土押型文土器 器形分類概念図(図101、七三頁)	64
②大川遺跡出土押型文土器 文様構成模式図(図102、七四頁)	64
③大川遺跡出土押型文土器の分類と文様の関係(表87、二六四頁)	64
④大川式出土土器の乳房型尖底部分 大川遺跡出土	65
奈良県立橿原考古学研究所所蔵(資料見学時 著者撮影、二〇一八年二月二八日)	

## 図版 12

①乳房型尖底部分	66
②乳房型尖底部分	66
③乳房型尖底部分	66
④乳房型尖底部分	66
⑤乳房型尖底部分	66
⑥乳房型尖底部分	66
制作時の粘土のつけ方による、粘土紐の向きの違い(著者作成)	67
著者制作: 野焼きの際割れた土器(著者撮影、二〇一九年九月一九日)	67

## 図版 13

①割れた土器	67
②割れた土器断面	67
③割れた土器断面	67
大川式土器: 粘土紐の向きがわかる土器片断面 大川遺跡出土	68
奈良県立橿原考古学研究所所蔵(資料見学時 著者撮影 二〇一八年二月二八日)	

## 図版 14

①粘土紐の向きがわかる土器片断面	68
------------------	----

図版 15

②粘土紐の向きがわかる土器片断面	68
大川式土器・No.1182 大川遺跡出土	68
奈良県立橿原考古学研究所蔵(資料見学時 著者撮影 二〇一八年二月二八日)	

図版 16

①No.1182 (表面)	68
②No.1182 (裏面)	68
③No.1182 (断面)	68
大川式土器制作の考察(著者作成)	69
①籠作り成形法	69
②逆さ造り成形法	69
③底を平底で作った後、削り出す方法	69
大川式土器制作実験(著者制作・撮影)	70

図版 17

①薪の準備(二〇一七年四月一日)	70
②粘土の採集(二〇一七年二月二七日)	70
③不純物の除去作業(二〇一八年一月一六日)	70
④施文具作り(二〇一八年一月一六日)	70
⑤砂を粘土に二割混ぜ、練り合わせる(二〇一八年二月四日)	70
⑥土台の籠を藤ヅルで制作(二〇一八年二月三日)	70
⑦籠の土台を固定させ、内側に粘土を付け凹型を作る	71
(二〇一八年五月二〇日)	

⑧内側に絶縁体になる細かい砂をつけ	71
底から粘土を張り付けていく(二〇一八年五月二〇日)	71

⑨口縁部のくびれまで立ち上げ、半日乾かす(二〇一八年五月二二日)	71
⑩口縁部を立ち上げる(二〇一八年五月二二日)	71
⑪半日乾かし型から抜き、胴部に施文具を転がし施文する	71
(二〇一八年五月二二日)	

⑫口唇部に割りばしの先で施文する(二〇一八年五月二二日)	71
⑬五日乾かし、野焼きする(二〇一八年五月二七日)	71
⑭完成(二〇一八年五月二八日)	71

図版 18

ゆがみのある火焰型土器	
①火焰型土器 十日町市指定文化財	

新潟県十日町市野首遺跡 十日町市博物館所蔵

〔「火焰型土器と西の縄文―京都大学総合博物館平成29年度特別展―」

京都大学総合博物館二〇一七年九月九日(土)〜一〇月二三日(日)にて、

著者撮影二〇一七年九月二日).....72

②火焰型土器 国宝 新潟県十日町市笹山遺跡 十日町市博物館所蔵(同右)	72
-------------------------------------	----

安定感を感じる火焰型土器	72
--------------	----

①火焰型土器 国宝No.1 新潟県十日町 笹山遺跡十日町市博物館所蔵	72
------------------------------------	----

(石原正敏『国宝「火焰型土器」の世界笹山遺跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」

124) 新泉社 二〇一八年二頁より転載。)

②火焰型土器 国宝No.6 新潟県十日町 笹山遺跡十日町市博物館所蔵	72
------------------------------------	----

(同右、二四頁より転載。)...72

ゆがみが見られる土器	73
------------	----

①有孔罌付土器 井戸尻遺跡 三号住居址 富士見町井戸尻考古館所蔵	73
----------------------------------	----

(著者撮影二〇一九年八月一〇日)

②深鉢 広原遺跡三号小堅穴 富士見町井戸尻考古館所蔵(同右)	73
--------------------------------	----

③深鉢 井戸尻遺跡三号住居址 富士見町井戸尻考古館所蔵(同右)	73
---------------------------------	----

④深鉢 中期・藤内式期 古林第四遺跡(大泉町西井出) 北杜市教育委員会所蔵	73
---------------------------------------	----

北杜市考古資料館展示(著者撮影二〇一九年八月九日)

打越遺跡の早期・前期の土器 富士見市立水子貝塚資料館所蔵	74
------------------------------	----

(著者撮影二〇一九年八月九日).....74

①早期の土器	
--------	--

下左から…打越式土器中段階(打越遺跡第一三一号土坑)・打越式土器中段階

(打越遺跡第六九号住居跡出土)・打越式土器中段階(打越遺跡第

五五号住居跡)

上左から…下沼部式土器(氷川前遺跡)・打越式土器新段階(氷川前遺跡)

②前期の土器 花積下層式土器(打越遺跡) 五個すべて	74
----------------------------	----

文様の剥離した火焰型土器 新潟県三条市吉野屋遺跡出土(捧正夫氏)	75
----------------------------------	----

(西田泰民・宮尾亨「透視術」吉田邦夫編『アルケオメトリアー考古遺物と美術

工芸品を科学の眼で透かし見る』東京大学総合博物館、二〇一二年、

一二四頁より転載。)



図版 23 火焰型土器のCT画像（上…立断面 下…断層）新潟県長岡市馬高遺跡出土土器

（東京大学文学部列品室）（同前頁、一二五頁より転載。）

図版 24 火焰型土器の破片 新潟県津南町教育委員会所蔵

（「縄文土器とその世界―兵庫の1万年―」展 二〇一九年四月二〇日～六月二三日、

兵庫県立考古博物館にて、著者撮影二〇一九年五月二日）

① 火焰型土器破片（1）

② 火焰型土器破片断面（1）

③ 火焰型土器破片（2）

④ 火焰型土器破片断面（2）

図版 25 押型文土器の編年試案―近畿地方の前半期を中心として―

（山田猛「押型文土器群の型式学的再検討―三重県下の前半期を中心として―」

『三重県史研究』第四号、三重県総務部学事文書課、一九八八年三月、

五七頁より転載。）

図版 26 口縁部変遷模式図（同右）

図版 27 ネガティブ押型文土器（近畿圏）

① 大鼻式土器 大鼻遺跡

三重県埋蔵文化財センター保管（三重県埋蔵文化財センター画像提供）

② 大川式a式土器 鴻ノ木遺跡

三重県埋蔵文化財センター保管（三重県埋蔵文化財センター画像提供）

③ 神宮寺式土器 神並遺跡

（著者撮影、二〇一八年三月二〇日）

④ 大鼻式土器 枝回転文

（資料見学时 著者撮影、二〇一七年二月二五日）

⑤ 大川式土器 市松文

（資料見学时 著者撮影二〇一八年二月二八日）

⑥ 大川式土器 市松文変形

⑦ 大川式土器 ネガティブ楕円文

⑧ 大川式土器 山形文

ポジティブ文（近畿圏）

① 福本式土器

図版 29

尖底土器

① 押型文土器

（小林達雄『縄文土器Ⅰ』（日本の原始美術）講談社 一九七九年 三頁より転載。）

② 尖底深鉢

阿賀町室谷洞窟遺跡上層出土 新潟県長岡市教育委員会所蔵

③ 尖底土器

（函館空港ギャラリー展示 著者撮影二〇一八年六月二三日）

④ 深鉢

（「縄文土器とその世界―兵庫の1万年―」展 二〇一九年四月二〇日～六月二三日、

にて著者撮影二〇一九年五月二日）

⑤ 深鉢

（長岡市立科学博物館展示 著者撮影二〇一八年一〇月一八日）

⑥ 高山寺式土器

⑦ 高山寺式土器

⑧ 高山寺式土器

⑨ 高山寺式土器

⑩ 高山寺式土器

(図版 1) 縄文時代の人口の推移

	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	弥 生	土 師
東 北	2000 (0.03)	19200 (0.29)	46700 (0.70)	43800 (0.65)	39500 (0.59)	33400 (0.50)	288600 (4.31)
関 東	9700 (0.30)	42800 (1.34)	95400 (2.98)	51600 (1.61)	7700 (0.24)	99000 (3.09)	943300 (29.48)
北 陸	400 (0.02)	4200 (0.17)	24600 (0.98)	15700 (0.63)	5100 (0.20)	20700 (0.83)	491800 (19.67)
中 部	3000 (0.10)	25300 (0.84)	71900 (2.40)	22000 (0.73)	6000 (0.20)	84200 (2.81)	289700 (9.66)
東 海	2200 (0.16)	5000 (0.36)	13200 (0.94)	7600 (0.54)	6600 (0.47)	55300 (3.95)	298700 (21.34)
近 畿	300 (0.01)	1700 (0.05)	2800 (0.09)	4400 (0.14)	2100 (0.07)	108300 (3.38)	1217300 (38.04)
中 国	400 (0.01)	1300 (0.04)	1200 (0.04)	2400 (0.07)	2000 (0.06)	58800 (1.84)	839400 (26.23)
四 国	200 (0.01)	400 (0.02)	200 (0.01)	2700 (0.14)	500 (0.03)	30100 (1.58)	320600 (16.87)
九 州	1900 (0.05)	5600 (0.13)	5300 (0.13)	10100 (0.24)	6300 (0.15)	105100 (2.50)	710400 (16.91)
全 国	20100 (0.07)	105500 (0.36)	261300 (0.89)	160300 (0.55)	75800 (0.26)	594900 (2.03)	5399800 (18.43)

註) ( )内は人口密度。

[KOYAMA 1978: 56] に訂正を加えた。

小山修三・杉藤重信「縄文人口シミュレーション」

『国立民族学博物館研究報告』9巻1号、1984年、3月、p.6より転載。

注: Shuzo Koyama “Jomon Subsistence and Population”

In Mikiharu Itoh(ed), Senri Ethnological Studies 2,

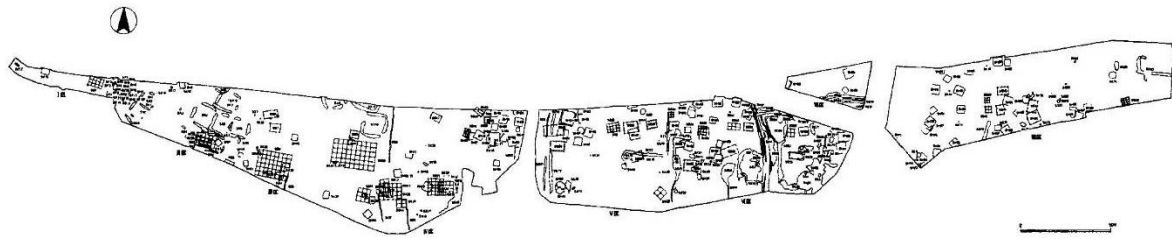
Miscellanea 1, 1978, pp. 1-65

より、小山修三の作成した

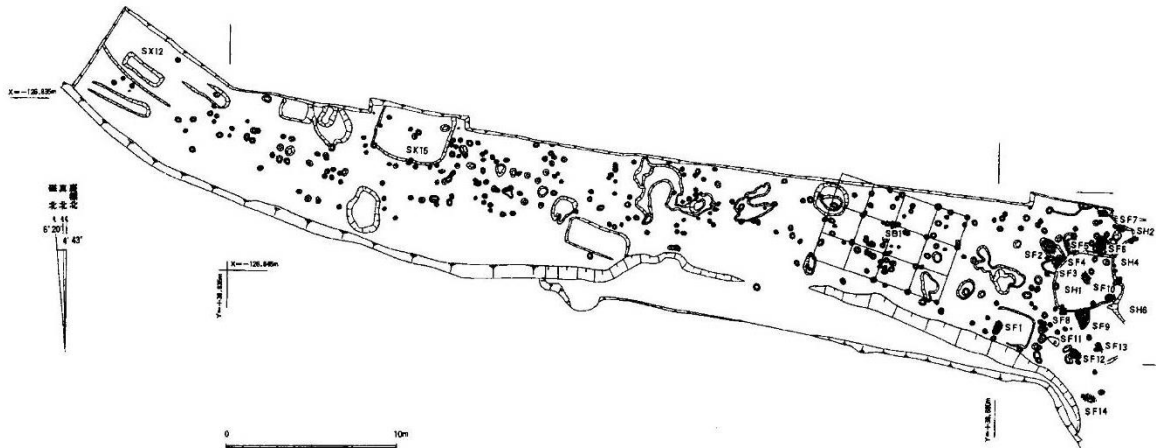
“Table. 33. Prehistoric population estimates for Japan, by region” p. 56を

小山修三が、1984年に訂正。

(図版 2) 大鼻遺跡 早期遺跡の遺構図



(図版 2—①) 調査区全体図 (付図 : 1)



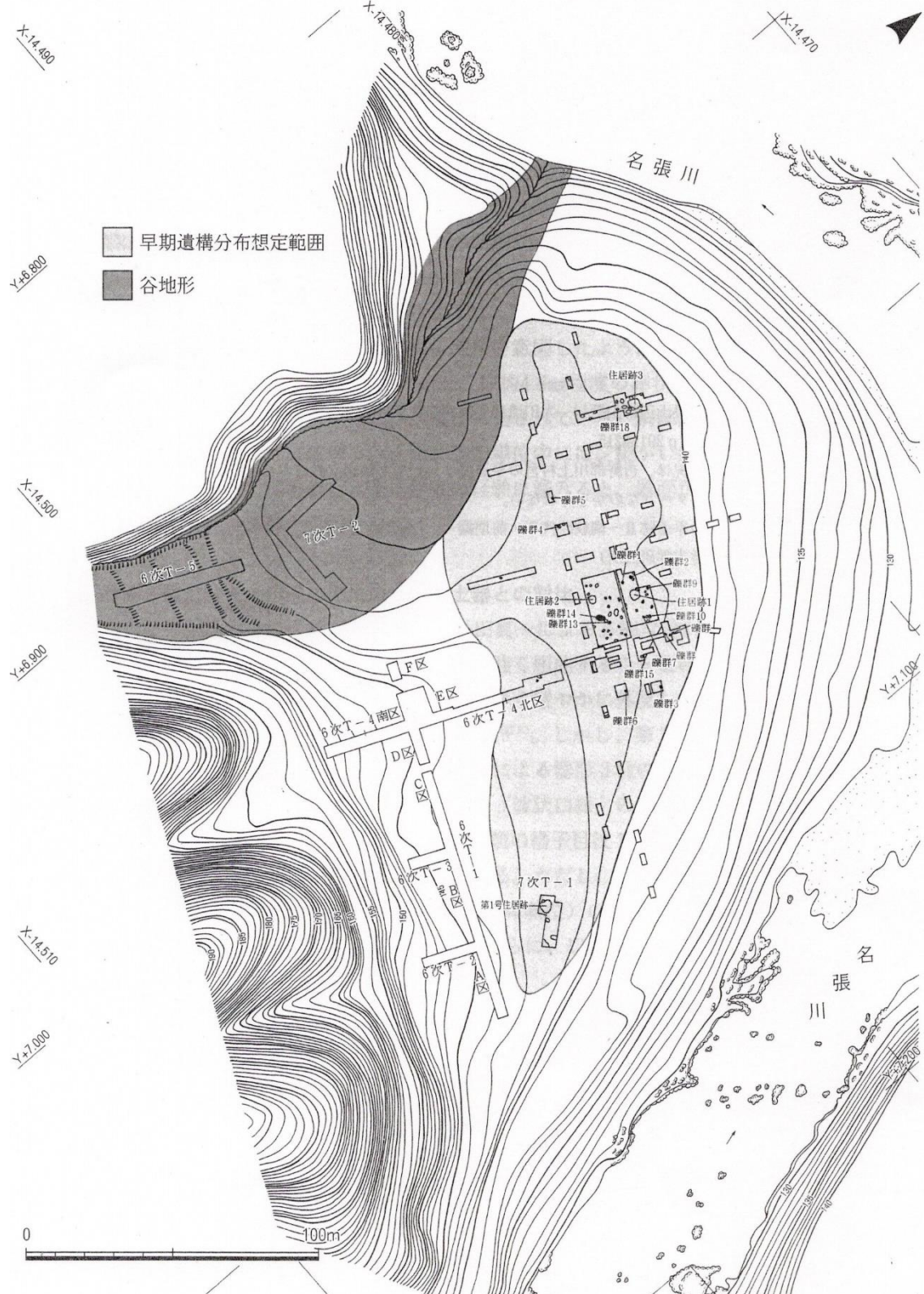
(図版 2—②) I 区全体図 (早期の遺構) (付図 : 2)



(図版 2—③) II 区全体図 (早期の遺構) (付図 : 3)

山田猛ほか『大鼻遺跡 (付図)』付図 1・付図 2・付図 3 (三重県埋蔵文化財調査報告 100-5)  
 三重県埋蔵文化財センター、1994 年、より転載。(大鼻遺跡全体で、この I 区と II 区が早期の遺跡である。)

(図版3) 大川遺跡 早期遺跡分布範囲想定図



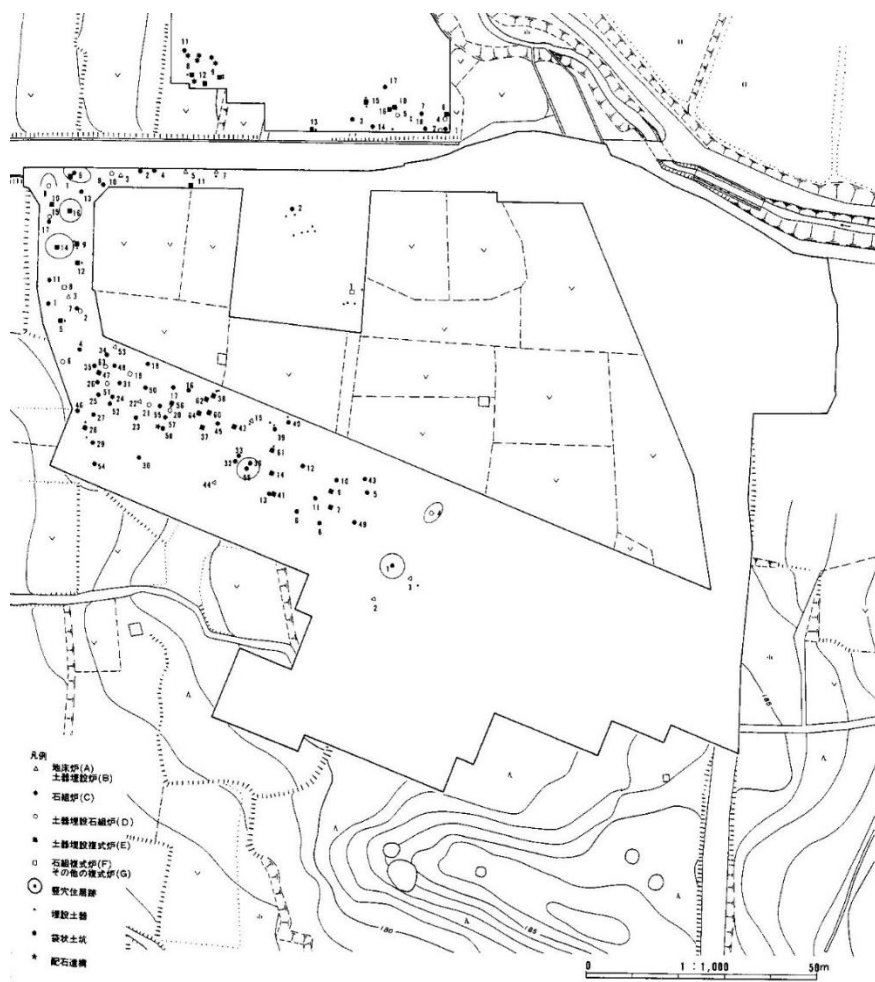
(右側の番号が入っていないトレンチは第2次～5次発掘調査跡)

石井香代子ほか『大川遺跡 6・7次調査—山添村カントリーパーク事業に伴う発掘調査報告書—』第34図  
山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所、2004年、p.45、より転載。

55

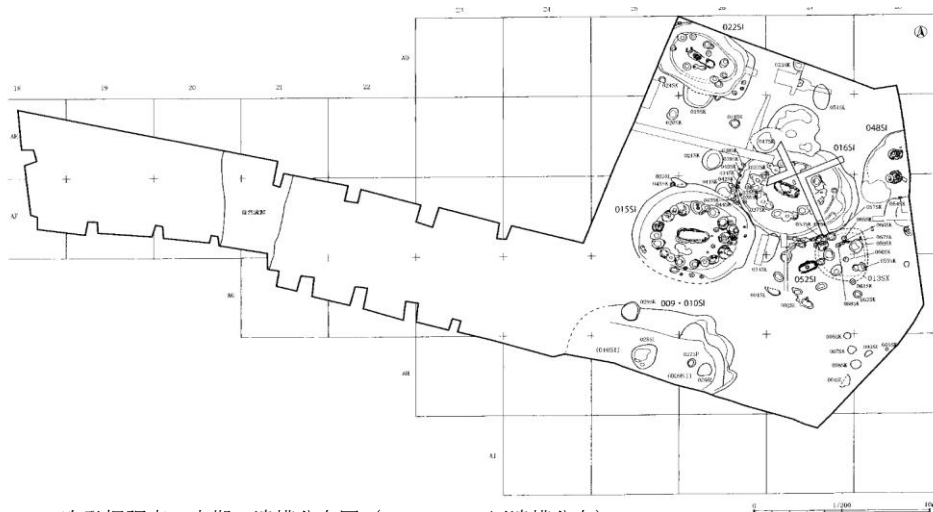


(図版 5) 笹山遺跡 中期の遺跡遺構図



(図版 5-①) 第1～7次発掘調査：中期の遺構分布図

菅沼亘・阿部恭平・石原正敏『笹山遺跡発掘調査報告書』(十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集)  
十日町市教育委員会(文化財課)、1998年、図版1より転載。



(図版 5-②) 第8～10次発掘調査：中期の遺構分布図 (S・T・U区遺構分布)

阿部敬ほか『笹山遺跡発掘調査報告書—第8～10次調査—』  
(十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第55集)、十日町市教育委員会(文化財課)、2016年、図版1より転載。

(図版 6) 井出政男  
土器づくり・煮沸実験データー



(図版 6-①) 井出政男制作  
「千石原遺跡 火焰土器」の模写

『土器づくりの考古学』  
十日町市博物館編集・発行  
2016 年、p. 7 より転載。



(図版 6-②) 井出政男個展 ギャラリー風画 2019 年 7 月 24 (水) ～8 月 11 日 (日)  
井出政男の模写した縄文土器の展示と、土器の煮沸実験結果を展示



(図版 6-③) 煮沸実験の様子  
水 1.5ℓとさといも 300g を入れ煮炊きし、  
煮炊き可能か、何回使用できるかを検証。



(図版 6-④) 水漏れ実験の様子  
土器に水を 1 リットル入れ、漏水時間を計測。  
漏水時間が 115 時間より上ものは煮炊き可能。

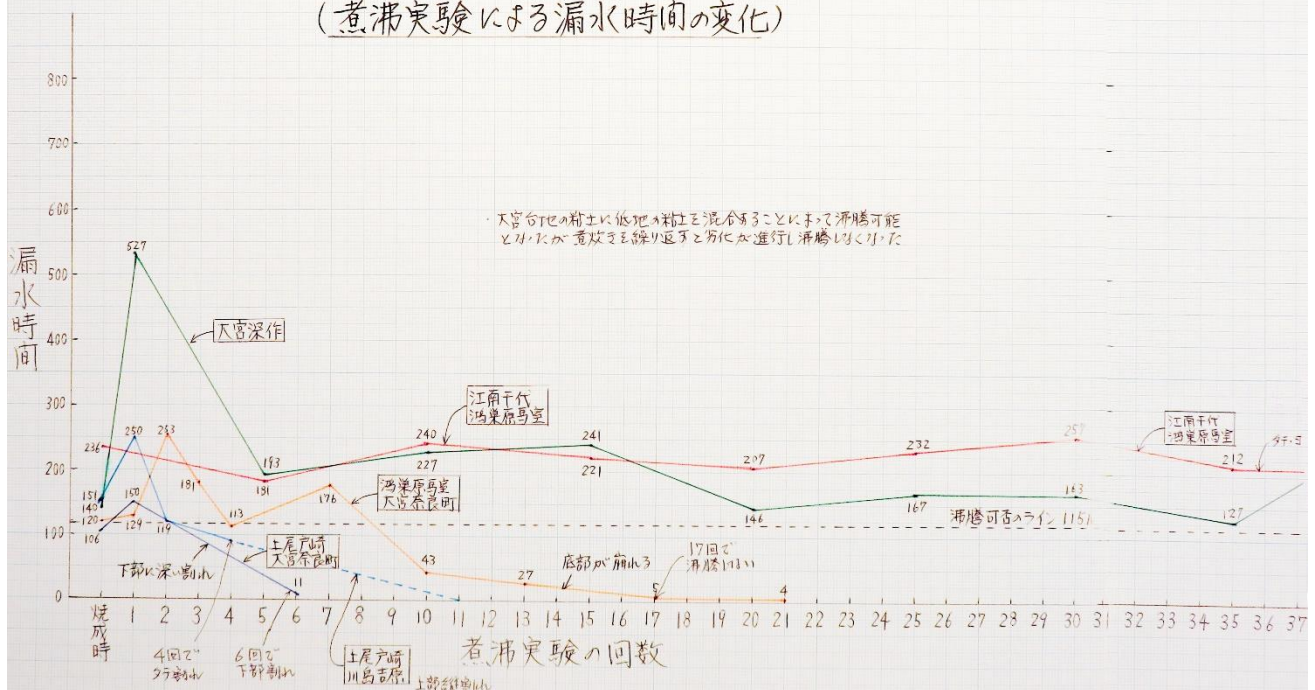


(図版 6-⑤) 土器の使用耐久実験結果による割れた土器  
漏水時間 220 時間：使用回数 25 回

〔述べ 1280 回の煮炊き実験の結果使用限界の平均は、29.3 回という結果を得る。〕



## 土器は何回 煮炊きに使うことができるのか? グラフ② (煮沸実験による漏水時間の変化)



(図版 6-⑥) 煮沸実験による漏水時間のグラフ

表1 単独の粘土で制作した場合の漏水時間の比較

No.	制作に使用した粘土の種類と地層	採取地	粒度	高土の収率	煮炊きの減少率	漏水試験時間	備考
1	東松山 高坂1 灰色	高坂台地	B	15.1	36.7	170	
2	毛呂山 高坂2 灰褐色	毛呂山丘陵	A	9.4	31.9	166	
3	嵐山 平沢2 黄灰色	比企丘陵	A	12.3	33.9	150	上部割れ
4	丸山 須江 下層黄褐色	岩殿丘陵	A	10.0	30.6	147	
5	大宮 深作 灰褐色	大宮台地	B	17.3	41.2	140	
6	嵐山 鎌形 黄褐色	岩殿丘陵	A	12.1	36.4	130	
7	丸山 須江 上層黄褐色	岩殿丘陵	A	9.4	29.0	120	
8	朝霞 浄水場 黄褐色	武蔵野台地	B	8.3	30.0	110	
9	朝霞台 茶灰色	武蔵野台地	B	10.3	32.3	107	
10	滑川 月輪 緑灰色	東松山台地	B	11.6	31.9	105	
11	滑川 土塩 灰白色	比企丘陵	B	13.3	36.7	95	上部割れ
12	嵐山 越田 灰褐色	比企丘陵	C	10.7	28.6	93	
13	東松山 大谷1 灰白色	比企丘陵	B	11.9	36.2	88	
14	所沢 本郷 灰褐色	武蔵野台地	D	7.5	25.6	82	
15	丸山 奥田 灰白色	岩殿丘陵	C	7.3	33.3	80	煮面シメ肌
16	鴻巣原馬室 灰褐色	大宮台地	C	12.0	30.9	51	煮面シメ肌
17	千葉 八幡岡 灰褐色	下総台地	A	14.3	35.1	50	
18	川越 吉田 黄褐色	坂戸台地	A	13.3	39.6	48	上部割れ
19	川島 吉原 黒褐色	荒川低地	D	7.8	31.4	44	上部割れ
20	大里 胃山 茶灰色	栗平台地	C	13.3	35.9	42	煮面シメ肌
21	江南 千代 灰白色	江南台地	A	12.4	35.6	38	煮面シメ肌
22	大宮 中川 上層黄褐色	大宮台地	C	14.0	38.9	27	
23	岩手 北上 滝沢黄褐色	利根川河面	A	12.5	35.7	24	底部割れ
24	大宮 茶良町 下層黄褐色	鶴川低地	D	10.7	36.5	21	煮面シメ肌

(図版 6-⑦) 粘土別による漏水時間の比較データ

繰り返しの煮炊きによる土器の耐久性とその使用限界

制作に使用した粘土	煮沸による漏水時間	土器の使用限界	煮炊きの回数
東松山 高坂	170h	5回 3-5回に煮炊き使用不可	5回 224h
東松山 高坂 + 丸山 鎌形	290h	11回 胴部底部に割れ	回 h
東松山 高坂 + 滑川 月輪	273h	55回 下部に深さ割れ	56回 36h
東松山 高坂 + 東松山 大谷	239h	42回 下部に深さ割れ	46回 119h
東松山 高坂 + 丸山 平沢	150h	(70回) 胴部深さ割れ	回 h
東松山 高坂 + 伊奈小室	122h	41回 全体に劣化	45回 107h
丸山 平沢	150h	55回 全体に劣化	55回 215h
丸山 平沢 + 滑川 月輪	280h	52回 下部に深さ割れ	56回 77h
丸山 平沢 + 丸山 須江1	154h	16回 下部に深さ割れ	16回 121h
丸山 鎌形	130h	22回 下部に深さ割れ	26回 28h
滑川 月輪	105h	6回 下部に深さ割れ	6回 84h
丸山 須江1	147h	36回 全体に劣化	36回 67h
丸山 須江1 + 東松山 大谷	197h	11回 胴部深さ割れ	11回 14h
丸山 須江1 + 丸山 鎌形	188h	(91回) 胴部深さ割れ	回 h
大宮 深作	140h	57回 胴部深さ割れ	60回 59h
鴻巣原馬室 + 江南 千代	236h	62回 下部に深さ割れ	70回 93h
鴻巣原馬室 + 大宮 茶良町	120h	17回 下部に深さ割れ	21回 4h
上尾戸崎 + 川島 吉原	151h	4回 下部に深さ割れ	4回 99h
上尾戸崎 + 大宮 茶良町	106h	6回 下部に深さ割れ	6回 11h
毛呂山 高坂2 + 坂戸 城山小	226h	13回 胴部深さ割れ	回 h
毛呂山 高坂2 + 東松山 高坂	213h	20回 下部に深さ割れ	23回 56h
毛呂山 高坂2 + 丸山 須江1	211h	21回 下部に深さ割れ	23回 38h
毛呂山 高坂2 + 坂戸 永源寺	209h	12回 下部に深さ割れ	12回 108h
東松山 大谷1 + 丸山 川口2	252h	3回 下部に深さ割れ	5回 9h
東松山 大谷1 + 丸山 向田	219h	15回 下部に深さ割れ	回 h

(図版 6-⑧) 繰り返しの煮炊きによる土器の耐久性とその使用限界のデータ

(図版 6-②～⑧) 井出政男 展覧会場にて展示 (ギャラリー風画 2019年7月24日～8月11日)

(図版 6-⑥～⑧) 井出政男 実験結果作成データ (1995年～2019年の統計による)

(図版 6-②～⑧) 著者撮影: 2019年8月8日



(図版 7) 山内清男が分析した、安行式土器（後期）の精製土器と粗製土器の例  
(埼玉県立歴史と民俗の博物館展示 著者撮影 2019 年 8 月 9 日)



(図版 7-①)  
加曾利 B II 式  
左：精製土器  
本庄市東谷遺跡  
埼玉県立史跡博物館所蔵  
右：粗製土器  
さいたま市寿能泥炭層遺跡  
埼玉県教育委員会所蔵



(図版 7-②)  
安行 I 式  
左：精製土器  
右：粗製土器  
さいたま市寿能泥炭層遺跡  
埼玉県教育委員会所蔵



(図版 7-③)  
安行 III b 式  
左：精製土器  
右：粗製土器  
さいたま市寿能泥炭層遺跡  
埼玉県教育委員会所蔵



(図版 8-①) A 群 : 火焰型土器



(図版 8-②) A 群 : 王冠型土器



(図版 8-③) B 群 : 在地で発達した波状形の沈線文が特徴



(図版 8-④) C 群 : 大木式土器様式の影響を受けた土器

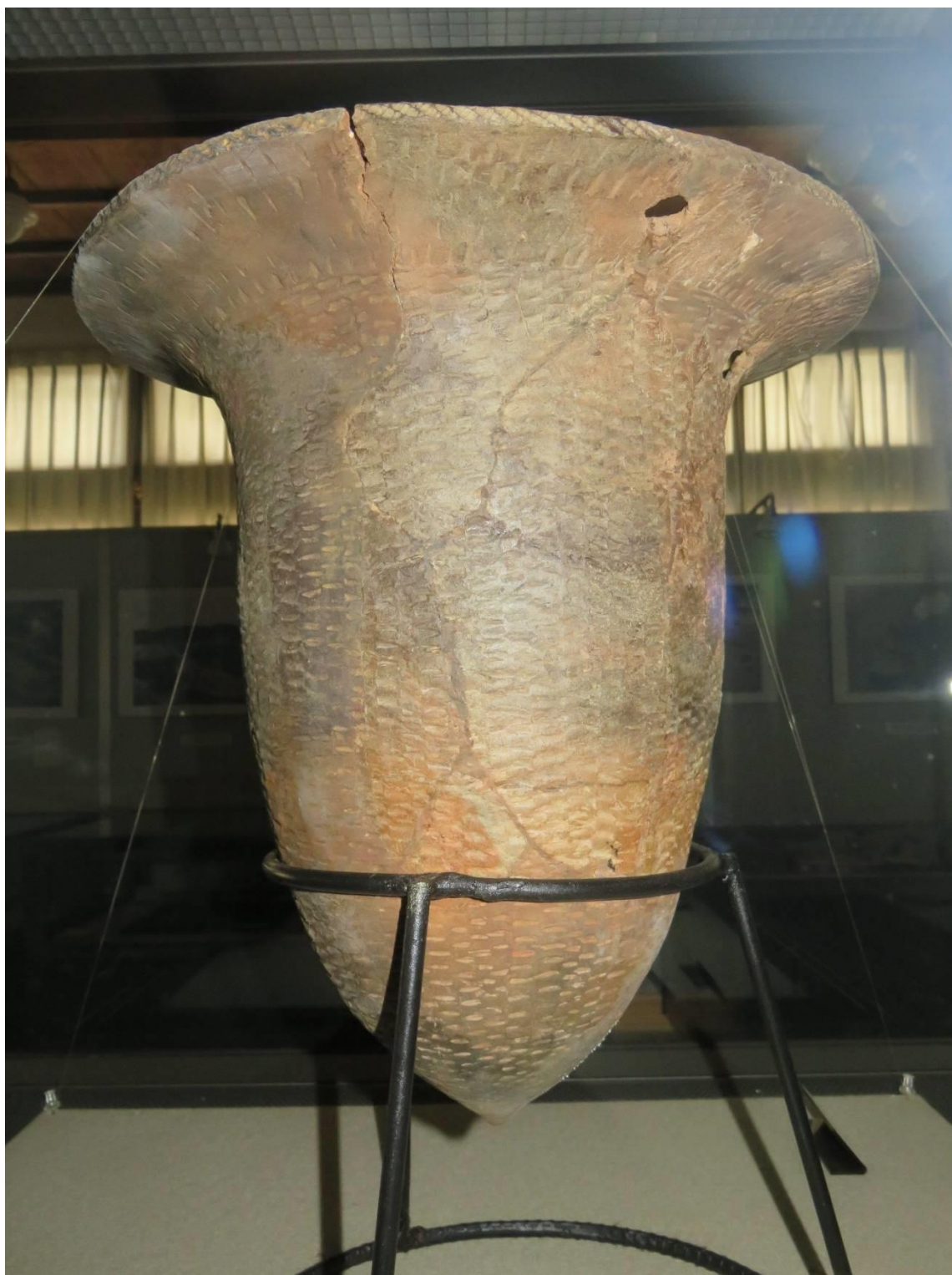


(図版 8-⑤) D 群わずかな縄文のみの施文

馬高遺跡 住居跡VIII E 区第 1 号住居の出土土器の割合  
 A 群 : 7 %  
 B・C 群 : 30 %  
 D 群 : 63 %  
 『火焰土器と馬高・三十稲葉遺跡』  
 (馬高縄文館 解説シリーズNo.1)  
 2010 年、P.6 のデータより。



(図版 9) 大川式土器



(図版 9-①) 大川式土器：第 3 次発掘調査出土土器・No.221 奈良県立橿原考古学研究所蔵

山添村歴史民俗資料館展示（著者撮影 2019 年 9 月 27 日）

口径：31 cm 器高：33 cm 器形：1 C 文様構成：A 3 出土場所：S X 220 の不整楕円系の土坑（70×55 cm）

特徴：口唇部に縄文を施す。文様はネガティブ文 N 5 a で密接施文。口縁部に径 11 mm 穿孔がある。



(図版 9-②) 大川式土器：第 2～5 次発掘調査出土 No.97 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵（同：画像提供）

口径：30 cm 器高：35 cm 器形：1 C 出土場所：住居跡 2

特徴：口縁部に刻目があり、比較的長く外反。横位に 3 条 2 単位の山形文 Y A 3 を施す。

文様構成：頸部に約 3 cm の幅で山形文を縦位に施す。

胴部に前面に全面にネガティブ文 N 4 b、不規則な間隔をあけて、山形文を縦位に施す。

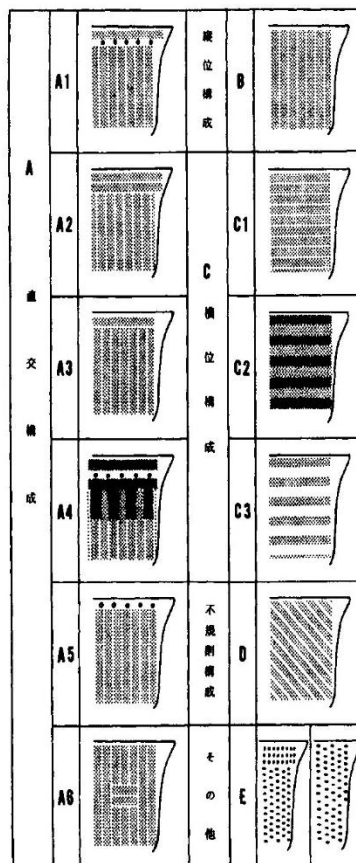
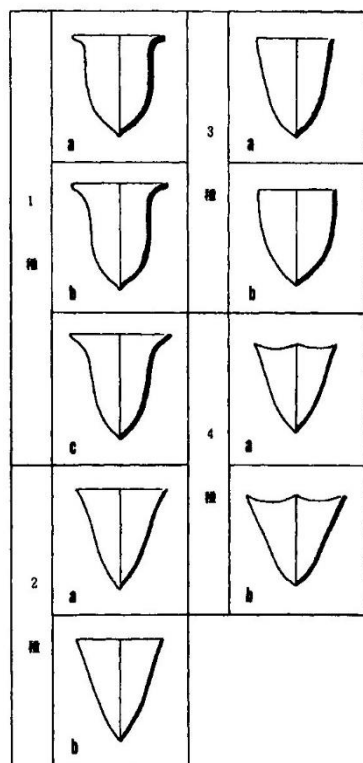
山形文は底部までではない。山型文は途中で段違いになる。





(図版 9-③) 大川式土器：第 2 次発掘調査出土土器 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館所蔵 (同：画像提供)  
口径：30 cm 胴部：20.5 cm 器高：31 cm 壁厚：7 mm 出土場所：A トレンチ

(図版 10) 大川遺跡出土押型文土器  
器形・文様構成概念・復元図



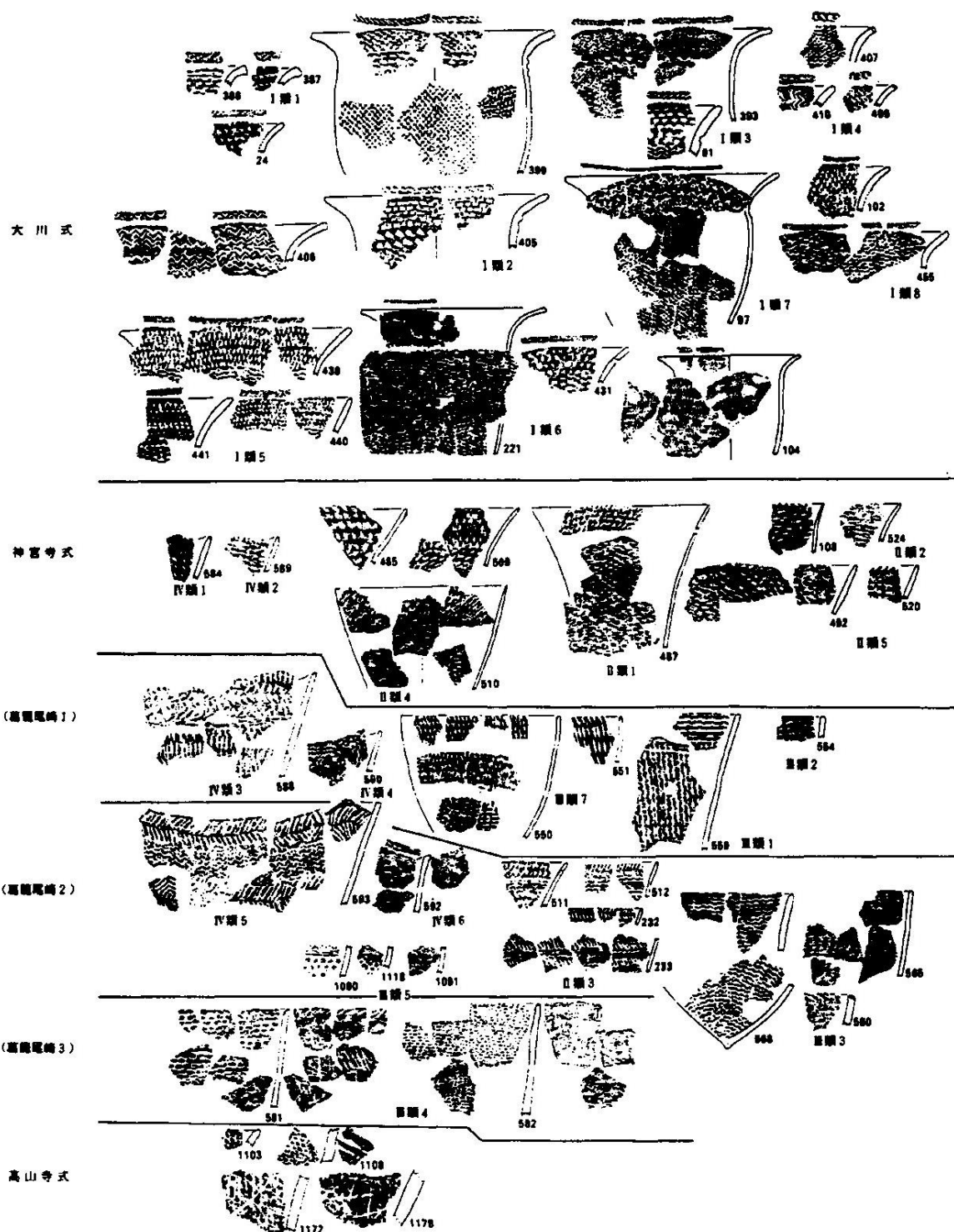
(図版 10-①) 大川遺跡出土押型文土器 器形分類概念図

(図版 10-②) 大川遺跡出土押型文土器 文様構成模式図

分類	I 類								II 類					III 類							IV 類					
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6
器形	1a	1b	1b	1b	1c (1b)	1c (1b)	1c	1c	2a	2a	2a	2b	2b	3a	3a	3a	3b	(3b)	3b	3b	4a	4a	4a	4b	4b	4b
文様構成	A5 (A1)	A1 (A5)	A4	(B)	A2	A3	(A4)	(B)	A3	(B)	C2	A3	B	A3	(B)	C1	C1	C2	C3	E	(A3)	(B)	E	A3	(C2)	(C3)
縄文	●	○	○	△	△	△	○	△																		
市松文	●	●	△	△				△																		
刺突文 1	●	●	○																							
刺突文 2											○												○		○	
刺突文 3																?				○			○			
山形文		△	●	○	○	○	○		○		○	△		○		○	○	○	○					○	○	○
格子目文			○	●		○		△			○		△		○											
ネガティブ文			●	●	●	●	○	●	●	●		●	●	△	○						○	○				
楕円文																		○	○	○						
平行線文 1								?						?											○	
平行線文 2・3																		○								
平行線文 4		?	○																							

注 器形・文様構成の ( ) は変形のものを含む場合と、確実な資料がない場合を示す。文様の種類の●△○は使用される頻度の目安であり、●は多用、△は稀少を示し、○はその中間的な頻度をあらわし、資料の少ない場合は一点でも存在するものを○として示した。

(図版 10-③) 大川遺跡出土押型文土器の分類と文様の関係



(図版 10-④) 大川式出土押型文土器編年表

(図版 10-①) 松田真一ほか『奈良県山辺郡山添村 大川遺跡 縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書』図 10 1  
山添村教育員会 1983 年、p. 73 より転載。

(図版 10-②) 同、図 102、p. 74 より転載。(図版 10-③) 同、表 87、p. 264 より転載。(図版 10-④) 同、図 202 より転載。



(図版 11) 大川式土器の乳房型尖底部分 大川遺跡出土

奈良県立橿原考古学研究所蔵

(資料見学时 著者撮影 2018 年 11 月 28 日)



(図版 11-①) 乳房型尖底部分



(図版 11-②) 乳房型尖底部分



(図版 11-③) 乳房型尖底部分



(図版 11-④) 乳房型尖底部分



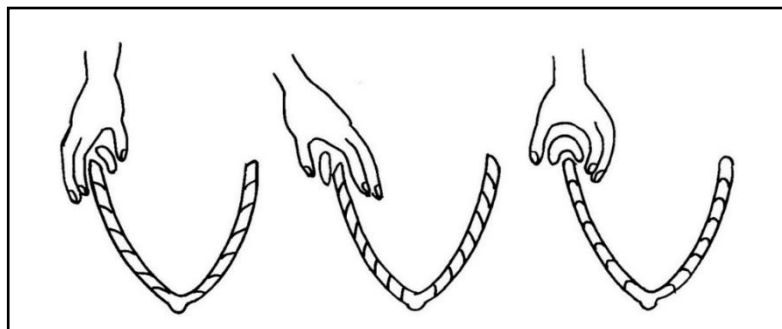
(図版 11-⑤) 乳房型尖底部分



(図版 11-⑥) 乳房型尖底部分



(図版 12) 制作時の粘土のつけ方による、粘土紐の向きの違い (著者作成)



(図版 13) 著者制作：野焼きの際割れた土器

(著者撮影 2019 年 9 月 19 日)



(図版 13-①) 割れた土器



(図版 13-②) 割れた土器断面



(図版 13-③) 割れた土器断面

(図版 14) 大川式土器：粘土紐の向きがわかる土器片断面 大川遺跡出土

奈良県立橿原考古学研究所所属（資料見学時 著者撮影 2018 年 11 月 28 日）



(図版 14-①) 粘土紐の向きがわかる土器片断面



(図版 14-②) 粘土紐の向きがわかる土器片断面

(図版 15) 大川式土器・No.1182 大川遺跡出土

奈良県立橿原考古学研究所所蔵

(資料見学時 著者撮影 2018 年 11 月 28 日)



(図版 15-①) No.1182 (表面)  
上から下へ形を整えた跡がある。



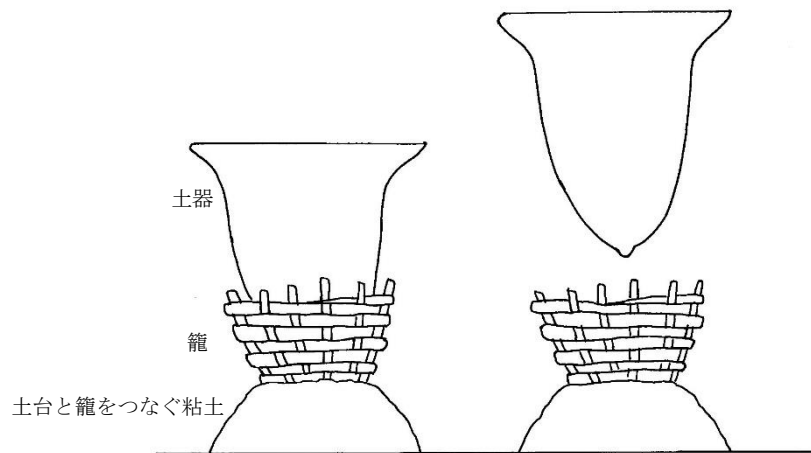
(図版 15-②) No.1182 (裏面)  
上から下へなでつけた跡がはっきりわかる。  
穴の下が、尖底の先端であるが、内側から  
指で押して突き出し、形を整えた様子が  
うかがえる。



(図版 15-③) No.1182 (断面)  
粘土紐の傾斜が内側に向いてるのが  
明確にわかる。



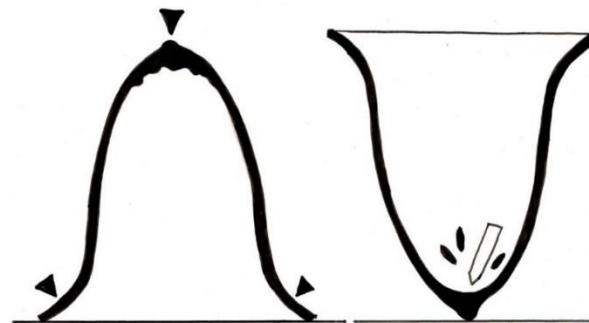
(図版 16) 大川式土器制作の考察 (著者作成)



(図版 16-①) 籠作り成形法

籠を土台にして作る方法

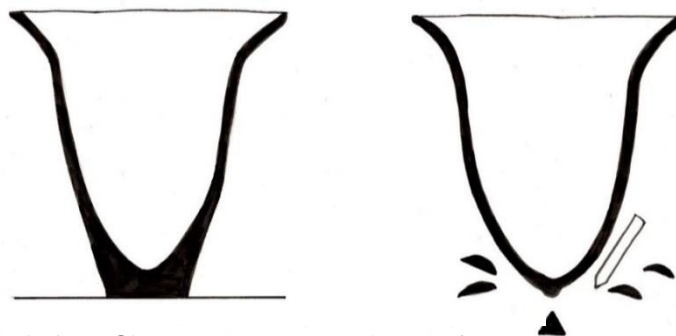
籠を土台にし、土器を最後まで立ち上げ、型から外して施文する。



(図版 16-②) 逆さ造り成形法

口唇部から作っていく方法

これだと、▼の部分に不備がでる。尖底の内部を削るのは不自然。  
口唇部のカーブが過重に耐えられない。



(図版 16-③) 底を平底で作った後、削り出す方法

まず平底を造っておき、後で削る。

制作過程に尖底の乳房状の意味がなくなる。

大川式土器には、先端は削った跡がない。

(図版 17) 大川式土器制作実験 (著者制作: 撮影)



(図版 17-①) 薪の準備。

2017 年 4 月 1 日



(図版 17-②) 粘土の採集。

2017 年 11 月 27 日



(図版 17-③) 不純物の除去作業。

2018 年 1 月 16 日



(図版 17-④) 施文具作り。

2018 年 1 月 16 日



(図版 17-⑤) 砂を粘土に 2 割混ぜ、練り合わせる。2018 年 2 月 4 日



(図版 17-⑥) 土台の籠を藤ヅルで制作。2018 年 2 月 22 日





(図版 17-⑦) 籠の土台を固定させ、内側に粘土を付け、凹型を作る。 2018 年 5 月 20 日



(図版 17-⑧) 内側に絶縁体になる細かい砂をつけ、底から粘土を張り付けていく。2018 年 5 月 20 日



(図版 17-⑨) 口縁部のくびれまで立ち上げ、半日乾かす。 2018 年 5 月 21 日



(図版 17-⑩) 口縁部を立ち上げる。 2018 年 5 月 22 日



(図版 17-⑪) 半日乾かし型から抜き、胴部に施文具を転がし施文する。2018 年 5 月 22 日



(図版 17-⑫) 口唇部に割りばしの先で施文する。 2018 年 5 月 22 日



(図版 17-⑬) 5 日乾かし、野焼きする。2018 年 5 月 27 日



(図版 17-⑭) 完成。 2018 年 5 月 28 日



(図版 18) ゆがみのある火焰型土器



(図版 18-①) 火焰型土器 十日町市指定文化財  
新潟県十日町市 野首遺跡  
十日町市博物館所蔵  
土器全体が、右に大きく傾いている。

(「火焰型土器と西の縄文—京都大学総合博物館 平成 29 年度特別展—」  
2017 年 9 月 9 日 (土) ~10 月 22 日 (日) 京都大学総合博物館にて、  
著者撮影 2017 年 9 月 21 日)



(図版 18-②) 火焰型土器 国宝  
新潟県十日町市 笹山遺跡  
十日町市博物館所蔵  
全体に表面の仕上げが大ざっぱで粗い。  
(同左)

(図版 19) 安定感を感じる火焰型土器



(図版 19-①) 火焰型土器 国宝No.1  
新潟県十日町市 笹山遺跡  
十日町市博物館所蔵

(石原正敏『国宝「火焰型土器」の世界笹山遺跡』  
(シリーズ「遺跡を学ぶ」124) 新泉社、2018 年 p. 21 より転載。)



(図版 19-②) 火焰型土器 国宝No.6  
新潟県十日町市 笹山遺跡  
十日町市博物館所蔵  
(同左、p. 24 より転載。)

(図版 20) ゆがみが見られる土器



(図版 20-①) 有孔罽付土器 井戸尻遺跡 3 号住居址  
富士見町井戸尻考古館所蔵  
(著者撮影 2019 年 8 月 10 日)  
上部半分が右へ大きく歪んでいる。



(図版 20-②) 深鉢 広原遺跡 3 号小竪穴  
富士見町井戸尻考古館所蔵  
(著者撮影 2019 年 8 月 10 日)  
口径部が歪んでいる。



(図版 20-③) 深鉢 井戸尻遺跡 3 号住居址  
富士見町井戸尻考古館所蔵  
(著者撮影 2019 年 8 月 10 日)  
全体にゆがみが見られる。



(図版 20-④) 深鉢 中期・藤内式期 古林第 4 遺跡 (大泉町西井出)  
北杜市教育委員会所蔵 北杜市考古資料館展示  
(著者撮影 2019 年 8 月 9 日)  
上部が右に歪んでいる。



(図版 21) 打越遺跡の早期・前期の土器 富士見市立水子貝塚資料館所蔵 (著者撮影 2019 年 8 月 9 日)



(図版 21-①) 早期の土器 下左から：打越式土器中段階（打越遺跡第 131 号土坑）・打越式土器中段階（打越遺跡第 69 号住居跡出土）・打越式土器中段階（打越遺跡第 55 号住居跡）  
上左から：下沼部式土器（氷川前遺跡）・打越式土器新段階（氷川前遺跡）



(図版 21-②) 前期の土器 花積下層式土器（打越遺跡）5 個すべて

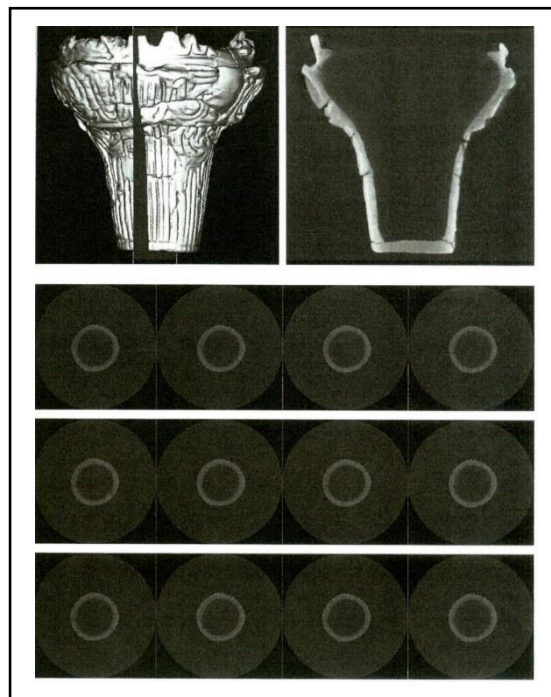


(図版 22) 文様の剥離した火焰型土器  
新潟県三条市吉野屋遺跡出土 (捧正夫氏)



西田泰民・宮尾亨「透視術」吉田邦夫編  
『アルケオメトリアー考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る―』  
東京大学総合研究博物館、2012 年、p. 124、より転載。

(図版 23) 火焰型土器の C T 画像 (上: 立断面 下: 断層)  
新潟県長岡市馬高遺跡出土土器 (東京大学文学部列品室)



同左、p. 125 より転載。

(図版 24) 火焰型土器の破片 新潟県津南町教育委員会所蔵

(「縄文土器とその世界—兵庫の 1 万年—」展 2019 年 4 月 20 日～6 月 23 日  
兵庫県立考古博物館にて、著者撮影 2019 年 5 月 11 日)



(図版 24-①) 火焰型土器破片 (1)



(図版 24-③) 火焰型土器破片 (2)

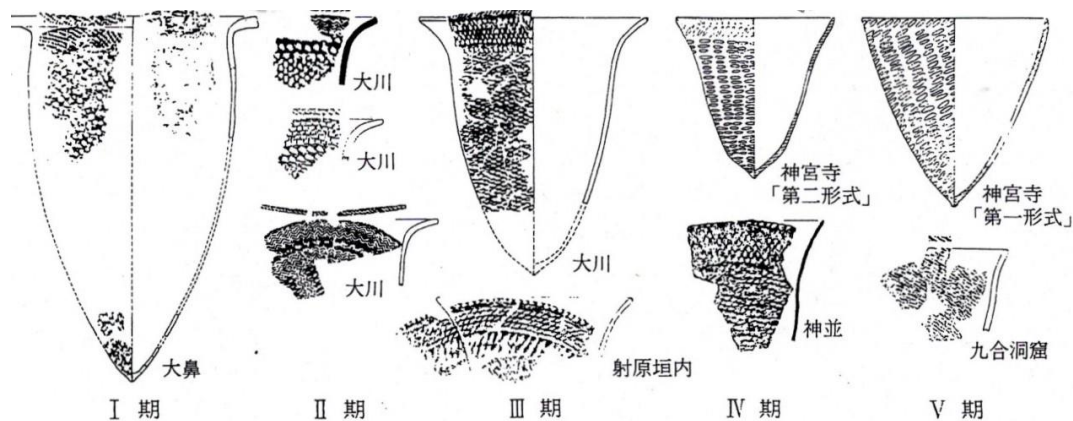


(図版 24-②) 火焰型土器破片断面 (1)

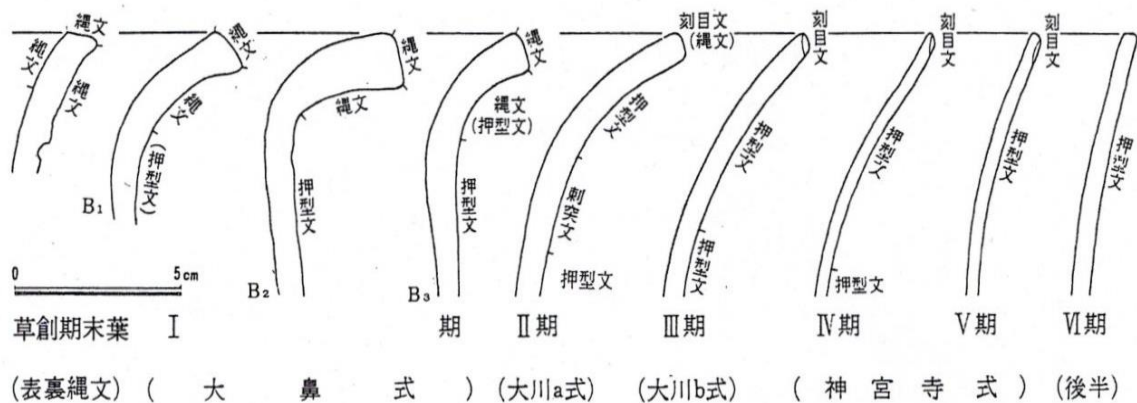


(図版 24- ④) 火焰型土器破片断面 (2)

(図版 25) 押型文土器の編年試案—近畿地方の前半期を中心として—



(図版 26) 口縁部変遷模式図



(図 25・26) 山田猛「押型文土器群の型式学的再検討—三重県下の前半期を中心として—」  
『三重県史研究』第四号、三重県総務部学事文書課、1988 年 3 月、p. 57、より転載。



(図版 27) ネガティブ押型文土器 (近畿圏)



(図版 27-①) 大鼻式土器 大鼻遺跡  
三重県埋蔵文化財センター保管  
(三重県埋蔵文化財センター画像提供)



(図版 27-②) 大川式 a 式土器 鴻ノ木遺跡  
三重県埋蔵文化財センター保管  
(三重県埋蔵文化財センター画像提供)



(図版 27-③) 神宮寺式土器 神並遺跡  
東大阪市郷土博物館所蔵  
(著者撮影 2018 年 3 月 20 日)



(図版 27-④) 大鼻式土器  
枝回転文  
三重県埋蔵文化財  
センター保管  
(資料見学时 著者撮影  
2017 年 12 月 25 日)



(図 27-⑤) 大川式土器  
市松文



(図版 27-⑥) 大川式土器  
市松文変形



(図 27-⑦) 大川式土器  
ネガティブ楕円文



(図 27-⑧) 大川式土器  
山形文

(図版 27-⑤⑥⑦⑧) 奈良県立橿原考古学博物館所蔵  
(資料見学时 著者撮影 2018 年 11 月 28 日)

(図版 28) ポジティブ文 (近畿圏)



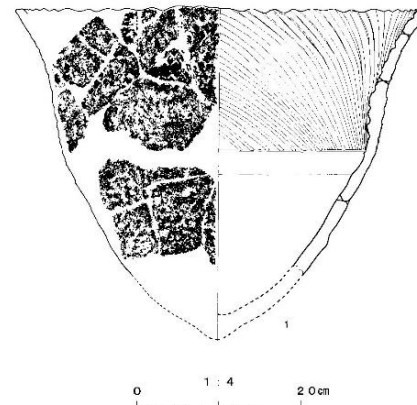
(図版 28-①) 福本式土器 兵庫県福本遺跡  
神河町教育委員会蔵  
(「縄文土器とその世界—兵庫の1万年—」展  
2019年4月20日～6月23日  
兵庫県立考古博物館にて、著者撮影 2019年5月11日)



(図版 28-②) 高山寺式土器 神戸市都賀遺跡  
器高：20.5 cm  
神戸市教育委員会蔵  
(同左)



(図版 28-③) 高山寺式土器 奈良市布留遺跡  
埋蔵文化財天理教調査団蔵  
(著者撮影 2019年6月17日)



(図版 28-④) 高山寺式土器 奈良市布留遺跡  
口径：50 cm 器高：40 cm  
埋蔵文化財天理教調査団蔵  
太田三喜ほか『奈良県天理市布留遺跡豊井（打破り）  
(考古学調査研究中間報告 2.9) 埋蔵文化財天理教調査団、  
地区発掘調査報告書』p. 134 より転載。



(図版 28-⑤) 大川遺跡  
奈良県立橿原考古学研究所蔵



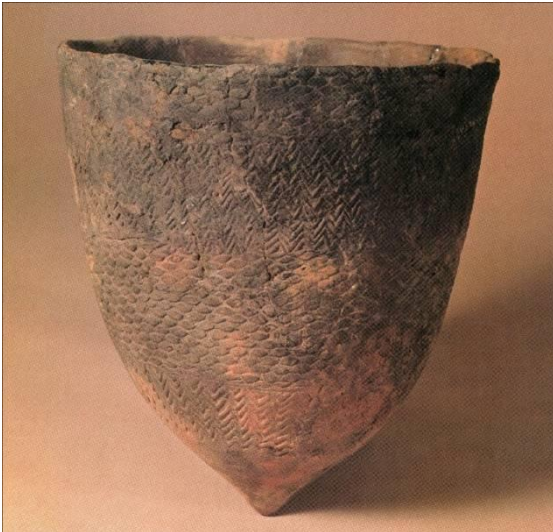
(図版 28-⑥) 大川遺跡  
奈良県立橿原考古学研究所蔵  
(図版 28-⑤⑥資料見学时 著者撮影 2018年11月28日)



(図版 28-⑦) 高山寺式土器 布留遺跡  
埋蔵文化財天理教調査団蔵 (著者撮影 2019年6月17日)



(図版 29) 尖底土器



(図版 29-①) 押型文土器 新潟県卯ノ木遺跡  
新潟県長岡市教育委員会蔵  
小林達雄『縄文土器Ⅰ』(日本の原始美術1)  
講談社、1979年、p.9より転載。



(図版 29-②) 尖底深鉢 貝殻沈線文土器  
阿賀町室谷洞窟遺跡上層出土  
新潟県長岡市立教育委員会蔵  
長岡市立科学博物館展示  
(著者撮影 2018年10月18日)



(図版 29-③) 尖底土器  
中野B遺跡出土  
函館市蔵  
函館空港ギャラリー展示  
(著者撮影 2018年6月13日)



(図版 29-④) 深鉢 佃遺跡 (兵庫県淡路島)  
兵庫県立考古博物館蔵  
(「縄文土器とその世界—兵庫の1万年—」展 2019年4月20日～6月23日  
兵庫県立考古博物館にて、著者撮影 2019年5月11日)



(図版 29-⑤) 深鉢 佃遺跡 (兵庫県淡路島)  
兵庫県立考古博物館蔵  
(同左)